263.5
146

0045288000

0045288-000

263．5－146

思想の民族的発展と修身教育

渋谷義夫・著

啓文社

昭１２

AHF

エト5J-2

東京女高師前教授
現在帝國博物館技師
澁谷義夫著

思想民族的發展と修身教育

東京　啓文社出版

昭和十二年六月　帝國圖書館藏

263.5
146

序

私は現在自分の得意でない中等教育に廻つてゐるのであるが、自分は水い間東京女子高等師範附屬小學校で厄介になつた關係から自分は中等教育も義務教育の延長に過ぎぬと考へて居る。教育は今少し教師方をして教材に捕はれずに生徒の心身の發達を考慮し取り扱方を科學的にし、日本精神に根ざした師道に賴らねばならぬものと信ずる。然しながら此の樣な眼を持つて初等教育を振り返つて見ると、私自身にも修正すべき幾多の立脚點ある事を知り、同時に今日の我が國の狀態からして自覺せねばならぬ或るものゝあることを知り敢て本書を公にした。

世界に於ける思想の動きを知り、其歸着點を知つて自から立つは今日程必要なことは無いであらう。私は此の意味からして人間性と云ふものから見直ほして行くことが必要であると思ふのであるが、今は此の點に觸れることなく、各民族思想の歸結する所を見て日本精神の位置を知り、これに基いて德育の方案を立て、それに依つて修身教授を進めて行かうとするのである。

本書を物するに當つてブントの民族と其哲學、パウルバルトの教育及び教授法の基礎なる書物、其他筧博士の皇國精神講話、紀平博士著日本精神、藤澤親雄氏著「日本の思想的獨立へ」等

目次

第一章　黎明の訪れ……一
第一節　新世界觀の成立……一
第二節　自覺の時代……六
第三節　自覺の方法……一三
第二章　伊太利の復古思想とファッシヨ……二一
第一節　文藝復古運動……二一
第二節　伊太利精神の建設……二六
第三節　ファッシヨ運動……三一
第三章　佛國を舞臺とせる近代思想の展開……三五
第一節　佛蘭西思想……三五

の御蔭を蒙ることが少くない。本書により私が前に公にせる拙著の中の誤を正し得たのは此等の諸先生と岩手縣知事石黒先生の御示しによる所と感謝して止まぬ次第である。引用の箇所は括弧を附し頁數書名を明にして置いた。淺學卑才未だ末熟な著ではあるが讀者が民族思想の動向の一端を知られ、我を振り返つて、奮然讀者自からが自からを重んじ、各自の分を通して世界をひつさげ追ひ進む上の一助ともされるならば私の本望である。

著者誌す

第二節　フランス思想の特徴と我國に及せる影響……六三
第四章　英國思想と我が國民思想……七〇
第一節　英國思想の概觀……七〇
第二節　英國精神と日本精神の對稱……一二八
第五章　獨逸哲學……一四三
第一節　歐洲新思潮の概觀……一四三
第二節　獨逸哲學の特徴……一四五
第三節　獨逸精神指導者としてのライブニッツ……一四七
第四節　カント、フイフテについて……一六一
第五節　理想主義の特徴……一七六
第六節　ヘーゲルについて……一八七
第七節　ショウペンハウエルについて……一九五

第八節　ニイチエについて……二〇二
第六章　歐米諸民族の感情的特徴……二一七
第一節　國歌の示す所のもの……二一七
第二節　フランスは光榮と名譽を求む……二二三
第三節　獨逸國民の需むる所……二三〇
第七章　最近の西歐思潮の傾向……二四四
第一節　概觀……二四四
第二節　ボルシエビズムの誤謬と日本精神……二五六
第三節　再びファシズムに就いて……二六六
第四節　ナチスの政治思想と教育思想……二七五
第八章　日本精神と其内容……二八〇
第一節　日本精神の特徴……二八〇

第二節　むすび（產靈）……二九六
第三節　教育勅語と日本精神……三〇五
第四節　教育勅語の趣旨……三一五
第九章　修身教授方法上の實踐原理……三二一
第一節　修身教授の舊形式……三二一
第二節　修身教授を活潑適切ならしむる上の一考察……三三七
第三節　現代に於ける修身教授方法……三四〇
第四節　作業教育思想と體驗教授……三四八
第五節　體驗教授の形式について……三五五
第一項　現實的體驗と間接的體驗……三五五
第二項　修身教授上の例話取扱法……三五八
第一　說　話……三五八

1.　修身教授と教科書……三五九
2.　直觀的說話と教材の現代化……三六〇
3.　教師の系統的說話と兒童の參加……三六一
4.　例話脚色の必要……三六三
5.　說話の種類……三六五
一、寓話について……三六六
二、傳說、童話の本質……三六九
三、假　話……三七八
第二　修身關係教材としての藝術……三七九
第十章　修身作業教育法……三八二
第一節　作業原理……三八二
第二節　徹底の原理……三八八
第三節　共同社會的原理……三九二

第十一章　作業實踐原理の適用とその注意……三九六
第一節　下學年修身教授上の要求……三九六
第二節　說話構成法……四〇二
第一項　性格（キヤラクター）の型に就いて……四〇六
第三節　劇的展開の三段階……四一二
第一項　願望の爭を惹き起す境地……四一三
第二項　思考を起さしめる所のもの……四一五
第三項　爭の型式……四一六
第四節　實話取扱上の注意……四一八
第一項　德の內容の鮮明……四一九
第二項　境地の鮮明……四二一
第三項　性格の說明……四二六
第五節　格言の取扱方について……四二八

第六節　公民的教材取扱上の注意……四三〇
主要參考書……四三二

（終り）

思想の民族的發展と修身教育

第一章　黎明の訪れ

第一節　新世界觀の成立

近代世界を展開し來り今日の文明の基を開いたものは何と云つても文藝復興に其誕生を求めなければならぬ。どんなにして文藝復興は起つたか、どうして其最後に、哲學なるものが出て來たのか。遠き他山の石を鑑になして、我が身の性質を見て行く上の方便として行き度い。我が民族の理想を明にして行き、これに基く修身教育を述べて行かうと思ふのである。

西歐にては文藝復興以後基督教主義の世界觀とは異つた世界觀が起つて來た。此の新世界觀は

あらゆる形に變化して行つたが、其新世界觀は忘るべからざる印象を世人に與へたのである。此の樣な考を有して居た人として略同時代の三人の獨逸人を思ひ出す。其第一人は、クーエスのニコラス、であつて、始めて絕對量に於ける無限と云ふものを理解した人であつた。此の觀念が最もよく古代思想と近代の思想とを區別するものだと云ふことを得るのである。

古代思想に反對した無限思想と云ふのは次の如きものである。古代思想では自然の秩序なるものは、宇宙の調和的美から其名を導き出したものであるとして觀たのであるが、近代思想からすれば宇宙を單なる一斷片であり、斷片の全體であるとして觀るに到つた。現代の人々の有する此の考へとピタゴラスの宇宙觀とは恰も中世の基督敎の天上の殿堂と明に地上に建築されたギリシアの殿堂建築に對する樣な關係に立つて居る。冥想から出て來た殿堂と地上にて設計し建築し得るものとの相違がある。一四六四年ローマ大僧正として其終を全ふしたるクーエス生れのニコラスとヒルテンクナーベンの間には殆んど百年の距りがあり、エルメランド生れの法王、ニコラス●コペルニカスの間にも百年の距りがある。コペルニカスは數學の研究から新世界觀を造るに到つたのであり、其新世界觀は彼の名が付けられて居るのである。超感覺的な世界の冥想に耽るものに古代と云ふ名をつけて居るのであるが、かゝる人々は彼に反對した。此等の人々の考へて

居る世界は、古代人の考への如く固定せる天上が世界の限界であつた。

此の冥想的な思想に對して彼は非常に有意義な思想を持つて居た。そして此の思想を實際に有効に使つて見てこれを理解したとした。卽ち現象相關の思想を次の二重の意味で始めて有効に使用したのであり、理解するを得たのであつた。卽ち一つは現象相互間の運動に於ける運動相關の原理として、二は認識主觀に對する現象相關の原理として初めて有効の結果を納めたのであつた。此の二つの原理は無限觀念と同じく有効な考へである。第一のものは今日の物理學に深い影響を與へて居る。第二のものはカントと深い關係を持つて居る。卽ちカントは其認識論の改良をコペルニカス的轉回と呼んで居るのを見ても分る所である。此の二人の新思想家の他に第三の代表者が現はれて來た。其人は人々から大に嘲られ永い間誤解されたて居たテオフラスタス●パラセルザスである。彼は世に見捨てられた醫者であつたが治療方法の改良者であつた。其上彼は先に述べた二人の考へ、特に世界全體について彼等が到達した考へにまで、全然別の道から到達するに到つた。

此の人の考へには尙一部分に其時代の鍊金術及び天文學的假定が見出されるのである。然も消へ去ることの無い傳說から新プラトウ的な考が多く加つて居る。然も旣に一世紀も前からエツク

ルハルトやその門弟の人々の豫言の中には、此の考が非常に大きな包括的な地文學的思考として心理論やそれから特殊化されて出て居る宗教の中に、此の考が受け取られて居る樣にパラセルザスにも彼の考へ方の許容する限りに於て、此の宗教が哲學的理會の中に再び導き出されて來て居るのである。其故に彼は人間の精神を小宇宙として觀察したのであつた。其小宇宙は單に外形のみならず同時に其本質も又世界であつて、世界には人間それ自から見出さる如き精神力を藏して居るに相違ないと觀察した。かくの如くして小宇宙としての精神は無限の理念及び相關の念と共に第三の多くの影響を與へた新時代思想なるものを生じた。即ちモーナードの思想とか、此の考と結合して居る物質の本質の精神的說明と云ふ考へ方を發達さしたのであつた。

然も此の初期の獨逸に於ては常に個々の新しい思想家が新らしい哲學を生んで居たのであつた。此の樣な思想家は、其當時に於ても又來るべき其次の時代に現はれても、其思想家は新世界觀と云ふ特徵を持ち出したに相違ないのであり、此の特徵を帶びた考へ方をしたに相違ない。恰も其考へ方が次の世紀の精神的發達に道を示す如くに一つの哲學の建設に對し指導となる觀念を作つたのであらう。其哲學が、離れ離れになつて居る此等の思想を或る全體に統一するには未だ時が熟して居なかつた。然し哲學の發展があるならば、個々の科學の發展に關係があると云ふよ

り、國民一般文化の發展と關係する所が深いであらう。若し此の一般文化の外的分量が言語であるならば、以上の言は一つの眞理であるであらう。國民の言語は先づ詩に滲透し次に科學に深く入るものであるから、言語は民族の精神的特徵を同時に現はして居るものであると云つてよい。新哲學の中古哲學に對する特徵は新哲學がそれに於て民族の精神的特徵を現はす樣に自己規定されて來た點にある。「人の有する哲學は其人がどんな人であるかと云ふことを示すものだと云つたフイフテの言葉は先づ第一民族の上に當て嵌めることが出來るのである。此の特徵はラテン語が尙哲學並に科學一般に盛に使用されて居た時代から始まつて居る。此の特徵は其民族が自國語を使用し始めて明瞭に現はれて居ると。夫によつて吾々はライブニツツが其當時他國では自分等の民族的な考を主とした自立的な哲學が打ち立てられんとして居るのに、然もその運動が早くから起つて居るのに獨逸ではまだスコラ哲學が盛に行はれて居る」と云つて歎いたが、吾々はよく此の歎を了解することが出來るであらう。

「夫故に歐洲文明國民が新哲學の發達に貢獻した道行通りに、新思想が各國民を支配せるを見る。其始は、一般文化に歐洲最舊のイタリーが指導者となつた。次に此の指導者たるの權は佛國に移つた。最後に多少遲れて英國に移つた。更にそれは獨逸に移つた。或る時代には他の民族の

高い哲學的事業の前に獨逸は屈したが、此の思想指導の權は最後には獨逸に移つた。此の前後すると云ふ意味で、然も互に分離しないといふ意味で人は能く哲學のイタリー時代、佛蘭西時代、英國時代、獨逸時代と云ふことが出來る。」とはブントの言葉である。

然しながら建國以來非常に大きな包容力ある思想を持ち、儒教、佛教を同化し來つて今又歐米思想を同化し終り、やがては眼醒めて自己を知り自己の本質について特徴を知り、自己に立脚した哲學に基いて、國民の精神を鍛へ上げやがて來ん時代に備ふべき時は來た。

註一、ニコラスクザーヌスは一四〇一年トリエル在のクーエスに生れ、ブリクセンの大僧正として一四六四年に死んで居る。黎明期の哲學者である。

註二、ニコラスコペルニカスは一五四三年に天動説に對して地動説を稱導した哲學者である。

註三、テオフラスタス（ボムバスタス）パラセルザスは一四九三年に生れ一五四一年ザルツブルグにて死せる人である。

第二節　自覺の時代

前節に述べる如くさすがに十九世紀の文明を統括し得たる精神科學の大家の識見は偉いものだ

と云ひ得る。新思想が各國民を支配した順序に一般文化の指導權が移つて行つたとしてイタリーが先づ歐洲を牛耳り、次に佛蘭西となり英國となり、獨逸となつたとして居る。然しながら此の新思想たるや文藝復興と云ふ近代思想の一に就いて述べたものに過ぎない。而してギリシヤに復古することに依つて文化指導の權を先づ獲、これを發展せしめることに依つて文化指導の權が移つて行くとしたのは確に卓見中の卓見であらう。

我が國は如何。我が國は德川幕府の末葉に於てよく儒佛の二教から離れて國學の研究となり神武の古に歸らんと努めて來た。其處へ系統を異にした、然も近代文明を指導する新思想が種々の流を作つて流れ込んで來た。そしてよくこれを消化し、嘗て儒教を取り入れ、佛教を咀嚼せる如く、此がよく咀嚼し得らるゝに及んでよく歐米各國に追隨して行つた。俺れのみ中華と稱し天命思想に安住し、四方の國民をもつて蠻夷視せる支那は文明の大勢から落伍して仕舞つた。近代思想の洗禮は制度を整ふることなく教育を普及せしめることなき支那に對しては行ひ得ないのである。儒佛二教の奥義は變亂の堪へぬ支那からは消へ去り、東洋獨自の思想として日本化されたものが我が大日本帝國に傳つて居るのみである。卽ち我が大日本帝國にあつては、惟神の道を緯とし支那印度の思想を經としてよく德川三百年の間に日本文化として立派に織り爲して來た。此の

文化を更に西歐近代思想と云ふ色合でもつて染めて今日になつたのであるから今日の我が日本文化には獨特の味のあるものなることは問を要せぬ。即ち東西の文化が完全に融合したのは英國でもなければ獨逸でも無い。實に我が大日本帝國である。

而して組織に於て雄大、內容に於て深淵な此の東洋思想は今や西歐流の色素を加へて一段と發揚せられ、我が國民文化を誘導せんとする新思想たらんとして居る。

和魂、荒魂、幸魂、奇魂の作用を國初以來有せる我が大日本國民は、西歐諸國民の如く自國外の古代文化の跡を尋ねて復興するのではない。伊太利人がギリシヤをたづねて新思想を生み、西歐文化の指導權を得たると、我々が我が國自身の古代文化をたづねて、世界指導權を得んとすると何れが其道を得たるものであるか。佛蘭西人がギリシヤを尋ねて新思想を得て西歐に君臨したると、我が大日本國民が我が國古代文化の跡を訪ねて、新思想を得て世界に君臨せんとするのと何れが是なりや。英國、獨逸等の國民が相繼いで世界文化指導の權を得たのは、古代ギリシヤの文化を媒として得た新思想によるのではないか？

然り歷史は繰り返さるゝとか。かの伊太利が一君萬民の思想の片鱗を嚙つてムツソリニを出し西歐諸國に異色を出し、西歐指導の權を得たではないか。獨逸のヒトラーこれを模し戰敗疲弊の

國をしてよく戰勝國佛國に對抗して居るではないか。

伊太利の場合でも獨逸の場合でも、國際主義を稱へる人々の如く理論は持たぬ。唯伊太利の場合に於ても又獨逸に於ける場合に於ても同樣である。伊太利は伊太利國民によつて更生し發展せしめなければならぬ。我等の肉、我等の血、そしてそれを一貫する傳統的伊太利魂、それによるのでなければ國家の難局は救濟し得ずとし、共產主義や國際主義に對して壓迫に壓迫を加へて獨裁的な政治形態を取つて來た。「自國は自國人のみによつて」との旗標の下にあつては祖國愛に燃えざるを得ぬ。而して自國本位の外交政策となり、對內的には國家を至上とするに到つた。而して政策遂行のためには暴力をも辭せなかつたのである。國民の權利は認めるが然し義務の履行に力點を置き政策の遂行には理論も反對も言論も認めず實力を行使することによつて獨裁的强制的政策を施行して行つたのである。

獨逸に於けるナチスについても同樣に云ふことが出來る。獨逸は獨逸人の手によつて發展更生せしめなければならぬとし、最後の目標として獨逸民族最後の永遠の理想的帝國の實現を上げて居るではないか。而して國內に巢喰ふユダヤ人の排擊となり、ヴエルサイユ條約の否認となり、反獨逸的な總てのものの否認となつて出て來て居る。

戰敗の獨逸には共產主義もはびこつた。自由主義者、國際的協調主義者等々種々のものが根を張つた。此を排除し獨逸人の獨逸とするためには突擊隊の結成が必要であつた。總ての反對を力で以て押し破つた。ユダヤ人を暴力によつて追拂つた。祖國愛に反する主義を載する書は焚いて仕舞つた。然し獨逸人の獨逸を否定する獨逸人はないのだ。その極端なる主義綱領に對してもこれを喜び迎へて居る。「我々は各民族自決權に基き總ての獨逸人が大獨逸の下に結合する事を要求す」と冒頭し、十九の條に「我々は唯物論的世界秩序に味方するローマ法をドイツ共同法を以て補正することを要求す」となし、大にドイツ本來の民族精神に依つて總てのものを建て直さんと努力して居るのを見るのである。二〇の條には「總ての有能にして勤勉なる獨逸人に高等の教育を授け、指導的地位に昇らしめん爲に、國家は全國民教育制度の根本的改革を立案すべし。總ての教育機關の教育原則は實際生活の必要に順應すべきものとす。國民思想の培養は教授(小學校)開始の當初より爲すべし。我々は身分職業の如何を問はず國費をもつて貧困なる父兄の子弟に特に必要なる精神教育を施すことを要求す」として教育の實際的必要に順應すべきことを說いて居る。

かく祖國愛に基く極端なる國本的獨裁主義は英國に於てもマクドナルドの擧國一致內閣が我が

國に對して何を爲せるやを見ても知るべきである。佛國、米國又此の風潮に左右せられて自國本位の教育と强力政治の形態を取らんとして居る所に伺はれるではないか?

自國の、自分の國民性を自覺し傳統的國民精神を發揮し自國を健全に育て上げた所のものゝみが國家として地上に存在する權利を有するに到ることが明となつて來た。各國民とも自己と云ふものを反省し、自己の發展を志し自己本來の面目を發揮せんと競ふに到つた。

前述の如くかゝる大勢の澎湃として起つて來たにも不拘其根據となるものが世に出ぬのは何故か。伊太利のムツソリニを開祖とする愛國運動の如きは蓋し其歷史の足らざるによる。我が國にあつては日本魂による日本、日本人の日本なる愛國運動は遠く神代から起つて居るのであつて、一民族でもつて國家を構成し皇室を宗家として一家族の如き趣きを爲して來て居る我が國に於ては、此の自覺運動は最も强勢に起つて來なければならぬものである。而して取り入れた西歐の組織に對する疑さへも起り、身をもつて此を窮明せんとするものさへ出て來て居る。然るに何ぞ國本に醒むる人の少き。建全なる日本民族の教養は惟神の精神を兒童に叩き込むにある。而して國民性に醒め、其長を發揮し短を長養して撓めて行き世界に雄飛する大國民とならねばならぬ。

時は來た。惟神の大精神、日本魂を發揮しこれを次代に傳へ來るべき機會を待つ時は來た。精

神を剛健にし身體を強壯にし、各も各もの受け持を通して世の中を提げ追ひ進むべき時は來た。

國民各自が相互が敬虔の心をもつてなつかしみ、感謝の心をもつて物事に向ひ、汚を祓つて美はしきことを生ぜしめなければならぬこと、價値を生産せねばならぬ時は來た。各人は其身が神の生宮なることを自覺して、天皇　をして彌々「すめらみこと」たらしめまつり、其御光を仰ぎつゝ相扶けて「みこと」となし合ふべき時は來た。

我等は惟神の心をもつて　「天皇」をして「すめらみこと」たらしめなければならぬ義務を持つて居る。此の義務は總ての義務を超越する義務であり、總ての權利を超越する權利であつて、日本人のみが有する獨自の最大權利である。

ナチスが其二十五ケ條の綱領に於て「如上の諸原則遂行のために我々は一つの强力な中央權力の確立、及び國家全體に對する政治的中央議會の絶對權力を造らん事を要求し、並に其一般的組織をも要求す。

國家によつて制定せられたる一般法律を各聯邦に適用せんが爲に、「吾人は州議會、職業階級會議を造らんことを要求す」と最後に述べて居るが一家卽ち一國、一國卽一家の體を整へざるものゝ悲鳴を聞け。

我が神國は一國は卽ち大なる一家にして、一家は卽ち小なる國家である。上下同一祖神を拜する我等を、此の萬國に冠絶する我が國體を喜び、各自の受持を通して、自己關係の一切を提げて彌榮の大理想にまで參ゐ上らしめよ。吾等はかゝる義務のみを有して居る。此の義務は神聖なる權利なることを想へ。强力なる大日本帝國のみが時艱を救ひ得るのだ。强力な國民を養成して行かねばならぬ。

第三節　自覺の方法

自分と云ふ者を最も良く知らして呉れるものは鏡である。自分の顏や姿がどんなになつて居るか墨がついて居るかインクがついて居るか、顏に出來た腫物がどんなになつたかと言ふ事を明瞭に知ることの出來るのは鏡に對つて始めて出來る事である。

鏡は顏面に現はれた喜怒哀樂の微細な表情まで悉く現はして內に藏する一物もない。昔より此の鏡に對つて自己を知ると云ふ事は皆行つて來た所である。

鏡は實によく己れの姿を反省せしめるものである。己れを振回り己を見せしめるものである。よく己れについて自覺せしめるものである。

天照大神が天孫邇々藝命を此の豐葦原の國にお下しになるに當つて八咫鏡。八尺瓊勾玉、天叢雲劔の三種の神器に思金神・手力男神・天石門別神の三神を添へて降し賜ふた。此の時に賜りたる勅語

葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就て治ろしめたまへ、さきくましませ、寶祚の隆えまさんこと、天壤のむた無窮なるべきものぞ。（日本書紀）

（この豐葦原ノ水穗ノ國は汝知らさむ國なりとことのよさしたまふ。かれ命のまにまに天降ります可しとのりたまひき）（古事記）

とあり、更に鏡をお下しになる時の詔に

「これの鏡は、專ら我が御魂として、吾が御前を拜くがごと、齋きまつれ。次に思金神は、前ノ事を取り持ちて、まをしたまへとのりたまひき」（古事記）

とあるを見る。

建國の最初に於て此の鏡を賜つた所に大きな意味を見出し、思金ノ命を添へさせられた所に更に偉大なる意義を發見する。前にも述べた通り鏡に向へば自然に自己と云ふものゝ姿を見、更に深く見るならば反省を敎へられ、內省を敎へられ、自覺が敎へられるでないか。自己を反省し內省

して自己本具の本性を眞直に働かしめられんとして、然も淸く明く働かしめんと志されて思兼神を添へられて居る。姿のみでなく內心深く反省し自覺の作用を起さしめんとして思兼命の添へられた所に大きな意味を見出されずには居られぬ。此の天孫降臨の際の神勅を拜し自己を知り、强き祖國愛に燃え、捨身の活動を爲すべきではなからうかとさへ考へしめられる。

此の自己について知ると云ふことは仲々困難なことである。かのギリシヤの大哲ソクラテスさへ隨分苦勞したのであつた。ソクラテスはデルフオイの神殿に詣でた時、其神殿の扉に「汝自身を知れ」と刻されあるを見、そが神の言葉なるを聞き非常に感激した。自己とは何ぞやと考へるに到つた。父は彫刻師であり母は產婆であつた。始は父の業を繼いだのであつたが、終始此の問題を明めんがために出歩いた。妻君より小言を喰つて水をぶつかけられたとの事である。然し彼の研究態度は靑年を惹きつけずには居らなかつた。然して彼は七十三歲の高齡になるも未だ此の自己とは何ぞやの問に對して確かに知らずに仕舞つた。唯胸の內にダイモニオンなる神あることを知り、此の神の聲に聞いて事を處すべきであるとした。

然し此の自己と云ふものを知らんとする最も手近な道は鏡に向ふほど手近な道はない。ソクラテスは鏡に向ひ思兼命の計（はからひ）を受けなかつたので、思辨的に考究せざるを得なかつた。此のソクラ

テスの自己を知らんとする研究態度が今日の西洋哲學の發達を促す根本動機となつたのである。

一體此の自己なるものは論理や數理などゝ云ふものから生れて來たのではない。論理や數理と云ふものは精神が造り上げた純理の世界であつて、應用さることにより人生を利することは多いのであらうが、それによつて人生の目的そのものは左右せられるものでない。

純理とか眞理と云ふものは、生み產みなされた特殊のものが持つて居るものであつて、人はこれを見出して行き、組織して行くのみである。個々の行動に純理、眞理が含まれて居ることが多ければ、人はそれに感激を持ち出すのみである。

此の個々のもの、又は行動の中に含まれて居る眞理が握み出されるとこれが又個々のものや行動を指導するに到る。此を個人の經驗について云つても又然か云へる。其人の行つた事によつて理想を得、其理想が又再び經驗を作り出して互に繩の如き關係を持つてよれ合ふて居るのを見る。

然らば此の我が體は如何。我が體はかゝる經歷を積んで來た父母の所產である。その父母は如何等と逆つて行けば天祖に到るであらう。此の我が日本人として爾餘幾千萬の同胞と共に共同祖先を有すると云ふのは一つの大きな誇りである。而して日本人の祖先の直系に在すが皇室であ

り、從つて日本歷史の展開は皇國の展開であり、直ちに我れの展開の歷史であると云ふことが出來るであらう。

かく考へて來れば民族としても又然りと云ふことが出來るであらう。どんなに理想的國家を考へても、其屬する民族と土地の影響を離れることの出來ぬものである。プラトウが最も合理的だと考へた理想國でも、ギリシヤ人たるの特性とギリシヤの土地と其處にあつた文化の背景から拔け切ることが出來ない。ロバートオーエンの考へたユートピアにしても英國人としての特性と英國と云ふ土地に發達した文化の影響から拔け切ることは出來ないのである。中井履軒の華胥國物語は一種のユートピアであるが、これとて德川時代の文化と、日本人であることゝ、其住居が大阪であつたと云ふ此等の三つを拔いて考へられるものでない。理想は皆何れも現實に卽して構成せられるのであつて、現實と離れた理想なるものはあり得ぬ。かく考へて何處の國にもある國初の物語を見るとき、そが民族全體の所產であつて、其國語を生めるものが表出した思想であると考へられる。然も此の思想が斷えず歷史展開の指導精神となり史實を繩の如くより合はさつて發展し來て居るのを見る。然れば我が國民精神の根本を爲すものは天壤無窮の神勅に示された君臣の道と親愛一體の父子の道を示さるゝ寶鏡親授の神勅であると云はねばならぬ。

此の二つの神勅が我が國家發展の指導精神となり此の二つの事項が發揮せしめられた時に國運が最も盛なのである。大義名分を明にし、父子の情をもつて君は慈に臣は忠なるべきはかくして國初より明にせられて居るのである。生むものは親であり生れるものは子と云ふのであつて、生みし親が生れし子供を慈しみ、教へて行く。どんな惡人でも子供を惡人にしようとするものは一人も無い。

國祖の國民に向はせられる所は正に此の慈愛と正義なることは前二個の神勅に明な所であらう。國土、山川、草木を生み人民を生みませる神は其民族の親である。親である限り生育慈愛の源となり眞理、正義、不欺、照示の本となつて居られるのである。

我が日本人の生みなした建國の物語はかく名分を正し自覺の手段を示して居る。從つて大日本帝國の天皇は祖神の心を心とせられ列祖の聖跡を見て臣民を慈まれるのである。此の御慈しみに答ふべく我等の祖先は億兆心を一にして忠孝の道に勵んだのであつた。而してそれが卽ち國體の精華を成して居るのである。國民教育に於て授くる諸課は皆此の自覺を得させん爲めのものである。

ムツソリニやヒトラーやネロの如き獨斷專制は我が天皇（すめらみこと）にはないのである。

思兼命の働きによつて知惠を働かしめられ、列祖の神靈に問ふて事を處斷せられるのである。然れば天皇は列祖の神靈を身に體現しまします現人神に在すのであつて、焚書したり或は學者を追拂つて反對の主義を撲滅したりはせぬ。自己を知ると云ふ働を人民にさせることは西歐の人々は好む所で無い樣に考へる。然も絕對に我が國初の物語には知惠の木の實を嫌はせたり、知惠の炎を奪つて人間に與へたプロメチュウスをコーカサスの山に苦しめたりするが如き傳說はないのである。初めより汝自身を知らしむべく、然して吾を見るが如くせよとの敎と共に鏡を賜り、知惠の神思兼命を附して天降し給ふて居るのである。

鏡に對する如く己れの內面に存する民族的精神を明かに把握し、姿のみならず日本人として持つべき思想をはつきりと認識するでこそ、自分の本性が知られ、自分の國民としての位置を自覺し、それを自己の上に實現して行く人間となり得るのである。

自己を反省し思慮を十分に働かすとを云ふこと恰も鏡の前に立つてこれを思兼命と共に祭らせられたる祖神の德を鑑とする事に依つて日本人としての正しき自覺が得られ、俺とは何だと云ふ問題の解決がつくに到る。然も此の方法を歷史の發展の上に用ふる時に於て現代日本人としての正しい自己なるものゝ自覺が出來るであらう。

儒佛の二教は正に明治維新前に於ける此の働きを爲さしめる有力な資料であつた。然しながら中世紀末葉伊太利に起つた復古思想は新しい形相をもつて我が國にも迫つて來たのであつた。近代思想をよりよく發達せしめた國家が世界文化の指導權を持つものなることは前節に於てこれを見て來た。

然も我が民族は此等の西歐近代思想と呼ばれるものよりも遙に宏大深厚なる思想的根據を生み出して居るのである。此の根據あるによつて來るべき日本文化が東西文明を再組織して世界を指導せんとして居るのである。

吾等が兒童の品性を陶冶せんとする目標は實に此處にあるのであつて、此の根柢を培養發展せしむることが目的でなければならぬ。それには近代思想が如何に歐洲に於て展開して行つて居るかを明めて再び吾に歸り、日本民族精神長養の方法に思を潛むべきものと考へる。

第二章　伊太利の復古思想とファッショ

第一節　文藝復古運動

第一章第一節新界世觀成立の所で述べし如く古代藝術や文學と、新しい藝術や新しい世界觀との大橋梁は先づイタリーで架せられた。教會萬能主義から割出された天國を支持せんとする努力と傳說から獨立せんとする努力は相互に現はれるのであつたが、次の時代には此等二つの努力を材料として新建築を完成した。かく混在せる種々の時代を表明する精神內容は遂に十三世紀の終に最初のイタリー精神に基く大創作を開始せしめたのである。卽ちダンナの神曲は卽ちこれである。中世的世界觀が詩的發表となつた。其材料となりしものは卽ちトーマス・アクイナスの思考組織であり、且又古代主義に反對する此の時代に於ける詩や散文を指導的のものとし手本として居る。トーマス・アクイナスは最後のスコラ哲學の大家であり古代復歸については有力なる暗示と指導を與へて居る人である。此等の要素は神曲に於て一つの形に融合した。そして其中に新しい時代精神を溢れしめたのであつた。その新しい時代精神と云ふ奴は次の世紀に生れて來る伊太

利哲學に他ならぬのである。實に次に興起せんとする思想に途を開いたのは古代主義と云ふべきである。即ち中世のスコラ哲學が、アリストテレスの哲學を唯一の權威として奴隷的に服從して居たのとは全然異つて、イタリーの文藝復興は古代主義を自分の中に取り入れたのである。むしろ自己の中に古代主義を見出したと云つた方が良い。

且又此の時代の刺戟となつたものにはプラトウがある。詩人として又哲學者としてのプラトウの働きは此の時代の伊太利の學者を刺戟したことが少くはない。然も從來忘れ去られて居たデモクリトスの世界觀はプラトウと同樣の勢力をもつて伊太利に入つた。此の世界觀は彼が統一し結果を明にしたので確定的な力を有して居たのであるが、ルクセチアス・カルスがそれを詩的に說明し、研究したので伊太利に於て新に生命を得たのであつた。

此の伊太利の文藝復興期に於ける哲學的指導者は實にプラトウと云はねばならぬ。地文的、天文的事項については、此の時代にあつては實にデモクリトスが指導的精神をもつた人となつたことを忘れてはならぬ。即ち新しい精神でもつて具體的に科學的に研究をして行く上の指導者は古代のデモクリトスに求められたのであると云はねばならぬ。此の點については當時何等の例外のなかつたことを知り得るのである。然しながらやがて花咲くに到る自然科學や、新哲學の基礎を

つけるための研究は互に力强く影響を及ぼした。かくして此の過程は現代に强く影響を與へたのであり、古い詩の如く新文化を導くに到つたのである。

勿論十六世紀十七世紀のイタリーの哲學者の構成した觀念は總てがイタリーで發生したものとすることは出來ぬ。かのイタリーに於ける文藝復興の偉人ギオダルノ・ブルノーがローマ教會の審問から脫れてウツテンベルヒに憩ひ、再び其町から逃れる際行つた演說によれば、クーエスのニコラスとコペルニカスとパラセルザスを哲學に新しい方向を與へた三人の偉大な獨逸人として賞讃した。而してルーテルを賞讃して三重の兜を被つてセルベリユウスを征服した新人ヘラクレスなりとして附加した。此の三人の有益な思想はイタリーの科學者達が使用した。クーエスのニコラスクザーヌスの無限の概念は尙ほ思索的な神學の上に主として用ひられるのみで制限されて居た。コペルニカス的組織は創設者には全く單なる天文學的假定と考へられて居たのである。此の假定から全世界の境界と云ふ如き舊い考を改めて、固定せる天に包まれて居る球體が卽ち全世界であつて、其境界を廣め舊來の天動說に對して新しく地道說を提唱したのであつた。

イタリー文藝復興の天才的思想家と云はれて居るブルノーは何と云つても鋭い思想を持つて居る人であつた。

彼はコペルニカスの新世界組織の上にクザーヌスの無限の觀念を使用した。そして獨逸神學の思想と獨逸天文學の思想を統一した大綜合事業を完成した。そしてコペルニカス的組織を今日吾々に理解されて居るが如きものとした。精神的に此の統一が行はれたので、ブルノーがプラトウ的な考を感覺世界以上の或る世界に止揚したと云へる。勿論此等のものは從來にあつても超感覺的な觀念世界に明瞭に現はれては居たのであるが、彼は一段高いものとしたのであつた。

此の世界全體と云ふ考の中にプラトウの精神が浮んで居る如く自然研究の中にはデモクライトス的な世界の表象が浮んで居る。精神的事項に對してプラトウを浮ばせる如く自然研究にあつてはデモクライトスを浮ばして居る。

十六世紀の物理學界に於ては、ベルナヂオ・テレジオが始めて、世に廣く行はれ世人の信仰の對象となつて居たアリストテレスの物理學を分けて機械的な物理學と博物學の研究とを對立せしめたのであつた。此の物理學では力の運動によつて起る總合的な現象の世界を各要素に分類し、よつて起る理由を明にした。勿論此の考へ方は質量不滅の思想であり、然もアリストテレスの質量の教に打ち克つことが出來なかつたのである。それで彼は寒暖の二つを二つの對立せる力と解釋した。そして總ての自然現象は此の二つの力の相互作用から現はれて來るものだとしたのであ

つた。當時に於ける偉大な自然研究家には非常に强い影響を與へて居るのである。

其形相から云へばデモクライトス的な世界表象に形を與へるものであり、然も今日までガリレオ、ガリライの名の下に殘つて居るのである。彼はアリストテレスの云つた性質即ち寒暖、固體液體と云ふものを主觀的な現象として解釋したのである。

現象なるものは吾々の五官に訴へられた樣な印象を吾々に附加するものであるからと云ふので、アリストテレスの言つて居る性質なるものをデモクリトス的考に引き戻したのであつた。即ち性質なるものは同じ樣な性質を有する物質の運動から性質は出來て居るとするのである。此の外に彼は運動の法則なるものを經驗的に數學的に、重い物體の運動から說明したゝめに、彼は科學の建設者と呼ばるゝに到つた。此の科學に基いて更に彼は綜合的博物學を打ち建てるまでに進んだ。博物學を改革して有效な結果を上げたのは十七世紀の初頭に屬する。然し十六世紀の終に於て既にギオダルノ・ブルノーは原子論的な考とプラトー的な考とを統一し、コペルニカス的に使はれて居る無限思想を統一せんと試みた。此の樣に結合しては彼が物理學的意味に取つて居た原子の觀念の制限を越えて居るから、原子は物理的であると同時に心理的統一體であるとさへ考へら

れるもの、即ちモナードの考への附與せられた原子となつて仕舞つた。

故に前掲三大獨逸人の第三人目パラセルザスの思考の世界にあるのをブルノーが價値の世界へ持つて行つたのであつた。

ブルノーはウツテンベルヒの演說の中でパラセルザスを呼んで小宇宙の觀念の改革者と呼んだのであつた。

かくして伊太利哲學は彼により次の組織に發達すべき方向が與へられたのであつた。その組織とは一は絕對的無限の觀念に高められた普遍主義であり一は原子と簡單な精神との混合から出て來て居る個人主義である。此の兩者とも宗教問題に對する立場から次の時代には實際的意義を得て來て居るのである。普遍的統一の概念からは神と世界の合一と云ふ理念即ち汎神論と云ふ考へが出て來たのであり個人主義的な考からは人格の神性と云ふ考、即ち無神論が出て來て居るのである。

第二節　伊太利精神の建設

かくの如くして一部分はプラトウを模範に取り、神秘的な表徵を助けとし過去のスコラ哲學の

合理的思考と、全然離れた直觀とを結合した此の哲學は完全な世界認識へ進まんとし研究し續けた。これと同樣に此の結合が遂に倫理問題を他の方向へ進めるに到つた。手段、目的と云ふものについての反省とか合理的熟考とか云ふものは道德的行爲の本質として何等價値のあるものではないとされるに到つた。南歐情熱の伊太利人の代表者が思を玆に致したのは當然である。ルネツサンスの新しい道德はかくの如くして建設せられたのである。

從つて到る處の創造的創作家に見る所であるが、其時代に浸み渡れる性質を伴つて居るのである。從つて此の時代の新道德は、知識、反省を重んずると言ふよりも情緒に價値ありとし、道德性の最高表示は感激、激情にあるのであるとし、感情と、感激の二つから起つて來る意志、精力的な强い意志こそ道德教育の最後の目標でなければならぬとするに到つた。即ちルネツサンスの倫理はかくの如く情意的內容を持つて居るのである。

從つて道德の根源は何が有益で何が有害であるかとか又は何が善で何が惡であるかと云ふ如き認識でなくて、善を爲し惡に打ち克つと云ふ激しい意志こそ道德性の根本であり、又總ての人間の幸福の源泉であるとした。これはブルノーの提唱せる所であつて實に伊太利精神の根幹を爲すものと云つて良いのである。

ダンヌチオを見よ、ムツソリニを見よ。二十世紀の今日に於ても彼等は此の彼等の生みだした伊太利精神から拔け出ることは出來ないのである。

此の精神はよくルネツサンス時代の伊太利人間に溢れて居た激情を刺戟せずには置かなかつた。文藝復興哲學に於ける伊太利人に働きかけることは少くなかつた。彼等の精神力は此の魂によつて大に活潑となつた。そして彼は新世界觀の基礎を作つたのだつた。其處で中世のスコラ哲學並に其保護者であるローマ教會の教權に對して反對したのであつた。

此の初期に新科學を生ぜしめた不朽の精神的創作者は多くの人々に其思想を頒ち與へた。

然しながら此等の思想を分ち與へられた人々は多くは殉教者となつて此の世から亡ぼされた。

然してローマ教會はあくなき專制の血をすゝつたのであつた。此の新思想に殉教したものは當時の優れたものが多かつたゝめであらう、此等の人々の滅亡と共にイタリー人の哲學や思想上の指導權は終りを告げた。哲學指導の役目も又終焉を告げて居るのである。

一六〇〇年二月十七日。ギオダルノ・ブルノーはローマ教會審問所から判決され焚刑に處せられて其命を終つたのであつた。ガリレオは拷問を以てローマ教會裁判所から脅かされた。そして一六三三年六月二十二日自分から自分の主張した教に反對せざるを得ぬ破目に陷れられた。そし

てローマ教會に對する新思想の鬪爭は終を告げ、新科學は表面破れたかの如き觀を呈したが、此の戰の二人の指導者には將來の科學がローマ教會に打ち克つべきことは確認せしめたのであつた。

此處に吾々の見逃してはならぬものが此の二人の上に見られるのである。即ち此の二人の上に彼等を生み出した伊太利國民精神が同じ樣に現はれて居るのを見る。此の精神は決して統一されたものではない。ブルノーやガリレオに依つてそれが統一はされたが、此の二人を生み出した伊太利精神は統一されたものではないのである。

南方伊太利人は溢るゝ許りの想像力と感情の力をもつて居る。北方の伊太利人は冷靜で秀でた稀に見る無頓着な人格と明晰な理性をもつて相對立して居る。此の二つの對象は相反しては居るが、然し進步し行く間に統一することの出來るものであつた。其決定的要素について云へば相調和せしめ得るものであつた。ブルノーとガリレオは此の統一を爲したのであり、科學の文藝復興を成就した人であつたと言ひ得る。然も尙今日此の北方と南方の固有の人種的特徵は對立したまゝであつて相對して居る。此の對立は統一調和が完全にされるまで消えるものではない。

伊太利は近代に於ける政治的復活と共に伊太利が伊太利科學の新生命に眼醒めて來たのであ

る。此の自覺が出來て以來、かの過渡時代によくある他國民の影響なるものを先づ第一に受け入れて居るのである。然しながら此の關係からかの古き對立は明に認められ得るのである。北方に於ては主として英佛の實理主義に影響されて新しい運動を起した。南方に於ては獨逸哲學の根源を一部分了解したのであつた。殊に著しく伊太利青年を惹きつけたのは獨逸理想主義の歴史哲學であつたと云ひ得る。此の一部分不明なまゝで殘つて居る要素の中で概念化された伊太利精神が勝つか、或はルネツサンス時代にありし如く、伊太利精神の新しい自立的な形が現はれて來るか否かは將來の問題である。然し現代ではブルノーの打建てた伊太利精神から殆んど脱れては居ないのを見る。

此れを日本精神の發達について云ふならば、此の伊太利精神の發達と大に趣を異にするものあるを見るであらう。

古代ギリシヤの思想を受け入れて、自國の國民性に眼醒めてブルノーに依つて此れが明にせられたのであつた。

然るに我が建國の始より日本精神は正義、慈親の二つの勅として昭示せられ、儒教も佛教も將た又歐米思想も此の昭示せられた日本精神を明にして行く道具に過ぎなかつたのである。ブルノ

ーが伊太利國民の間に浮ばしめた伊太利精神の打立て方と大に趣きを異にした日本精神の深さと厚さに無限の愛着を感ずる。同時にその發揚に懸命の努力を拂はねばならぬと感ぜしめられるものである。

第三節　フアツシヨ運動

世界大戰後の伊太利は戰勝國であつた。けれども經濟上から云ふと非常な困窮に陷つて仕舞つた。寧ろ極度の逼迫狀態にあつたのである。此の經濟的困窮が思想的にも又社會的にも種々の運動を起さしめることになつた。此の運動は波紋の上に波紋を畫いて頗る混亂の狀態に伊太利を陷れて仕舞つた。此の混亂の狀態に手を伸ばしたのは伊太利では共産黨の者共であつた。其の標語「萬國の勞働者よ、結合し團結せよ」との國際主義は伊太利内に盛に宣傳せられたのであつた。其儘の推移にまかしては伊太利は、共産主義の跋跨と共に國家として世界に存在しなくてよいことになる。其處で祖國を愛する人々は此の難局打開の方法につき苦心畫策せられたのであつた。從來の伊太利に於ける既成政治の形態では、又從來伊太利で行はれて來た政治の組織では此の難局の打開は不可能であることが分つた。伊太利民衆中心あるものは、必然的に何か新しいものを

然して強力なものを求めようとする傾向が現はれて來た。此の傾向に乘じて熱血男兒ムツソリニが現はれたのであり、これに大改革を斷行せしむべく大勢は動いて行つた。

伊太利に於ける當時の社會的狀勢と、ムツソリニと云ふ、時艱の要求する個人的素質が要素となつて、新運動が生れ出た。ムツソリニは黑シヤツ黨を組織した。伊太利は伊太利人によつて更生し發展せしめられなければならぬと主張せられた。「我等の血そして我等の肉、そして其間に流れる伊太利魂。此の外に祖國伊太利を救ふ者はない」との强烈な、伊太利精神の特徵たる激情を帶ばしめて、國際主義を主張する共產主義者に對して大彈壓を加へたのであつた。此の强烈な意志を働かしめ激情的に彈壓を加ふることによつて、伊太利精神は愈々燃え上つた。そして從來とは異つた獨裁的政治形態を取るに到つた。これがフアツショ運動であつて、此の行動に對してフアシズムと云ふ名稱が冠せられたのである。

祖國愛に燃え、失ひかけた伊太利精神に自覺の出來たのは實に國家的困窮が伊太利を襲つたからである。國民精神に自覺の出來た伊太利人は國家主義を强調し、對外的には强硬政策となり對內的には國家至上主義となり、國民の義務を强調し、權利に觸れる所は輕く「國民は義務實行の權利あり」とまで主張されるに到つた。總てを强制的獨裁的に行ふに到つた。私有財產は認めて

居るが、極めてこれを制限し然も多數の產業を國營とし國家トラストの形を取るに到つた。而して階級意識の發生を嫌ひ階級鬪爭を認めざるに到つた。勞資の協調を高揚し超階級的協力主義、國家的團結を最も强く主張した。英國流の社會改良主義に近いと云はれるのは此の點である。政策の遂行は手段として一任主義獨裁主義であつて、これが遂行を妨ぐるものあれば直接行動をも辭する所でなかつた。彼等が非難せられたのは此の直接行動に對してゝあつた。直接行動の手段に彼等は「棍棒とヒマシ油」とを使つた。此等はその昔ブルノーの主張し伊太利精神として明にした激情を媒介とする猛烈なる意志の現はれに他ならぬ。かくして伊太利人の伊太利がムツソリニ指導の下に成就せられてから十一年になる。

恰も文藝復興が伊太利に起り時を隔てゝ佛、英、米、獨と波紋を起した樣に、愛國運動も又伊太利を出發點として歐米各國に溢れて普及されるに到つた。此れが一つの動因となりて、日本魂發揮の必要は愈々日本國民各自に自覺されて來て居る。然し學者は無力だ。教育者は任務が違ふ。大本教の神諭ではないが

「日本の人民の天からの御用は、三千世界を治め、神の王の手足となりて、我身を捨てゝ神皇の御用を致さならぬ國であるから、外國には從はれぬ尊い國であるのに、今の日本の人民は

皆大きな取違を致して居るぞよ」（皇道の桒三六七頁）

日本人の日本精神は神代より鮮明されて居るものであつて特定の人が中道にして纒めたり組織したのではない。我が國民がこれを生み出したのであつた。此の意味から我が國民の何人も此の日本精神の自覺は容易く出來る所であり、此の精神の發揚に努力し日本精神の涵養に力を致さねばならぬ。

外國のやり方を模倣して日本フアツショ等と云ふ人もあるが、愛國精神は外國のものを借りて來るまでもない。伊太利のやり方を日本で模するまでもない。日本には神ながらの道がある。神ながらの途に則つて、日本魂の發揚を企てるでこそ、日本の生きて行く途が開けるのである。外國の模倣をした愛國運動なら三文の値打もないものである。

第三章　佛國を舞臺とせる近代思想の展開

第一節　佛蘭西思想

先覺指導の位置にある人々を伊太利ではローマ教會の手に依つて血祭に上げて仕舞つた。從つて伊太利は近代的精神の指導から手を引かなければならぬ樣になつて來た。即ち伊太利人が退いて後、近代精神の指導的役目を果したのは佛蘭西であつた。佛蘭西へ指導の權は移つた。此の後永い間フランスは近代精神を支配して來た。後期文藝復興は伊太利人の拒んだもの、即ち此れ迄新科學が得た結果に基いて出來た固定的世界觀を統一的世界觀とした。即ちプラトウ的な考とデモクライトス的な考は人間の思考では一段高く止揚して調和することの出來ぬものだ。又かゝる差別を有するとして統一することを不可能視したのであつた。然しながら近代精神文化と云ふ共同基礎の上に立つて見ると、既にそれは止揚された差別であり對立であることを明にしたのであつた。

此の時代の呼び聲に存するより一層計畫的な又選擇せられた新しいものとなつた仕事が、佛蘭

西精神の萠芽となつた。中世紀に於て既に佛蘭西の有力な文教の中心として現はれたパリー大學に於ては中世的思想を充分に理解したのであつたが、伊太利に於て拒まれた近代精神は、よく此の大學の指導下に育まれ、此等のものがよく佛蘭西精神發揚の素地となることを示して來た。

佛蘭西精神の素質とは何であるか？　それは明瞭な悟性、天に對する希望と落膽の間に發達した氣性、鋭い計算、要素的な感情的衝動、此等を材料として容易く發達せしめられた品性が即ちそれである。

佛蘭西人の詩、其中には輝く修辭、閃ける才智、これを容易に見出し得るのであるが、其中には輝く此等に對して創造的想像が缺けて居る。此れと同樣に科學についても然か云へるのである。歴史にあつても、政治について見るも、明晰な性質、修辭的な才能は働かされて居るが創造的なものはそれに劣つて居る。他面かゝる事項の豫備となつて居る數學的訓練も行はれては居るが同樣の立場を取つて居る。此の樣な立場は哲學に於ても現はれて居るのである。

佛蘭西精神、それはフランス魂の權化たる思想家、レネ・デカルトに依つて新生面が附與されたのであつた。彼の青年時代に、彼は敵軍について諸方をめぐつた事もあり、又味方の軍隊について諸方を歩いたこともある。後に彼は功名心から科學の名聲に魅せられて著作事業に從事せん

とし寂漠の感に打たれたのであつた。

その著述と云ふのは新しい機械的世界觀なるものを一つの組織に造り替へて宗教上の要求と一致せしめんとしたのであつた。其準備として彼は數學を研究した。數學については、彼は光彩ある筆と、明晰なる、然も透徹せる頭とをもつて堂々たる證明を爲せる解析幾何學であつた。此の著作は其時代の人々が皆要求して居た一つの哲學を作る準備工作に過ぎなかつた。それにより彼は自己の世界觀を一段高きもの、一般的に價値あるものに高めんとしたのであるけれども、それによつて實理科學の要求を滿足さしたゞけでなくて、超經驗的なスコラ哲學の代りに彼の哲學を教會に受け入れしめんと努力したのであつた。

然しガリレオの判決はガリレオに反對意見を述べる樣に迫つたことあるを憶ひ出し、デカルトは長い間充分に研究して、印刷する許りに出來て居る自然哲學の最初の書物を丁度都合のよい時期を待つために控へて置いたのであつた。

後に著述するに當つて彼は教會の忠實な子息として一層高い權威により同意されしによるとの序文を書くことを忘れなかつた。かくして彼の哲學は新しい自然科學から出て來た假說と、古い教會哲學から引用した文句の大膽にして用意周到な混合であつた。彼には世界は純粹な機械的の

ものであつた。機械である世界は創造の始に於て與へられた運動を、不變の強さで無限に運動を續けるものであるとした。

生氣ある自然でも此の機械的な突進力を奪ひ去ることが出來ぬ。然し夫と共に創作者造物主は人間の腦の中に不死の靈魂を植ゑ付けた。其靈魂は肉體の機械が靈魂に奉仕する間は此の力の現はれに服從してゐるとして居る。然しデカルトは直接神から傳來せる思考の原理として、オウガスチンの靈魂に關する教に據つた。それで彼は二元的世界觀の創作者となつた。其二元的世界觀の中には新舊の二つの思想が流れて居る。それ故に總ての存在物の內容を作つて居るものは三つの物質であるとせざるを得なくなつた。

第一は廣がりを持つて居て機械的に運動する物質とし、

第二は人間が物事を考へる靈魂

第三は神である

とした。

神は始めの二者を作り、夫々神の法則を與へ、人間の精神に先天的の觀念としての神、自己の存在、廣がりを有する物質、此れを認める認識力を與へたとして居る。

彼は驚くべき鋭い觀察をした。そして哲學は此の等しくない概念を此の樣に結合することにより當時の教養ある人々を滿足させるに充分であることを知つたのである。而してデカルト哲學の此の三假定は殆んど今日まで教育ある多數の哲學者の最高信條となつて居ると云ふ事は事實であるから何等の證明を加へる必要を認めないのである。

然しながら彼の哲學の缺點は此等原理の內面的關係（內在關係）を明にしなかつたと云ふ點にあるのであつて、此の點に觸れなかつたのは明敏なる彼としては不用意であると云はれたとて仕方のない所である。かゝる等しくない要素の結合と云ふことは一寸した思想家にも直ちに氣のつく所である。何となればかゝる混合や結合は事實問題が起れば明かに充分に認められるからである。

デカルトが此の缺點を覆ひ、然もそれについて自分の頭にも漠然と氣の付いて居る所のものを一般民衆に對し、決定的に總ての疑を除いて、眞理として示した技術に到つては實に驚嘆に値するものである。彼は此の說明の技術を（今日でも尙デカルトの講義が知的滿足を與へる所のものであるが）道德的卓越、卓越せる道德の實行によつて行つたのである。尙又古典哲學者としてのデカルトは今日吾々の問題として居る所のものを解決しなかつたけれども、次代を動かす大問題

を投げかけた點に於て非常に價値ある人である。

デカルトが二つの異なる概念を結びつけ、彼が自から投げた問題を無比の明晰な頭で解かんとした事を深く研究せんとする士は、彼のデカルトの幾何學を手にしなければならぬであらう。此の點に於て彼は偉大なる獨立の研究家である。後の數學研究家はどんな大家であつても、思想の深さに於て、發表の光彩ある點に於て誰も彼を凌ぐことを得ぬであらう。

彼の作つた哲學的獨斷の三つ。即ち擴衍性を有する物質と、思考する靈魂と、此の感覺世界の法則を唯一回だけ決定する神性と云ふもの、此の三つのものを教會の教へと一致さす樣に努めたのは、後の人々であつて、デカルト自身及び其直接の門弟ではなかつた。

彼等の信念はかうだ。教會の教は擴衍性のある材料を唯一の物質とし、それを通して感覺に觸れる存在を實在として居るのだとした。

かくの如くしてデカルト哲學から十八世紀の佛蘭西唯物論が起つて來て居る。故に唯物主義の代表者はデカルトの後繼者であると言ふことを何の誤もなく言ひ得るのである。

物質が機械的な永久の法則に據つて運動するのであるとせば、此の永久の然も決して變はることのない運動の創始者ありと云ふことを何故必要とするのであるか？　もし物質が唯一の現實に

存する實在であるならば、思考すると云ふことを、此の物質の運動が生產する生產物であるとして觀察してはならぬのであるか？　何故かく觀察しては惡いのか？　恐らくデカルト自身が彼の自然哲學の組織を最も完全なものとすることが出來たならば、既にかくの如き直觀の準備をしたのであらう。

デカルトの從來の形似學に對する態度が本當に眞面目なものでないと云ふことを見ようとするには、彼が教會に對する宣誓が此の證據として充分に役立であらう。

彼が自然科學の上に建設した形似上學的唯物論から自然の間に得た立場は打消すことの出來ないものである。此れは何時の場合にでも明白である。かくして佛蘭西では殆んど絕對的に（他の歐洲諸國に對して、又他の諸國民個人に對しても）當時の機械的自然科學で決定せられた哲學的方向が勝利を得たのであつた。

然るに此の世紀の中頃にデカルトに匹敵する著述家であり彼の如く光彩に富む文章家である反對者が生まれた。此の人は醉漢の如き激情の持主であり、深き感情を高潮した人であつて、其名はジヤン・ジヤツ・クルソーであつた。ルソーは政治的觀念に將た又教育的觀念に力强き影響を與へた。そして次代の教育や政治を變化せしめずには居なかつた。佛蘭西革命を準備した文士の間

にあつては彼は第一位を獲ち得た。彼は又哲學者としても大きな影響を次代に投げかけた。彼ほど政治、哲學、教育に大きな影響を後代に殘したものはなかつたであらう。

ルソウに於てはデカルトが哲學を支配せんとして殘して行つたものは見當らない。哲學的明瞭さと一般人をして正しく理解せしめる如き結論を缺いて居る。ルソウが到る所で自然的感情に訴へ、直接的直觀に訴へて作つた書物は佛國以外の諸國に於て、殊に獨逸に於て、繁榮の地を見出した。科學及び藝術を支配する理性に反對し、當時の人々の考へた樣な文化に對して反對し、哲學や宗教を除いて自然的感情に據らんとしたのであつたが、此の繁昌の地は佛蘭西には求められなかつたのである。感情拔きの文化の取扱は十八世紀の初頭より佛國に行はれたものであるが英國からの影響の少くないのを見るのである。

デカルト自身も最後の權威として知識の問題信仰問題については、彼自からがより高い見解と尊稱した、教會の教義に、彼の主張を從屬せしめたのであつた。即ち此の一事は彼がブルノーやガリレオの如き運命を脫れんとした豫防法であることを知ることが出來よう。

其上佛蘭西哲學に於て暫時の間出て來る思想であるが、思想の懷疑的なものを調和しようとしたことは、同時に確信に一種の不安のある事を示すものと言はねばならぬ。デカルトの示した確

信に對して一種の不安が伴ふたのであつた。

此の懷疑を最も良く現はして居る描寫に既に一世紀前にミシエール、モンテーンの論文がある。しかもデカルトの百年後にピエール・パイルと云ふ人が出てデカルト哲學に反對し同時に存在する反語的懷疑を修正した。ピエール・パイルと云ふ人は當時の最も偉大な學者であり、最も鋭い感覺力を持つて居る哲學者であつた。彼はデカルトの結合した種類の違つた概念を勝手に結合して、其結論として總てを造物主の不可思議に歸結して居るので、問題として居る哲學的解釋を放棄した樣に考へられる。

吾々はデカルト及びパイルの相反する主張、即ち一は獨斷論であり一つは懷疑論であるが、此の二つのものに佛蘭西精神の著しい特徴が現はれて居ると見るのである。

此の特徴の相關性はパイルを待つまでもなくデカルト自身に非常に立派な性質を示して居るのである。蓋しデカルトは獨斷論者であり懷疑論者であると言ふことが出來るからである。デカルトは自から自己の上に懷疑を投げつけたのであつた。此の懷疑に依つて彼は思想を練つたのであつた。勿論彼には此の疑があつたので總てのものを直ちに眞面目に受け取らぬのである。此の疑の眼を餘りに深く進めて居らぬ眞正のスコラの哲學に對しては、デカルトは其逃げ口を完全にふ

さいだのであつた。

即ちスコラ哲學で主張する所の、人間の精神は唯神のみが植ゑ付けるものであると云ふ神の觀念を離して仕舞つたのであつた。然もデカルトに從へば吾々が明に認めた總てのものを實在とせねばならぬのであるから、此の論に對する反對論者はバイブルを基礎として次の如き批評をせねばならなかつた。即ちデカルトは哲學的批判に立つためでなくて世俗の人を喜ばすためにやつたのだと云ふことを認めることが出來る。

獨斷と懷疑の間に存する弱點はデカルトばかりではない。佛蘭西哲學の一般的特徴をなすものである。同時に佛蘭西思想、佛蘭西精神一般について云ふことが出來る。

其著名な實例はボルテールに於て見ることが出來よう。ボルテールは次の主張を全然反抗すべからざるものと定めた點は正に獨斷である。然し彼の獨斷を見る時直ちに次の疑問が起されるのである。

即ち「人が神の存在すると云ふ論證を確實に明にするを得ばその人は必ず神を發見するに相違ない。よしその人が神を現實に見出し得ぬにしてもその人は神を必要とするから神を見出すにきまつて居る。」とは彼の獨斷的主張であるが、これを彼自身に信じて居たか甚だ疑はしいのである。

吾々はこれと同樣のものをデイデロの祈禱に見出すのである。其祈禱の半は神が現存する如き場合に使はれるものであり、他の半は神が存在せぬ場合に神に向けるものとなつて居る。

デカルトが彼自らの論證の中に示した獨斷論、懷疑論は變化して來た。疑問と希望とを結合して空虛なるものを畫き、此の空虛を充す文字としてバイブルの使はれる場合には、表面の口實を作るために機敏にデカルトの所說が使はれる。

此の精神王國に關する著述家は虛僞の知識と根本的な實在物の上に存するヂレンマを脫れんがために、敎會が媒介する信仰、棄てられた信仰、これを拾つて來て與へるの他何等の方法を知らなかつたのである。

此の佛蘭西の哲學者によつて建設せられた仕事では最後の斷案が出て來なかつたのだ。然しその時代精神が與へ、科學が與へた假定に從つて研究して行つた人は、つまり其時代の精神勞働に關與して居た人はどの國民にも屬して居なかつたと言つた方がよい。デカルトが物質を持つて來た組織なるものは、スピノーザに依つて完全な全體となつたのであつた。然し此の組織は單なるデカルト哲學の發達ではないのである。スピノーザの組織した構造を人々が、早くから表面的な觀察であるとか、不充分な知識で解釋したのだ等云つて居たものもあるが、然しスピノーザの作

り上げた組織とか構造は、一つの泉であり、創始者の創造的天才から出て來た創作である。何となれば夫は創作的であると同時に、時代の大思想の流を一つの全體にまで融合した綜合であるからである。此の大綜合の上に其時代の精神生活に與れる國民をして其目標を認めしめることが出來るからである。スピノーザは其生れと、教育と天才のあることにより東方のユダヤ人よりは遙かに進んだ學識を持つて居たのであつた。彼はユダヤ人中葡國系の人に屬して居るのでオランダに住むことになり、其保護國であつた獨逸の文化に強く影響を與へたのであつた。彼は此の國の國際關係によつたので、イタリー、ドイツ、フランス等の科學にも影響を與へたのであるから、彼の哲學は本當の意味で國際的のものであると言ひ得るのである。彼は如何なる國民にも屬して居なかつたから、彼の作り上げたものが國際的特徴を持つて居るのであらう。精しく云へば彼は益々歐洲民族によつて同化はされて行くが、彼の屬するユダヤ人としての特色を發揮したものであると云へる。

彼等ユダヤ人は民族の運命が如何にあらうともかまはぬ人種ではあるが、然して彼等は歐洲の歴史の經過中で特別扱を受けて居るのであるけれども、此の様な點を其組織中に少しも現はさなかつたことは偉とするに足る。

然し東方のユダヤ人は其父祖の信仰に忠實であり眞面目に從つて居る間に、即ち古代イスラエル人の嚴重な法則を守つて居る間に回教徒は移住を始めた。回教徒は移住開始と共にスペインにも現はれたのであつた。其關係から西方にあつたユダヤ人も、東方のユダヤ人と同様に、其奉ずるユダヤ教の神秘主義の強い影響を受けて居る。此の理由から神秘主義的の特徴はスピノーザにも殘つて居るのである。

彼は中世歐洲の人々が奉ずる神秘主義から脱れはしたが、遂にはニコラス、クザーヌスや、コペルニカスの組織で支へられて居た、伊太利自然哲學の無限の思想は變つた意味の神秘的特徴を持つて來る様になつた。其間にオランダ國境を越えて廣まつた獨逸神學の宗教的精神は、彼の住する環境の性質が彼の中に自然的に流れ込んだ。

就中フランスの哲學者はその中に主として流れて居る數學的な明瞭な思考方法を持つて來て、思想の組織に論理的建設を爲した。そして形式的確實性を與へて、思想の要素を完全に而して明瞭にしたのであつた。

かくてスピノーザはデカルト哲學の二元論を征服した。そして了解することの出來ぬ不可思議なものを通して結合せられて居た物質とか精神とか云ふ觀念を彼の言ふ無限の物質と云ふ考でも

つて統一して仕舞つた。

そして道德的特徴の最高のものとして神の愛を說き、人間の認識を最高のものとした。而して信仰は知識であり、知識は力であると歸結した。

神の愛は神の認識から直接に流出するものであり無限の愛の一部分である。故に愛は神を包攝し世界を包容し自己を包攝するものであるとして居る。

此の樣に歸一せられた觀念の中では道德と宗教は合一する。それは恰も自然と精神が合一せられたと同樣であり、認識（知識）の範圍內で合一するとした。

此の歸一せられた觀念は總ての知識の源泉であり、此の源泉があるから道德も宗教も流出するのであり、基督教的神秘も出て來るとした。

卽ち此の歸一せられた觀念と云ふのは神であつて、一切のものは神の變容であり、森羅萬象は神の變體とし、自然を全一と見、能產者と見た時に自然卽ち神であるとして居る。デカルトの述べた精神と物質、それは唯一なる實體神の二屬性とし、あらゆるものは此の神から流出するとしたのであつた。

此處に過去に於けるヨーロッパ諸國民の間に構成されんとして居た一つの世界觀が成立するか

も知れぬ。然し此の世界觀は從來のものゝ總ての要素を含んで居るのであるから、かりに一つの世界觀が出來上るにしても、此の組織の中で、デカルトの云つた「我あり、我考ふ」の我を自分でもつて認めると云ふことは不可能である。斯くして人類思想史上屢々提起せられた組織なるものが出來上るのである。然も此の組織は誤解せられ、或は表面上の注意によつて一面だけ解釋せられると云ふ樣になつて來て居る。永い間に本當に發達して來たものが、その次の時代の遺言になつて來て居ると見るのは正當である。スピノーザの時代に於ても又其次の時代に於てもデカルト哲學が主に行はれて來て居る哲學であつた意味はかうして理解されるであらう。

フランスに於てはデカルトが最初の指導的哲學者であり、最後の哲學者、思想家であると云つてよい。其後幾多の哲學の研究者が出て來て、宇宙、世界、自我と云ふものについて研究したのであつたが、何れも皆デカルトが示して呉れた特徴の他持つて居ないのであつた。歷史的科學、政治的科學についても又優秀な研究が行はれたのは事實であるが、デカルトの後、本當の特徴を持つた哲學者や思想家はフランスには生れなかつたのである。

十八世紀のフランスの唯物論は文化的、歷史的に眺めると來るべきフランス革命の一つの徵候として非常に有意義なものとなり、又思想の方面から云ふと一部は英國の自由主義に、一部は所

謂デカルト哲學に意義深い影響を與へたのであつた。

フランスの實證哲學の大家として知られて居るオーギユスト、コントは、ブントに從へば問題にならぬ人だとして居る。彼の主なる舊い思想は社會學の書物に述べて居る所であるが、チユルゴーやアレンベルトやサンシモンを引用して居る所から見て、其舊さ加減が分るであらう。彼の有名なコントの科學百科大辭典は、彼が一方に偏するほど研究した數學や自然科學的な修養により條件づけた制限されたものを除いて仕舞ふなら獨立せる哲學的著作と云ふことは出來ぬ。勿論彼の著作は其當時にあつては驚異に値する著作であつたであらう。彼の晩年に書いた著述は生活に苦んで居る哲學者が宗教的要求から書いたものだと云ふ立派な證據を殘して居るのを見るのである。

其書物の中ではコントは一宗教の開山の樣に現はれて居る。其彼が開山となつて居る新宗教では人間を至高の存在なりとして評價して居るのを見る。其最高至上の存在は個人から個人に書き傳へられた文獻によれば僧侶と同樣に歷史上の偉人を眺めて居るのであり、新聖人として尊敬せねばならぬとし、更に人類至高の道德を實行した人々は尊敬と云ふ聖餐を奉ることにより尊敬せねばならぬものであるとして居るのを見る。

此の新宗教の道德的命令は「利他心を活潑に刺戟せよ」と言ふのである。

コントに依つて利他主義と云ふ言葉は人々に強く印象されたのであるが、此の命令は明に基督教倫理へ退却したことを實證して居る。此の實證的宗教の文獻はカゾリツク教徒の文獻に似たものがある。

其後フランスにも幾多の人々が現はれて哲學的思考組織について研究して來たのであるが、彼等は外國の人々のやつた組織によるのでもなければ、又彼等はデカルト哲學の二元論の注意深き改造の光に浴して居るものでもない。又獨逸人が種々の名稱を附して居る。アンリ、ベルグソンの如き人でも記憶とか回想と云ふものを互に人間の認識の根本作用であるとして對立せしめて居るのを見る。

即ち記憶は印象を受け取り、然もそれを確保する能力として働くとし、回想と云ふ奴は一時分離して居る精神內容を結合する力なりとして居る。然も此の二つが自動的に反應を現はす機械として腦を働かすと云ふのだ。若し人が記憶と回想の代りに古い身體と精神に關する觀念を入れかへるならば玆に吾々はデカルト哲學で云ふ形似上學を得ることになる。

今日の心理學者は精神と物質と云ふものを認識が親しみ易い回想と置き換へたのであつた。即

ちデカルト時代にあつた微細な物質と云ふものに代ふるに神經系統なるものを以てし、外面的な肉體の運動は大腦がこれを起し變化するとしたに過ぎぬ。神經とか精神と云ふものゝ代りに明確に言ひ現はされて居らぬ記憶事項と云ふものを用ひたのであつた。既に神系細胞の上に種々の變化を起さしめるものは記憶によるとは、最近生理學者の研究によつて明になつた。最近は獨逸哲學の剽竊が佛國に於て行はれて居る。其中ではデカルト時代には尙意識されて居なかつた進化思想にデカルト哲學が適用せられんとして居るのを見るのである。

フランスにデカルトと同格な哲學者や思想家が出ない限り吾々はデカルトにもフランス哲學や思想を振り向くことが少ないであらう。此等の人々が世界文化を征服した價値について正しく認むれば最早やフランス哲學に向ふ必要はない。

デカルトは實に偉大な能力によつて明瞭な思想を發展せしめた。それで哲學なるものが廣い範圍に教育の根柢となつたのである。故に哲學一般は普通教育の主要部分となつたのであつた。

吾々は哲學的な興味からフランスについての一つの觀念を得るためにモリエーの「女給仕」なる書を讀まなければならぬ。其本の中には廣い範圍に於てデカルトの筆が亂舞して居る。此れを讀めば哲學的興味は退歩するかも知れないのであるが、全く消え去ると云ふことは出來ぬ。そこ

で此れを讀んで次の問題に參加することを得るに到るであらう。

過去に於ては比較的學問のある俗人は學問僧の爲せる議論に參加して興味を感じたのであつた即ち觀念は實在であるか又は單なる名稱に過ぎぬかと云ふ問題や、個人の差違は物質の上にあるか形式の上にあるかと云ふ問題について議論される場合に參加して興味を感じたのであつた。實に其一部分は既に伊太利人が新しい方法でこれを解き、英國人はそれを通過して仕舞つたものである。然しながら哲學なるものを普通教育の學科とするかどうかと云ふ問題は實に佛國人が完全に解決した所である。それによつて佛國人は第二の利益を得たのであつた。即ちフランスの哲學者達は近代的思想に動かされた問題を明かに認めてこれを設定せねばならなかつたので、近代思想の何者なるかを明にするを得た。然し其問題については彼等は少しも解く所がなかつた。彼等の努力は、其後の人々をして解決さす樣に刺戟する位のものであつて相對的解決しか爲し得なかつた。

然し科學の歷史から言ふと問題の精確な規定が決定的意味を有して居た時代がある。かゝる時代は十七世紀の前半であつた。フランスでは此の樣に近代思想による問題を作つたゞけで西洋哲學に與へた影響は主として終を告げて居るのである。

次の時代になるとフランスが西洋哲學に與へた影響は漸次英國の後に落伍するに到るのであるけれども、後に英國に於て盛に論議せらるゝ倫理問題の準備をして居たのであると云ふ點に於て見脫すことの出來ぬものがある。此の意味から非常に大切な部分を建設して居たのだと云ふことが出來る。

フランス思想から受けた大きな利益は最初から形似上學的世界觀を附隨し得たと云ふ點である然も倫理問題になると根本的な仕事を成し遂げて居ないと云ふことが其缺點となつて居る。

即ちデカルトのした研究「精神の感情」と云ふものについて見ても唯心理的價値しか持つて居ない。其上にデカルトでも又其以前のモンテーンの如きでもストア道德でもつて著しく採られて居るのを見るのみである。

感情の啓示と云ふことはストア哲學の云ふ所であるがフランスの著者共は此のストアの敎に引付けられて行つたのであつた。つまりストア派で云ふ感情の啓示に引きつけられて仕舞つたのであつた。然しながらデカルトの一派はどうしたことか傳說的な神學道德に傾いて行つて居る。然し後期に示した道德の說明は剽竊に生きて居るに過ぎぬものだと云ふことが出來るであらう。

オーギユスト・コントの言つた「利他心を刺戟せよ」（ビブル、プール、ル、オウトルア）の如き

も宗敎的に規定せられた同情道德の流れと規を一にするものだと云ふことが出來よう。

十八世紀の唯物論は其時代の革命的調子によつて極端に高められたのであつて、其調子を受けて極端に發表されたのであるが、フランス道德が獨立の方法で完成されて以來、唯物論はそのまゝになつて居るのである。

唯物論から出て來る思想から云ふと「總ての道德的衝動は直接に自愛に基く」と云ふのである。同時代に英國に存在して居た感情道德が言ひ現はさんとして居た樣な間接的表現ではないのである。此の方向を取つた最も通俗的な學者はと言ふとヘルベチユウスが其人であつた。

それは丁度百年前にラロツヘン、フーカーが諷刺的に誇張した格言中で「現實の人間を鏡に瞥へた」ことがあるがヘルベチユウスは眞面目にこれを受け取つた。そして言つて居る。

「總ての人間は皆其天性を持つて居る。其天性によつて抱括的に自愛せんとし人間の中に存する快樂と幸福を求めんとする努力するのは當然のことであり、それが人間の最後の理由になつて居るものである」。

「此の感情を判斷するなんて言ふことは馬鹿氣て居る」。

「故に私立學校でも、公立學校でも敎育するに當つては、自然的利己主義が總ての人の利益の

萌芽となる樣に仕向けることから發足しなければならぬ」と云つて居る。

恰も當時英國に於て論議せられて居た感情的幸福主義が穩に受け入れられた形である。

フランスの啓蒙學者が此等指導者の根本觀念として居る所のものを捉へて、そして近代の進化論の力を借りて、實踐的理想主義の方へ導かんとしたのは新しいフランス道德の特徵である。其上にフランスやイギリスに於ける道德哲學はコントの設定した利己主義、利他主義の對立を非常に價値あるものとして居る。

現在フランス道德で主として行はれて居る主要問題は「人間的自然的利己心から如何にして自然の法則に適つた利他心が導き出されるか」と云ふ問題である。

特にアルフレッド・フリエーとかジヤン・マリー・ギユヨウ等と云ふ人々は其青年時代から最も有意義な佛蘭西哲學者であるとされて居る。此等の人々によつて當時フランスに於て行はれて居た個人主義的道德は次の轉回をさせられて居る。彼等は外的强要による道德論や、內面的義務から出て來る道德論を放棄した。

そして行爲者自身の利益になる樣に反省し、意志を必要な程度に制限することから道德的行爲が明になるであらうと云ふ論を立てた。

生活の眞の目的は生活それ自身であり、從つて生活感情の起ることは動物的であるが、同時に人間的な行爲の根本衝動であると云ふ假定を立てゝ居る。此の假定を根本として、ギユヨウは『利他主義とは段々强くなり、廣くなつて行く利己主義である』との命題を徹底的に打ち立んとした。

直接的な生物學的經驗は彼の信じて居る如き力の假定を非常に强化した。

其後彼は自己の打立てた道德論を總ての形似上學的な假定から離れた經驗的なものであるとして觀察した。

總て習慣的に承認せられた道德は生活衝動の內面的分量の發達に伴ひ外延をも廣めんと努むるに到るものであると。故に益々廣がり行く道德は範圍を漸次廣めて行つて、生氣ある環境をも自我の中に包括せんとするに到るものである。此の原理から道德の發達と云ふものを見て行かねばならぬものであると。

彼は種族の播殖と云ふ事實の中に、外延の中に內包がかくの如く高まつて行くものなりと云ふ證據を見出したとして居る。

卽ち「種族が繁殖して行くので、子供が出來て行くので、種族の愛と云ふものが第一に發生す

る、隣人を愛すると云ふのは子供に對する愛を擴張したから第二のものとして出て來たものである。一般的隣人愛と云ふのは生殖愛から見れば第二次的のものだ。此の二つを愛すると云ふことから自己の思想を他に傳達せんとする廣い衝動が付け加はるものであると。

かゝる方法で本來の利己主義から利他主義が始まるものとすれば、通俗的な公民道德も、生命を犧牲にして生活を高めんとする根本衝動も同樣にして出て來るものだと云はねばならぬ。

玆に第二次的な利他的衝動が第一次的な利己的衝動に打ち克つたのだと言はねばならなくなる。冒險に對する快樂とか、結果に於ける希望なるものは生活感情を高めるものと感ぜられるではないか」とギュヨウは考へたのであつた。

彼は或る現象の前で停止して居る。卽ち犧牲者が眼前に確に死なければならぬと云ふ事が起つた場合には此の經驗的理論は拒まれるであらうと考へて居る。

此の極端な利他主義と考へられる行爲については彼は遂に不透明な形似上學の霧中に浮ばして仕舞つたのだ。此の點は彼の說明を了解し得ぬ。犧牲に對する佛蘭西道德の考へ方には滿足出來ぬ。

何となれば一度外的危險を恐れないで、冒險的勇氣を振ふ事を主なる動因として活動が開始せ

られた時、而して高まり來る生活精力が突進せしめられた時、かくの如き考へからは形似上學的暗黑が起るのみであつて從容死につく道を明にしたものと云ふ事は出來ないのである。生命を犧牲にする死の名譽と云ふことを考へないならば、どうして他の衝動を打消す如き强い生命感なるものが働くことが出來ようか？

善導大師が「よく自利するが故によく利他する」と述べて居るが、此の自利卽利他合一の妙境は此の樣な考へから起つて來るものではない。

そは何れにしても、此のギュヨウの考には「如何にして高まり行く生活感情から自己生命の犧牲と云ふことが導き出されるかと云ふ點に行きつまるのではないのである。卽ち彼の考からすれば自利主義と利他主義が一度對立した場合には窮極の本質からすれば、利他主義とは名稱に過ぎないのであつて、本質は唯自己自身の利のみ追求して居る自利主義であると云ふこと、及び絶えず發展して行く道德の理想が、自利の增加によつて成立するものだと云ふことをどう說明するかと云ふ點にあるのである。

ギュヨウ自からも言つて居る樣に、此の論は本當に倫理問題を解決するものではなく、倫理問題を形似上學的な雲の中に消え失せしめるものである。

故に此の議論は古代の利己主義道德を强化したものに過ぎないであらう。

然も此の樣な議論の生れ出ると云ふのは、當然佛蘭西民族精神其者の中に、抽象的でなくて、フランス人が生活上の至高善として尊敬して居る具體的理想が、實際的に働いたものを發表して居るのであらうと考へる。

民族精神の中に働いて居る此の道德は、强い利他心の中にある決定的要素を超越することの出來る、高尙にされた利己主義である。

此の利己主義が現はれる際には、此の衝動の背後に隱された動機として存する强い利他主義と云ふ決定的要素を超越して居るものがある。

就中共同的利己主義の立場から生活に關する感覺的善を求めて行くならば、此れが名譽とか尊敬と云ふ衝動を常に生活の外面に存せしめ、永く殘る精神的善其者を得んがためには感覺的善を犧牲にするに到るのである。此の善が個人の人格と結合するならば、其個人の人格は、個々の善を最高のものとして尊敬する全體の上に、卽ち國民の上に輝くであらう。

理想主義的特色それは此等の思想的代表者は旣に意識して來たのであつた。然しながら人類の協同團體、卽ち國家を個人の總計と見る個人主義は此の理想主義なるものを實用化することが出

來ないのである。何となれば個人的特徵は、個人が他の人に對して得んと努むる所のものであるが、それは個人の努力の理想的目的なるものを認めしめる妨となる。個人には努力の目的たる客觀的價値を理想の上に認めしなければならぬのであるが、それを認めしめることが出來ぬ。尊敬とか名譽と云ふもの、卽ち哲學的一般化の中に具體的概念が響く如くに言ふならば、理想を有する爲めに個人の生活が妨げられるのではない。理想を有する爲めに個人の生活が指導されるのである。

個人の人格の價値を高くすることが非常に有意義であるとすれば、人格を最もよい意味に取つて內面的道德的價値を指導する樣な外面的特徵であるとして考へられるのである。但し人格が絕對的な價値を有する如き場合にしか考へられるのである。

かくの如き外的價値は人間行爲を神聖にするために働くであらう。然し外的價値其者は道德的目的でもなければ、道德でもない。故に此の考へ方は傳統的な意味で云ふ哲學、倫理を持つて來るものではない。人間の主觀的方面のみを對象とする一つの德は唯宗敎的倫理の形に於てのみ可能となる。假令此れが神の存在を認める人間の直接の統一と云ふことに退き、或は外的啓示によつて告げられた神の法則と云ふものに退步しても、かゝる主觀的倫理は宗敎的な形に於てのみ可能

である。此れに反して人間自體が建設した倫理や、本來の意味に於ける哲學的倫理は協同團體に對する個人の關係を觀察し、其基礎となる場合にのみ可能である。人間社會、協同團體、國家に對する個人の關係を見て後始めて人間の道德が出て來る。

人間社會の問題に早くから興味を向けて居たのは實に英國の哲學である。然し此の英國流の考へ方は同時に他の根柢即ちフランスの思想發達と同じ樣に出發して居るのであり、フランス思想の影響を受けて居ることも又見脫すことが出來ないのである。

第二節　フランス思想の特徵と我國に及せる影響

昔は國の異なるに從つて、それ〴〵の著しい特徵のある思想と道德とを持つて居た。民族思想國民道德の名の示す通りである。然しながら近代に於ける交通々信の發達は此のフランス思想を我が國に持つて來ない譯には行かなかつた。哲學上のデカルトの考、政治、教育に關するルソウの考へ方、ギュヨウの中世的道德、思想此れは雜然としてフランスでは統一される所はなかつた

のであるが、それが雜然と我が國に入つて來た。我が國では明治維新以後これ等西歐の思想は事の善惡に不拘悉く取り入れられた。明治十年から二十二三年にかけて我が國に大きな響を與へたものは何と云つてもルソウの民約論であつた。此の主張を振りかざして居たものに中江兆民あり政治的に板垣退助あつて大に自由民權を主張したのであつた。此等の思想はやがて大に稱導せられ受け入れられて帝國憲法の創案となり議會開設となつて行つた。但し此處に吾々の忘れてはならぬことは此等の外國思想が大に我が皇國思想を呼び起したことである。國體に反する思想が大に起ればそれ以上に國體に歸る我が國民の精神的動向こそは實に興味ある現象である。

外來思想が旺盛を極め國體を危くせんとする樣な場合には何時でも猛烈な反抗運動が起る。我が國は此の國體の自覺に基づく外來思想に對する運動に依つて維持されて來たのである。

然らばフランス人はかくの如き滅裂せる精神生活を營み、又ルソウの述べし如く自由民權の思想に支配されて居るかと云ふにそうは言へぬ。フランス人は保守的な國民である。

最近百年間には實に思想に於て又實際運動に於て極端な表現をなし又行動を取つた。經濟的進歩と云ふ點からしても指導者であつた。然しながらよく觀察すると時には此の國民ほど傳統に捉はれて居る國民はないのであり、殆んどそれから脫れることの出來ぬ國民であるとさへ感ぜしめ

られることがある。同時に又政治的にも文學、思想、にも此の國民位ゐ突飛な冒險を犯す國民は見出し得ないのである。此の民族は保守的ではあるが天才的であつて、新しい學問でも藝術でも何時でも尖端を切つて行く。大正十四年頃、もしフランスが沒落して仕舞つたら歐洲は燈を消された樣なものだと考へさせられた。學者でも藝術家でも、社會改良家でも、科學者でも、何等拘束せられざる國民的表現を爲す此の國に負債を持つことは誰れでも異議なく認める所である。透明な思考は必然的に透明な表現を招くものである。又見にくいランプ臺を作り得ぬ。此れは理想についても見られる所であり、經濟的概觀の理論に於ても見られる所である。卽ちフランスは忍耐强い科學的研究や、輝かしい科學的發見の家庭であるとさへ云はれて居る。

フランスに住んだことがある人は、フランス人が情熱家で、勇敢で、儉約家で、快活で、奇智があり、暖い心を持つて居る人々であることを認めることが出來るであらう。

それでフランス人は其子弟を教育して行くに當り、其傳統によつて教育し、其雰圍氣に從つて教育して行くのであつて、これらに依つて教育を爲し遂げて行くのだと云ふことを知ることが出來るであらう。これを誇張して云へば、教授方法と知識と一致するとし、教授方法と道德と一致するとして居ると云へよう。教授方法は思想や知識を多く授けたり、或は少く授けたりすること

は出來るのであるが、思想や知識を作り出し得ぬのである。

フランスの偉大さは、他の諸强國の如く、進んだ學校を持つて居ると云ふことにあるのであるが、此の教育が原因を爲してあらゆる方面の效果を上げて居ると云ふことが出來る。此のフランスで行はれて居る教育と云ふものは思想や藝術が他の諸國を指導すると同樣に、世界各國の教育が行詰つて居るものに對して大きな暗示を與へるものであると云ふことは容易く言ひ得ることなのである。

哲學に於けるデカルトの思想にしても、教育又は政治に關するルソウの考へ方にしても、ヴントが退化せりと批評せるギュヨウの倫理思想にしても、又此等を繼承し發展せしめ來つた今日の佛蘭西思想にしても、發見的であり、非常に暗示的であることは事實である。我が國民も此等の大きな暗示を受けて昭和の今日になつて來た。更に此の暗示に基き西洋文明の缺點に氣付き、我が我を顧ると云ふ皇祖の皇孫に傳へられた鏡の德を思ひ出すのである。人面魚身の人魚の如き形態を取つて發達して來たフランス思想に比して、今日は大に考へ方を變化させられて來た。

西歐の近代思想の導火線は何と云つてもデカルトの「我れあり故に我れ考ふ」の命題から出發したのであつた。間違つた考と云はゞ夫までゞあるが、歐洲社會を結成し、共同團體を構成せし

めた內面的結帶であつたキリスト教的信條を打ち破つて仕舞つたのは此の命題からである。西歐の社會はキリスト教的信條と云ふ內面的な帶でしつかり結びつけられて居た共同社會を形成して居たのであつた。然るに個人の自覺と共に此の不完全な結帶は解かれて仕舞つた。此處に個人は家族的社會的慰安を得る道を失つて仕舞つた。精神的保證をなくして仕舞つた。此處に個人は意味のない然も目當のない勞働をやつて外部的な支配力を、金を得なければならなくなつた。これが目的を達するためには共同社會の代りに利益社會と云ふものを作らねばならなくなつた。共同社會から叩き出されて新に利益社會に入つた個人は何を目的とせねばならぬか、云ふまでもなく他の人と、無限の經濟の可及的大きな支配を目的とせねばならなくなつた。然らざれば大自然を征服せねばならなくなつた。

共同社會から離れて家を亡くした個人は此の自然が驚異と感じ壓迫と脅威そのものと感ぜられるのであつた。此處に敏感な佛蘭西人は自然科學の研究の火蓋を切つたのであつた。然し吾々の注意せねばならぬ重大な事がある。利益社會に住む個人の利益支配の欲望は限りのないものだと云ふことである。或る欲望が滿足せられるとそれが刺戟となり更にそれが大きな欲望を生ずることである。そして精神の力が外部へ〳〵と向けられ狂的な心的焦燥は貴重な精神修養の餘暇を奪

ひ去るのである。近代的企業家が註文による直接消費の目的たる商品を生產せず、市場に出す商品の生產を目的とし無限の利潤を窺つて居ることや、西歐の政治家や思想家か絕大の權力を有する超人を理想とせる心理狀態がよく理解される。

この權力把握の快感が近代西歐人をして社會の全體性を否定し個人の實在のみを肯定する個人主義を奉ぜしめこれから脫することを得ずして弱肉强食主義を實現することゝなつた。オーギュスト・コントの利他主義でもギュヨウの利他主義でも結局此の個人主義的のものである。近代思想の大波は教會を媒として結合せられて居たキリスト教と云ふ內面的結帶を切つて仕舞つた。かくして得たる精神的孤立は人間の內面にある內的連帶性を否定して仕舞つた。相互に猜疑、嫉妬、爭鬪を起して遂に破壞と絕望と迄導かれて行く。共同社會にあつては自己完成を期することは非常に望ましいことであるが極端に自己のみを主張して共同社會を崩壞せしめることは人間不幸の端緒であると云はざるを得ぬ。

イタリーに火を發しフランスに入つて種々の形で燃え上つた思想の弱點はかくの如くして漸次に擴げられて行つた。

歐洲大戰の慘苦を嘗めて精神的に自覺した西歐人は、殊にフランス人は敏感に此の個人主義の

根本的缺陥を認識し、個人主義とは逆な見方をして行く哲理を求めやうとした。即ち表現主義的な思想を要求して居る。表現主義は個人主義とは正反對であつて、國家、社會、或は家と云ふ一つの全體が存して後個人と云ふ部分が存すると云ふ見方であつて、部分の集合はどこまでも部分の集合で全體ではないと云ふ見方である。

現象學的研究が個人主義的認識論を放逐し、個々の感覺の機械的結合が人間の精神全體であるとの見方を排して、全體としての心理現象を研究し行かんとする形態心理學の出て來たのもこれである。社會現象を勝手に分解し概念化することの出來ぬ全體的な歴史的事實として見て行き直接的に理解せんとする傾向も出て來た。

此の態度がやがて吾と云ふものを見直す樣に人々を導いて來たのである。そして吾と云ふ具體的のものは大我、小我等と區別して考へらるべきものでなく一如のものとして考へねばならぬものだと云ふことになつて來た。

此の樣な考察法も獨逸に於て發達した如く考へられて居るのであるが、烽火はフランスで考へられて來たのであつた。

さあれ佛蘭西人は教育上我が國に對しては一つの大きな貢獻をして居る。ルソウが火をつけた

形式的な自由、平等、友愛の旗樞は教會を叩き壞して仕舞つた。組合學校、坊主學校と云ふ如きバイブル臭味のある學校まで叩きのめされた。

そして學校から宗教を叩き出して仕舞つた。それに代つてギュョウ等の造り上げた倫理をもつて仕樣とした。それが今日まで續いて來て居る。明治初年學校令の制定せられるやフランスの制が模せられて、我が國の學校には宗教々育は取り入れられてなかつた。そして明治二十三年に及び教育者並に國民の日常信奉すべき宗旨たる大詔は賜つた。教育に關する勅語が即ちこれである。

道德教育の方針に關する限りフランスから受けて居る制度上の影響は非常に大きい。然しながら其內容に關しては別であつて、今日に於ては教育勅語を軸とする所の國民道德の啓培となつて居るのである。

我が日本神精は決して英國思想やフランス思想を啓培するのではない。國體の精華として花咲かせし吾等の祖先の善行美學を模さしめ其右に出でしめ國家に奉じ、上は陛下の忠良の臣となり下は親しき父母の孝子たらしめんとて、日々努力を拂つて居るのである。

第四章　英國思想と我が國民思想

第一節　英國思想の概觀

英國がドウバーなる一小海峽を隔て歐洲の西邊に位せることは、その國民の思想生活をして比較的大陸の影響を受くることを少くして生活せしめたのであつた。然しながら科學其者については大陸を動かした思想の洗禮から脱れさしはしなかつたが國民の思想生活は大陸諸國民のそれに比べると影響を受ける事が少なかつたのであつた。思想生活なるものは非常に大きな國際的性質を有するに拘らずかくの如く影響少なく英國民が其日を送り得たことはスコラ哲學による所が少くはない。

思想の動きを經驗的方向、懐疑的方向に最も活潑に動かしたのは何と云つても英國人が其張本人である。經驗的、懐疑的思想の故郷はと訪ねれば英國であると直ちに答へられるのである。此れは西暦の十三世紀の終りにドン、スコツトと云ふ人により、十四世紀にはオツカムのウキルヘルムが決定的な代表者となつて居る。

ルネツサンス當時の英國の新哲學者は知識と信仰とを藝術的に結合せしめて大藝術家となり終つた。此の結合は外面的の結合であつて、フランシスカーナー教に於てはやがて此の二つが第二次對立を來すのであるが、とにかく藝術的思想家によつて外的に結合されたのであつた。

然し此等の人々は現代まで其善き部分を傳へたのである。即ち實際生活を尊重し、實生活に思想を向けて行かうとする此の民族の性質は、英國の國民思想民族精神の上に活躍して居る。

此の樣な性質はどこから來たかと云ふと、一部は英國人の有する根本的な素質から來て居るのであり、一部分は商業上から得られたのであり、更に他の一部分は外國の資源によらなければ生活の出來ぬと云ふ島國的地位によつて打建てられたのであると考へられる。

十七世紀の初頭に於て英國の思想的指導家の筆頭に數へられなければならぬフランシス・ベーコンは明に科學の系統から神學なるものを追ひ出して仕舞つた。即ちそれ以前からであるが英國のストア哲學者達は、無制限な譯の分らぬ事柄や神から啓示されたことゝして受取られて來た獨斷的な思想はこれを拒んで來た。そしてこれと反對に現世の生活問題に關しては感覺的な經驗の指導に任して來たのであつた。此の態度が遂にベーコンを生んだのであつた。

彼は宗教なるものを輕蔑したのではない。彼は政治家としての立場から見れば公共の生活の上

には宗教は缺いてはならぬものとした。唯彼は「科學上の問題の中には宗教的信仰を入れてはならぬ。科學なるものが信仰なるものに貢献する上に如何に力があるにしても、科學的な問題に宗教を入れてはならぬとしたゞけである。

當時の英國人は、どの思想上の指導者でも皆さうであるが――ベーコンの打ち立てた信仰と知識とを峻別した組織については考へ及ばなかつたのである。即ち此の時代の英國人は大底啓示と經驗とを堅く結合せしめて表現して居る樣に考へるのである。

ベーコンと同時代の人、ハーバートのケブリーなんかは啓示と經驗とを結びつけなければならんと云ふ樣な窮屈な制限は、科學の力で完全に破らねばならぬものだとしたのであるが、此等の人々の觀察は間違ではなかつた。玆に於て十七世紀の英國革命が準備せられたのであり、それに伴つた政治的關係は非常に思想の發展に貢献して居るのである。即ち絶對的な王權に反抗し戰爭までやつて議會を造り出したのであつたが、此のために英國の哲學は更に發展したのであり、英國思想一般を明かにせんとする宗教的動機と混淆されるに到つた。

吾々がシエークスピアーやベーコンを生んだ舊い英國と、內面的な諸種の關係から精神的特徴を變化せしむるに到つた新しい英國とを比較して見ると、此の民族の精神生活の重大なる變革は

此の政治的事變を伴つた宗教的紛亂から引出して見ることが出來るのである。此の宗教的紛亂が英國民の精神生活を變化せしめるのに重大な役割を演じて居るものなることを知り得よう。アングリカン教會なるものゝ信條は一つの獨斷とローマンカゾリツクの教義とを組合はして造り上げたものである。かの全カゾリツク教徒が教會の權威を一つに結合したものとして居る法王なるものは此のアングリカン教會は認めなかつたのである。

然しながら此のアングリカン教會なるものは英國に於ては絶對的な國教となつた。內的權威、信仰上の權威と結合すべき宗教的良心なるものが、專　外面的な政治的力と結合して仕舞つた。そして此の信仰に對して從順なることゝ政治的良心と云ふものが結合したのであるから、アングリカン教會にあつては個人を內面的に結合する紐の役目を務める知識と信仰とを缺いて居た。

絶對的な王威でもつて、國民に要求する所のもの、即ち國教に對して從順なるべきことは外的に强制することは出來たが、然しそのために良心を教會に結びつけることは出來なかつた。

かくの如く宗教が政治的形態を取るに到つたのはヘンリー八世がローマ教會から分離したことに原因を有して居るのであり、これが動機となつて政治的な根據を持つて來たのであつた。然し此れは一つの原因なのである。猶此の他に教會の文獻から世人が分離して仕舞つた。教會的文獻

は坊主の仕事と考へ、此の文献に立ち入らぬことが俗人の義務であると見て來た此の外的默許と云ふことも一つの原因となつて居る。更に又教會なるものが種々に分裂して仕舞つて個人的な信仰の要求に應ずることゝなり多數の宗派なるものが出來たと云ふ點にも原因がある。

此の樣な宗派が、英國教會の守舊派が保護して來た王權の倒壞を惹起して來たのである。獨逸の宗教改革に模倣して造られた此の宗派は聖書の中に傳へられて居る樣な純粹の教に歸つたのであつた。就中純粹な教義によつて居る事を根本原則とし、これによつて自己等の宗派の名をつけ政治的には大きな指導的役目を演じた清教徒の一派の運動は、獨逸の宗教改革運動に比べて見ると大きな差違點を持つて居る。

獨逸の宗教改革は主として新譯全書に基いて新教徒の教會を作り、其神學を建設したのであるが、英國の清教徒は舊譯全書の拔萃した箇所に據つて居るのである。殊に此の時代には舊譯全書の引用を保護すべきものだとする一つの思想があつたのである。

即ち、神に選擇せられた國民である舊イスラエル民族の上に行き渡つて居た信仰を知らなければならぬと云ふ思想があつた。此の考は英國に於ては曾てイスラエル人の間にあつた樣に宗教的信仰の領域から脫け出して政治的領域に移つて行つた。英國はエリサベス時代から政治的勢力の

增大すると共に自然に背後に横はる宗教的契機の中に入り込んだ。此の宗教的契機からイスラエル人の上に行き渡れる信仰を知らんとする考が出て來たのであつた。

革命以來既に百年の間に選擇せられた國民から發達して出て來た政治の原則を知り其意義を得ようと努めて來たのであつた。そして英國民は世界の大洋を支配し又世界の大部分の支配を行ふ樣に運命づけられた國民であると考へる樣になつた。

英國の艦隊が勇み誇れる西班印の常勝艦隊を破つて以來、此の考は廣つて來た。此の考は清教派の英人の有する神の選民たれとの要求と共に、選ばれた國民であるとの考を明に發表した。

同時に內面生活の上に、又道德の上に、清教主義が行はれて深い影響が與へられた。即ち此の現世の善に對して忠誠を誓つた神の選んだイスラエル人は商業貿易により彼等が利益を得んとする目的を達せんとする限り、常に神から保護せられるとしたのであつた。然も彼等は眞面目と嚴正とを要求し目的のない人生の快樂なるものを排斥した。特に外的生活は極く粗末な事迄も規正すると云ふ樣に道德の强制が其根本となつて居るのである。此の强制があるから感情を公平に發表する事を恐れると云ふのである。

其感情なるものが如何に發表されるかと言ふと大抵の教育ある英國人は、彼等の持つ大詩人シ

エクスピアーを大抵の書物中に入れて居る事がこれを證明して居る。其出版物の中にはかの感覺の鋭かつた古の娘を煩はした總てのものを入れて居る。然し清教主義は世俗的になつて居るので此の態度が早くから宗教生活その者の上に反映して居るのである。

英國教會が政治的に解放せられてより、別に宗派を作つて行かうとする傾向が出て來たのであつたが、此の傾向は遂に清教徒から分離して仕舞つた獨立教なるものを成立せしめたのであつた。此の傾向は始めは宗教的要求から起つたのであり、信仰の强制に反對したのであつたが、此の方向は益々宗教的關係を成立せしむるに力を添へたのであるが、同時に此の中に法律をも取り入れんとする方面をも包括したのである。かくして十八世紀の初めには一種の獨立教會の一派として英國流の無神論を發達せしめたのであつた。

此の思想の流れは英國の革命時代及びそれ以後の哲學に流れて居るのである。就中吾々は此の時代の最も有名な思想上の代表者としてトーマス・ホツブスを擧げて見ようと思ふ。彼は此の思想を動かし轉開せしめる多くの動機を統一した人であつた。

彼はベーコン以後英國の生んだ大思想家である。彼の職業は政治家であつたが、非常な努力を拂ひ學問を勉强したので彼は學問的に非常に大きな影響を與へる地位を獲ち得たのであつた。即

ち彼は新しく成立した科學をしてスコラ哲學に代はしめんとし、それだけ値打のあるものとせんとしたのであり、新しい科學の領分を明かにし其組織を立てんとしたのであり、研究方法上の新しく開かれた道を示すために努力した。それで一生或る貴族の秘書官と云ふ卑しい地位に止まつて居たのであつた。

ホツブスは其時代の事件を刺戟する如き大きな仕事をしたのであつた。彼は熱烈なスチュアルト家の黨人であり、英國にては革命が勝利を得た結果葬られなければならなかつたかの絶對的王政の特權につき無頓着に述べた唯一の人であり王政の特權擁護の第一人者であつた。此の舊時代の防禦の第一線に立つて居たホツブスの頭の中は、立場が立場であるに拘はらず新しい考で充滿して居たのである。

其考と云ふのはガリレオの機械的自然科學やコペルニカス的な組織によつて始めて明にすることの出來る樣な觀念であつた。

彼は同時代のデカルトの考については久しく忘れて仕舞つて居たのであるが、漸くデカルトを研究した。そして非常に一般的になつて居た此のデカルトの組織の弱點を他の何人よりも鋭く認めたのであり、最もよく其弱點を指摘したのであつた。それであるから彼の頭の中に考へて居る

考へは彼が絶對的國家論で述べて居る原理と反對して仕舞つて居たのであり、又彼が彼一派の勤王黨の立場を明にせんとした動機とは全然相反して居たのである。彼は決して正統派には屬しては居なかつたのである。むしろ彼は急進主義者であり偏見から脱け出した思想家であつた。即ち彼を內面的に言へば自由思想家であつたのであり、外面的に云へば、即ち表面から云へば、所謂政治家革命家は法律の禁を犯した罪人であると斷定する所の保守的な人間である。

ホツブスの最も著しい特徴は彼の稱導する哲學的無神論から正に彼の立場たる政治的絶對主義に根柢を與へんとした事である。彼は絶對的な王朝についても單に是認するのではなくて、むしろ王朝は唯一回限り君主と人民の間に結ばれた契約によつて建てられたものであるから王朝は其特徴を備へて居るものであるとするのである。

而して個人の意思と（夫れを制限する）法律のある所では市民の平和と其生活が最もよく保護せられるのであり、政治其者の中で、種々の意味を述べ主張を爲して、相爭ふ樣な場合には、保護される所がないのであるから絶對的王政を最善とすると云ふのである。此の樣な議論はホツブスが創始者ではないのである。古ギリシヤのソフイストが既に述べて居る所であり、彼はこれを改め新しくしたに過ぎないし、完成したに過ぎぬのである。此の議論は國家を根本的契約と結び

つけて居る議論である。

若しソフイストが其服從せる暴君を助長するために此の議論を爲したとしてもホツブスの述べて居る所は少しくこれと異なるのである。即ち永く續く絶對的王政を唯一の適法の國家の形態として認めしめ革命の狂暴に反對せんがために此の契約の止揚することの出來ぬ點を誇張したのである。此の時代の革命家は國民の主權を議會によつて行はんとしたのであつた。

此の哲學上の急進論と政治上の絶對主義の結合は、ホツブスの宗教に對する態度の中に最も鋭く現はれて居る。彼には英國教會が唯一つ認められた教會であつた。それは教義の持つ內的眞理が優れて居り、此の教義に據らんとしたゝめではなく、英國教會が國家の教會であつたゝめである。彼は英國教會の信條が眞理であるか否かと云ふことは彼には別の問題であつた。彼には英國教會は國家の教會なるが故に唯一の教會なりとしたのであつた。それで彼は言つた。改革家中の或るものが作り上げた宗派は迷信を敎へて居る。迷信は何れも有害であり絶滅すべきものであるとした。それで信仰と知識が分離せざるを得なくなつて來た。知識と信仰の分離については既にベーコンが「科學の興味」と云ふ書物の中で鋭い言葉で現はして居る。此の分離がホツブスに對して自由な道を開いたのであり其時代の自然科學に基いた一般的な世界觀を構成するに到つた。

彼は世界は一つの機械であると見た。そして人は唯此の機械の一部であり、又人間の本質は物質的本質である。ガリレオが感覺を外部に存する物に存する屬性ではないとしたゝめに、ホッブスは外的對象から起つて來る感覺や精神上に起される事件を吾々には明に認めることの出來ぬ身體的な名稱で說明したのであつた。これをもつて見れば彼には身體的世界が眞の世界であつた。精神生活は、此の現實に存する存在物の基礎の上に廣げられた現象世界である。

此の現象世界は吾々が事物を觀察する際に吾々の眼前に現はれる所のものであつて、此の現象の中に事物の本質が存するに相違ないのである。故に事物を觀察する場合には現象の本質を究むる事は拒まれて居るのである。

殊に吾々の行爲の條件とか、吾々の隣人に對する關係と云ふものが問題となつて居る樣な時には殊に然りと云ふ事が出來る。此等の現象を理解するためには少くとも種々の事實が集められて組織せられたかの物理現象を理解する方法を類推的に持つて來て判斷しなければならぬ。

此の樣な意味からすると社會なるものは、根本的に云ふならば個人の集合である。卽ち各個人が物理的に、卽ち或る機械的な力によつて集合せしめられた全體が社會なのであるから、各個人が自己保存の衝動を道德的に規正する如く、社會も又道德的に規正されなければならぬものを持

つて居るのである。

故に利己主義と云ふ奴が道德の根本となつて居るのであつて、利己的鬪爭が總て原始社會の狀態となつて居るのである。故に人間に反省とか反省によつて爲される理智による興味の理解と云ふものが、個人の中に發達すると直ちに、かの國家の契約によつて、進められた文化狀態の自然の推移を示す目標となる目的が作られ進められる。此の目的を解剖すると云ふことは野蠻への退步を示すものであるからこの事は爲し得ぬ所である。

かく此の組織は向ふ見ずの唯物主義であることを理解することが出來るであらう。此の蠻勇的唯物主義は十七世紀の終りに英國に現はれた自由思想家に繼承せられた。然し此の急進的な思想の流れは英國思想の主流の外に外れて仕舞つた。英國にあつたホッブス一味のものは反對に彼の說は知識階級を支配して居るフランス思想の後を追ふものであるとして尊敬せられたのであつた。世に行はれて居る道德は早くから社會的儀禮の示す命令なりとして判斷されて居た。英國に於ては其儀禮は誰しも傷ふてはならぬものであるとされて居た。此の儀禮を誤つた者は公の意味で過失者と認められ、如何に辯護してもかゝる非難から脫れることは出來なかつた。

故に英國思想の取つて來た主なる方向は宗教問題と哲學上の問題を分離し思想問題となると內

面的に此の社會的强制を含むものとして來て居る。宗教と哲學の分離は、よし宗教上の確信について爭のあるが如き場合でも、科學的には個人に自由に確信を與へしめることが出來る樣になつて來た。然し此の宗教と哲學の分離と云ふことは哲學的批判の問題ではないのである。

此れを言葉を換へて云ふならば、哲學的批判には宗教的信仰は通用し難いものであるとの意ではないのであつて、個人の信仰に他人が煩はされると云ふことは許すことの出來ぬ問題であるとしたゝめである。此れが宗教問題に對する英國思想の特殊な立場を造つて居るのである。

既にフランシス・ベーコンは其著「自然的神學」の中で哲學と宗教の分離を述べて居る。此の態度は十九世紀に出現した哲學者ハーバート・スペンサーの尙取つて居る立場である。此の思想問題から宗教を放棄した事は世界觀を作る上の態度に關係して來るのであり、從つて世界觀と云ふ如き問題は主として宗教問題に屬するとしたのであつた。

故に英國流の立場からすれば宗教問題の前面には全く實際的な生活問題が存するのである。それに對して神學的代表者によつて作られた哲學には非常に高い神秘的特徴を帶んで居るのである。其哲學が殆んど信仰的に調子を合はせて居る英國の自然研究者としての偉人アイザック・ニュウトンを手本とした爲にそれ以上に出る事が出來なかつた所以である。卽ち明に認むる事の出

來る動機に歸すことを得ぬやうなことは、更に研究して見なければならぬものであるからである。

感覺世界の限界に關してドイツ・イタリー等に起つた文藝復興が高めて行つた空想なるものは英國思想の中には鋭い理性的なものとして入り込んだ。然し英國思想なるものは大に明瞭さを缺いて居る。時には佛蘭西に起つた科學が示して居る表面上の證據すら缺いて居る。此の事は古典的哲學者ジョン・ロックが著名な例としてこれを模範的に示して居るのである。彼は遲鈍であり、煩瑣であり、明瞭さと云ふよりも能辯を缺いて居る。其上に彼には佛蘭西哲學者の示した如き、殊にデカルトの示した如く人を說得するに足る優美性と云ふものを全く缺いて居る。英國の學者は理論上の問題と無關係に生活問題を對立せしめ、理論上の問題が實際問題に對して重要さを示す限り、此の理論上の問題は徹底的に研究されるのである。卽ち英國の思想家は優れた實際的感情を持つて居る人々である。これに對して佛蘭西の思想家は非常に高度に理論的興味を有し豐富な感情を持つて居る點に於て英國の思想家と區別することが出來るのである。

此れによつて見ればジョン・ロックは淸教徒革命後の英國中產階級の代表者であると云ふことが出來る。彼は宗教問題については其處に何等意味の上の不調和を感じなかつたのであつた。其故は個人の屬して居る教會とか或は宗派に何等他の問題を起さなかつたからである。人は科學上出

來る限りの確實性を得、出來るだけの獨立性を得んと努力して居るのであるが、それと共に荒唐無稽な獨斷を認むる宗派のあると言ふ事は、便宜主義によつて信教の自由を許されて居る國にはよくある現象である。哲學は此の分離を考へて見る任務を持つて居る。故に哲學は問題を限定して一方では實理的科學に一方に於ては公共生活に最も近く横はる認識問題、道德問題に制限せねばならなくなる。

此の二つのものに對して感覺的經驗を豐富にするには人間の理智も意志も共に何等貢獻するものでないと言ふ公理が分つて來た。然も彼處にて眞なるものなれば此處にては善として値打あるものだと云ふ考に對し、ロック並に其後繼者等は決定的な實際的見地を取つて居るのである。

かくして英國の自然科學は現存せる吾々の身體の特徴の外にある唯一のものとして擴がりと云ふものと不透明と云ふものを受け取つた。何となれば自然科學は此の二つの假定から最もよく說明することが出來たからであり、其目的を達するを得たからである。故に彼等は自然科學は最も有益なものであり、自然科學は吾々が日常經驗して居る五官の認識の强迫によつて確にせられるのであるとした。

此處に於て又ロックは常識を次の如きものとして規定したのであつた。彼は常識を「反省的熟

慮は總ての觀念の源泉であり、其結合の原動力である」とした。故に種々の假定が可能な所では實際上最も有用なものを選擇すべきであるとした。

此の立場が道德原理の最上のものに導いた。卽ち善とは第一には個人に第二には個人の屬する社會に有益なものであるとの原理に導いた。勿論ロックは自己の利益と他人の利益とをどうして定めるかと云ふ問題は困難な問題であるとした。そしてかゝる困難ある問題は公の意味、誰れしもが認める意味に從ふべきものであると感じた。玆でも又便宜的道德が遂に道德の決定的原理となつた。此の如く思想、哲學の英國流の說明には社會的强制が現はれて居るのであつた。此の點を後にジョン・スチュアルト・ミルが非常に嘆いたのであつた。此の社會的强制なるものが合法的自由の光の下にある英國民をして世界中で最も不自由なものたらしめた。

哲學者が自己の努力した結果の良否については決して注意するものではないとロックは考へたが、此の考へは哲學者が何等か世界に貢獻したと云はれる如き場合にも當て嵌まるとしたのであつた。又恐らく此れと反對のこともあるであらうが、これだけの事は正當に言ふことの出來るものである。卽ち

其結果が大なれば大なるほど、益々彼は自ら心潛かに考へて居たものを現はすに成功したに相

違ないとするであらうと。

然しジョン・ロックは其ために適當な發表を見出したのではなかつた。假りに彼について調べて見て今日吾々が自明のことゝ考へて居ることも、彼の根本的な吟味によつて問題となり疑問となつて來たと云ふ樣なことはあるにしても、彼が適當な發表方法を見付けたのではないと云ふことは充分に述べ得る所である。

此のロックの及ぼせる影響につき考察して見るに、其外的特徴なるものがよく、英國流の道德とか思想の弱點をよく現はして居る。明瞭さと言ふ事と、根本的であると云ふ事が英國の科學的文献に見え著しき程度で現はれて居る。此の場合に明瞭と云ふことは、甚だ皮相なものであるとして拒絶したり根本的であると云ふことは例外であるとしたり、又は深いと云ふよりも廣いと云ふことであるとして、これを否定してはならぬものである。

此のロックの發表したものには英國思想のみならず他の民族的特徴も現はれて居るのである。其特徴に基いて英帝國の島國的地位が、或る程度まで思想的風潮に影響して居る樣に思はれるのである。

英國人は奇體にも此の頃は自然科學に於ては他の國の人々が作り上げた成果を取り入れないの

である。そして次の如き特徴を示して居る。卽ち英國人は海外諸國の諸發見をそのまゝ受け入れるのであつて、自國の國風に同化し、それを出來るだけ結合して常に新しいものを作らんと準備して居る樣にも見られる。かく力の保存の原理の發見者としてのロバート・マイアーやヘルンホルツ等は多くの英國人には、餘り價値ある人と云ふことは出來ないのであつて、却つて其原理を確證せんがために注目すべき結果を上げたジョウルなる人を發見者として重んじて居る樣に考へられる。哲學上に於ては此の島國的特徴はよく現はれて居るのであつて、英國哲學をして主として自分自身の世界に居らしめると言ふ點に特徴を示して居る。

「世界の文化に貢献したものは英國人ではなくて他の歐洲人である。此等の歐洲人に感謝の意を表さねばならぬ」とはヴントの謂つて居る所であるがやはり英國人も又世界の文化に貢献して居ることは事實であつて、我が國民は英國思想の影響をも多分に受けて居るのであるから、我等は又かゝる英國思想の指導者にも敬意を表するのである。

然し英國の哲學それ自身は獨逸の哲學の精神には殆んど觸れずに居る。此れは英國思想が非常に保守的であると云ふ事に起因して居る。此の英國思想の特徴は道德的な强制を犯さない限り、個人を喜ばしめとる云ふ個人的自由主義の香の高いことから此れを知ることが出來るであらう。

此の道德的强制なるものは、英國人の哲學的文獻の外面的特色とすることが出來るのであるが、偶然に英國思想に於て確保せられたものと見ることが出來るであらう。

現代に到つても尙英國の哲學はロツクの使用した哲學的名辭に依つて支配せられて居る。そして十七世紀時代に語彙として現はれて來なかつた槪念は本質的に現代の英國哲學の中には入つて居ないのを見て、英國民が如何に保守的であるかと云ふことを知ることが出來るであらう。

カントとか其他の獨逸の哲學者と接近した英人があるとして、此の英國人と此等の思想上の指導者とを置きかへることが出來たとしても、英國人にはそれは何等益なき努力としか考へられないのである。此の無駄骨折は近代の英國の哲學者の講義にも現はれて居る。

ハーバート・スペンサーを正しく理解するためにはカント前の時代、ライブニツツ前の時代に行はれた思想を回想せねばならぬ。然し其時代には尙現代の新哲學や認識論はなかつたのであつた。

勿論カントやフイフテや、ヘーゲルの著作を讀まんがために獨逸語に熟達せる學者は英國にも澤山ある。然し此の外國思想を英國語で適當に發表すること、飜譯することは彼等の拒絕する所であり、感情的に外國思想を排するために、彼等は理智を感情によつて害して居るのである。故

に英國人は、教養のある人も又哲學的な指導者もであるが、彼等の故鄕の哲學に留まることを非常に好んで居る。

英國では次の時代に對して、或る哲學的著述家の言葉が殆んど寺院法の樣な意味を持つに到るのであるが、此の樣な場所では、思想の外形を保存せねばならぬのである。此の外形の保存はやがて其內容を理解せしめるのであるから、內容の保存を爲すためにも外形の保存を嚴にせねばならぬことになる。吾々は實にジョン・ロツクの哲學は、ハーバート・スペンサーや最近のプラグマチズムに到るまで一貫して保存せられて居るものであつて、英國思想の固き保存物であると言つてよいのである。

ロツクから哲學を認識問題、道德問題に割限すると云ふことが始まつた。ロツクから經驗の世界、感覺世界の事實と云ふものは、總ての經驗の基となるものだと云ふ考が起つた。ロツクから合理的な反省を事物の上に移すと云ふことが始められた。然しながら英國にもロツク前にもロツク後にも有意義な哲學者の出て居ることを忘れてはならぬ。ベーコン、ホツブス、バークレー、ヒユウム等は天才的な直觀に於て、又徹透せる敏感さに於て遙にロツクを超えて居る。彼は決して彼が生きて居た時に作つた特色をもつて英國思想の特色とするものでもなく、英國思想の完全

な典型を作つたものでもない。彼の偉大なる所以は來るべき英國思想に大きな影響を與へたゝめでもない。

彼が大きな仕事をしたと云ふのは知識と信仰とを峻別したことにある。

清教徒の革命後新しい町人（市民）社會に出た此の哲學は便宜主義から云つて都合がよいのであるから、此等市民の良心を眞面目に代表するために用ひられたことにある。

理論的に謂ふならば、感覺的經驗の上に建設せられた實在論と、實際的に利己主義から誘導されて來た利他主義なるものは、共に哲學の外に存するものである。

然し今一人英國には注意するに値する人がある。即ち「聖書によつて、哲示が媒介せられる」と云ふ信仰上の必要を滿足さすために英國思想を忠實に發表した今一人のジョン・ロックのあることである。即ちジョルヂ・バークレイが其人である。

此の哲學を作るに到らしめた强制力に對して反對するが如き哲學は、常に單なる一部の力となるに過ぎぬと云ふ事が明になるであらう。

然し此の强制力から自由思想なるものを分離して、此の自由主義と猛烈な戰をやつた人は即ちバークレイである。自由主義に贊成する思想家はロックの經驗的實在論に贊成する。自由主義者

は此の實在論を唯物主義に迄發達せしめた。

自由主義者は自己の主張を正當なものとし、神の信仰を最高のものなりと認める啓示の觀念に對して鬪つた。そして物の存在をもつて世界の存在する一般的原因とした。

固く神の啓示を主張したバークレーも、神の本質は全く自然の經驗外にあるものに非ずとした。啓示は心理的のものであると爲し、原始的な唯一の純粹經驗として評價した。それ故に外界の總ては吾々にたゞ吾々の意識の媒介のみにより認められるものだ。從つて外界それ自身はかの精神的世界の一部に他ならずとし、其精神界に於て神性が啓示されるとした。それ故に精神は人間の思想の調和を生み出すものであるとした。

バークレーの哲學が嚴密な經驗主義を固持し、其經驗主義を論理的に完成したにしても、經驗主義を包藏せる理想主義は經驗主義に反對したのであつた。彼は哲學と宗教とを結合せんとして研究を積みそれによつて經驗主義に反對した。此れが英國思想の一般的方向である經驗主義に反對した。かくしてバークレーは、非實際的理想主義者として嘲けられ、寂しき哲學者としての生涯を果てた。バークレーの時代の人々は、其時代唯一の英國の生んだ此の理想主義者を嘲笑したのであつた。それによつて彼の英國思想に對する影響が如何なるものなるかを想像することが出

來るであらう。

彼は國内に普き實在論に反對し、皮層的な幾等も反對し得られる樣な經驗的觀念論に反對するバークレーの論は、嚴密な批判を下す時にのみ、其價値が認められ、彼の印象を見落さない樣になる。彼の殘した印象を見落さゞるため、無暴な批判として殆んど支持することの出來ぬ形似學的直觀と分離したのであつた。そして英國思想は一方に偏した經驗の心理的分析を受け入れ、それを更に發展せしめた。

かくして十八世紀の後半に於て英國思想を支配した思想即ち現代の人々が心理主義と名づける思想が其方向を得たのであり、成立したのであつた。

非常に聰明であり後世に多くの影響を殘した偉大なる英國の思想家はダビド・ヒュウムであつた。彼の個人的な大きな人格は、英國精神の特徴とスコツトランド精神の特徴を合一したのであつた。

此のスコツトランド精神なるものは、前世紀に起つた宗教騷動によつて英蘭土人の上に强く影響して居る。殊にスコツトランドの清教徒、獨立教徒が大きな影響を與へたのであつた。英國が自國の特殊な政治狀態から培つた獨立精神は宗教的方面にも移つて行つたのであるが、此の獨立精

神と、スコツトランド氣質とを共有して居たとするならば、ヒュウムは唯哲學の上に此の態度を移したのだとすることは出來ぬ。即ちヒュウムの如き哲學について云へば哲學を全然宗教と無關係に對立させることの出來ぬものである。

英國民の有する獨斷的經驗主義の傳統と便宜主義から出來た宗教に對する關係と云ふ此の二つの方向から出て來た獨立性なるものは此の思想家に對して內面的に英國哲學の除外例を作らしめた。

彼の哲學はよく發達せしめられ系統立てられた。そして他の民族、例へば獨逸民族の上には大きな思想上の影響を與へて居る。知識と信仰を二原論的に考へて來た從來の立場を捨て科學的に嚴密に批判した。然も此の批判を確實に行へば行ふだけ彼は忠實に英國哲學の持つ經驗的立脚地に忠實に留まつたのを認めることが出來る。

彼に從へば眞僞を分つには經驗のみが必要な材料を供給する。然して此の要求を滿足さすためには哲學的考察を加ふる二つの範圍が存するのみなるを知る。即ち認識及び道德であるとした。そのためにヒュウムはバークレイとは正反對に非形似上學者である。彼は同時に又心理的考察方法を受け取り、それに依つて經驗的認識論と倫理學に强固な根據を與へようと試みたのである。

唯彼は此の二つの範圍卽ち認識と道德につき實際的利益と云ふものを與へたのであるから彼は英國の傳統に忠實であると言へよう。彼は處々で英國思想の傳統的徑路から多少の獨立性を示して居る。

彼は過去の主知主義が敎へた樣に、論理的思考活動によつて矛盾を調和し得るとした。此の論理的思考活動は眞理自體の生產物であり、現象上に加へた反省であるが、總ての經驗的內容を結合する聯想の心理的機構の根柢をなすものであつて、此の根柢の上に反省が高められて行くとした。つまり聯想活動の根本は論理的思考活動であるとした。かくしてヒユウムは聯想心理學の建設者となつた。此の聯想心理學は英國心理學の第一線に立つものであつて、大抵の英國の心理學者は此の立場に立つて居りこれから脫れることの出來ぬものである。

此の反省とか又は生產物とか云ふ此の二つの範圍に於ては古い合理的反省と云ふ奴が影響せぬ限り此の聯想心理學的立場を取るのである。故に精神生活を組織するに當つて生理的機構を取る代りに心理的機構を取る樣になつて來たのであつた。

それは恰もトーマス・ホツブスの受け取つたと同じく、此の觀察法は直接的であり經驗的な道を開いたのであつて、可能な事柄についての形似上學的な道を開いたのではない。彼は根本的な

認識の觀念を心理的な道へ導いたのである。此の方法を彼は因果の概念と物質の概念の二つに對して適用したのであつた。彼は正しい聯想を相互に從屬せしめたのであつた。何となれば此の聯想は心理的な動機から言ふならば同時に起る現象であると證明したからである。此の證明は認識概念の心理的根柢は概念それ自體と同一であると云ふことを排除して居るものではない。

又此のヒユウムの心理主義は彼の哲學の第二の成分たる道德哲學に於ても又失敗して居る。總ての道德の基礎を彼は隣人に對する沒我的獻身にありとして居るのであるが、彼によれば、その道德の基礎と云ふものは我々自身の愛情、吾々の幸福の感、我々の悲を心理的に他の人々の感情と意識の上に置きかへて見ることから起るとした。ヒユウムは此の道德的適用についてはロツク一派の反省的見地以上に進んだ。悟性の作用の中に感情、愛情、を現實世界の有意義な內容に外ならずとして取り入れた。認識論の範圍では、明にバークレーの心理學の刺戟が有效であるならば、玆に其の美はしき美的感情、倫理的感情を說いた人々も又有效であるとせねばならぬ。此の仕事をやつて除けてその時代の人々から特別な待遇を受けた人でシヤフツブリイのあることを忘れてはならぬ。此のシヤフツブリイはヒユウムの前驅者であつた。此のシヤフツブリイは反省道德と密接に結合して居た功利主義を切り離した最初の人であつた。卽ち道德を人の性質の中にあ

る利己的感情と社會的感情の調和平均の上にあるものだとする彼の倫理を建設せんために切り離したのであつた。

シヤフツブリイもヒユウムも同樣であるが、此の兩人共に道德の心理的根源をかくの如き純粹な心理的觀察から導き出さんとして失敗した。かくの如き心理的觀察から道德的規範の强制的性質を導き出すことに失敗した。此の兩人は彼等の先輩とか、以前に世を支配した英國の主知主義を分つために努力した人々の如くに歐洲諸國の哲學の上には影響を及ぼさなかつたのである。

英國に於てもシヤフツブリイの主張する感情道德が受け入れられなかつた。本來ならばよく此の論の受け入れられる民情であるのであるが受け入れられなかつた。其理由は彼が英國傳來の反省道德を捨てたからである。

ヒユウムが心理學や認識論で行つた聯想に關する敎は非常に深い影響を與へた。此の影響を受けた彼の學徒なるアダム・スミスは同情的感情論を發見したのであつた。此のスミスの他にスコツトランド出の哲學者に命名に値する後繼者を見出さないのである。

英國に於てはホツブスやロツク以來一般的となつた利己的功利主義の方向は大に流行した。此の方向は世界的にも大に流行したのみならず、それと共にかの古き淸敎徒の用ひた意味と全然同

じく人間の有用なること、神の滿足と云ふ事を關係付けた點で淸敎徒の道德と區別されるのであるが、英國一流の神學的道德が世を支配する樣になつた。

此の功利主義は先に世に擴がつた考へ方と非常によく調和したのであるが、それと同樣に此處に吾々が近代英國の功利主義の建設者と見做さなければならぬ人がある。ヂエレミアス・ベンザムは卽ち其人である。

此の十九世紀の前半に非常に大きな影響を與へたベンザムと云ふ法律學者は英國の哲學者には屬して居なかつた。彼は唯法律が道德に對する關係に興味を持つて居たのである。此れに對して彼は何が個人に利益であり、有害であるかと云ふことの反省が人間のする行動の動機なることは明かであるとした。彼が此の問題に深く關係すればするほど、此の問題が客觀的にどんな價値を有するに到るかと云ふ問題を提供するに到つた。

玆に於て彼は各個人が努力して求めんとする幸福と物質なるものは同じく他の人も又求めるものだと云ふことを豫定した。そして自己の求めんとする幸福なるものは他の人が自分と同じく努力を拂つて求めんとして居るものだと反省した時に利己的願望は制限されるものだとしたのである。

彼は個人の快樂を廣め、個人の快樂を起さしめるものを幸福とし善とした。幸福を持ち來すものは總て善であるとした。卽ちエピキユラス倫理の格言をそのまゝ受け取つた。そしてベンザムは一種の一覽表的に幸福を持ち來す資材の概觀を企てたと云ふ事が一つの新しい試みであつた。これは新しい事柄である。此の一覽表的な概觀は生理的健康から自己を信仰することの確立と云ふ事まで列叙して居る。此の資材を獲得したり保持することは吾々の力によるのであるが、然し彼に從へば此の力によつて保持さるべき資材なるものは貨幣價値で評價することの出來るものであるとしたのであるから、人間の接近し易い資材は彼が規定せる富と云ふものと一致するのである。卽ち善と富と一致するとしたのである。

故に各個人が努力するに從つて、富は所有することの出來るものであり、儲けることの出來るものであるとした。

然しながら人民は暗默の間に、或は明白に契約して國家を作つたのであり、此の契約の執行者は國家であるから、然も又幸福資材獲得の權利は各個人平等なることが認定されて居るのであるから、富の分配を如何にすべきかと云ふ問題が起されるのである。又或る國家の內部に於ける幸福の感情の總和を出來るだけ大ならしめるのには富の分配を如何にするかと云ふ問題が起されて

居る。此の問題に對する答へとして、功利主義の有名な原則、卽ち最大多數の最大幸福と云ふ答案が出されたのである。一般にこれがベンザムの完成した功利主義であるとして理解されて居る。假令夫が大抵はベンザム流の價値尺度及び貨幣價値に從つて評價することを止めてもかく理解されて居る。

更にベンザムの學徒の中で最も親しむべき偉人、ジョン・スチユアルト・ミルはコントの主張した利他主義と同情的感情の演繹によつて、ヒユウムの如く功利主義の原理を完成せんとした。ベンザムの主張した問題は次の如く纏めることの出來るものである。卽ち「誰でも容易に理解出來ることであらうが、富が增大すれば、個人の作り得る快樂は比例的に發達することが出來なくなる。むしろ最大多數のものに努力せしめることゝなり幸福を失はしめることになる。卽ち所有權の平等は最大幸福の喪失に都合よき條件となるとした。

ベンザムが彼の所謂幸福の計算に對して此の結論を向けたことが、此の功利主義道德の精神を端的に示したものと云ふ事が出來るであらう。何となれば單に大體の上だけであつても財產を平等に配分する事は强制的整理によつてのみ達せられる所である。此の强制的整理を遂行すれば個人の自由と安全を危險にするものと云はねばならぬ。出來るだけ制限せられざる個人の自由を基

とする幸福の最大多數化はかくして失敗するとした。

此の制限せられざる個人の自由と云ふものは倫理上の最高原理であり、同時に法律の最高原理である。此の自由なるものは決して國家的强制によつて制限されるものでもなく、强力な權力によつても强制出來るものではない。むしろ道德とか習慣によつて最もよく制限されるものと言ふべきである。此れを覺醒せしめるのは公けの法律規定の任務ではなく却つて社會の成員が自發的に協同する事によつて、社會自からが行ふべき任務である。國家は現實上の或は虛構の契約によつて、總ての個人の人格的自由を擁護せんために建設された社會の組織であるとした。

さうすると此處に一つ問題が起つて來る。卽ち個人の人格の自立と云ふことが深く一般人の意識の上に透徹した英國の倫理は、各人の關係して居る社會の改造と云ふことになると邪魔になる。必要と窮迫とが同情を喚起すると云ふ如き場合には、此の不幸を豫防する事は、個人の同情を剌戟し、自覺された個人の愛の行爲に委さなければならなくなつて來る。

さうすると此の功利主義は、總ての人々に對する最大幸福と云ふ要求と、今一つの要求卽ち總ての個人に對する最大の自由と云ふ要求との間に矛盾を起し、此の矛盾を救濟することが出來なくなつて來た。

財產と自由とを有する少數者は、其財と自由によつて樂んで居るのであるが他方に大多數のものは、何等の財產を持たぬために、從つて何等の自由もなきため、然らざれば唯非常に制限された使用を爲し得るのみであるから、大多數の人々は幸福には與らないと云ふ結果となつた。

ベンザム自身は勿論、此の結論を他の原理に依つて避けんと試みた。此の事は彼の觀察した事項の中で大きな働を持つて來るに到つた。卽ちよく理解された利益と云ふ原理によつて右の結論を脫れようとしたのであつた。然しながら勞働者と工場主とが相互に依存して居るものなることを認めるならば、此の兩者とも最もよき立場に立つのであり、其事業自身も最もよく榮えるものであるであらうとした。

此處に彼は倫理的見地と經濟的見地を混同せしめた。吾々は誰れでも不可避の關係に陷つた時には何とかして脫れんものと焦るであらう。

然しながら英國の最後の大哲學者ハーバート・スペンサーも此れと同樣な動機から其說を立てたのであるが、遂に功利的道德が內面的に分離して仕舞つたのを見ることが出來るのである。

彼の包括的な哲學組織の中で、彼は有名な天地創造の假設を借りて來た範疇によつたのであつた。そして此れに從つて普遍主義を發展せしめ材料の分析、綜合を行ひ繼續的研究を行つた。そ

して變化を伴ふ事件と組織されて居ない自然の對象に對して彙類と分析を始めたとし、遂に研究が進んで組織的な構成體から超組織的な構成物へ進んだとして居る。此の超組織的構成物が社會であるとした。そして社會は一定の機關と機能を備へて居る現實の有機體であるとした。然し社會が統一的感覺機關を持つて居らぬと云ふ點に於て動物的有機體とは異るとした。然し此の缺點は社會の各種機關の協力に依つて補はれるものであるから、吾々は此の超個人的有機體なるものはそれ相當の價値を有するものなることは、此の有機體の一部を爲す個人の陶冶が價値あると同樣に、或る價値を有することを期待することが出來るであらう。

然し彼は此處では類推を拒んで居る。唯制限せられた個人の自由、卽ち同樣な他の個人の自由によつて制限せられた個人の自由は此の樣な要求に反對するとした。スペンサーの立てた進化の法則が反對に個人の自由を變化するに到つた。そして此の法則は進化すると同樣に分化を伴ふと云ふ事を敎へるのである。

かくして生理的有機體は一般に發達する中に漸次個々の機關に分化し、遂に同樣な細胞から總てのものが出來る樣になる。それと同樣に社會は根本的な統一ある團體となつた。漸次分化することに依つて國家の力は社會の方に移つて行くのである。然も分化は益々速く行はれて行つて、

遂には最後のものとして獨立の統一體としての個々の個人が殘るのであるとした。

此の樣になつて來ると有機的發展以上に又超有機的發達が起つて來る。其處には何等著しき有機體はないのであるから此の超有機體は或る機關を作ることを目的とするに到る。其機關なるものは超有機體を組織する細胞から出來て來る。スペンサーは國家をも此の種のものだとしたのであつた。そして將來國家なるものはそれが個人の目的に役立つ限りに於て特權を有す可きものであるとしたのであつた。然しながら國家の發達して來た初期のものについて見るに、個人は國家から統御されるものであり、此の個人は國家の絕對的奴隷であつたので、此の發展の究局は反對に國家とか法規が專ら個人の自由を保護する手段となつたのである。

彼の所說に從へば、各個人は自己の行爲、自己の財產、自己の子供の敎育に就ては絕對的な主人公である。それを國家の權力によつて强制し干涉せんとするが如きは無暴な壓制であるとした。彼は人格の自由が得た所の決定的價値なるものを更に次の樣に述べて居る。卽ちオウギュスト・コントや其他の先輩の述べた樣に知的發達を原則としないのであり、個人的自由を享樂することの進步の研究は進化發達の主なる研究と區別することが規範的な原則であると云ふことに贊成し個人的自由の享樂の進步が社會を發達させるものであるとした。此の自由の强制と云ふことの推

移變遷を見渡せば此處に二つの社會發達の形式があるとした。卽ち軍國的形式と產業的形式の二つの形式のあることを示し得とした。彼の論に從へば軍國的形式は必ず專制主義から導き出されるものであるとした。卽ち戰場にて指揮者が責任をもつて兵卒を從へ率ふることが其儘自由市民の上に遷されたのであり、軍隊を指揮する指揮者の權力が一般政治の上に移されたのであるとした。社會の產業的形態は此れに反するものであつて丁度非軍國主義的であるとした。然して此の狀態が一般的となつたならば始めて永久平和を目的とすることが出來るであらうと云つて居る。

此の論は一つの抽象の上に立つて居るものなることは明である。卽ち現實の歷史から一々のものを拔いて來て組織されたものを根柢として居ることは餘りにも明である。此の現象の何れもが今日の政治社會に對してはあてはまらぬものなることは餘りにも明である。一例を取つて云ふならばスペンサーの頭の中には軍國主義と云へば勇敢な兵士の觀念の浮んで居るのを見ることが出來るであらう。兵士は戰時でも平時でも命令者に對しては一つの道具である、此の人を道具視して國防の事に當るのではなくして今一つ異つた形式のものがある。卽ち國民全體が防禦力を有する場合には總合的防禦力が出來る。此の總合的防禦力ある國民が軍隊を作り、國家が總動員さるゝ場合の事についてはスペンサーは軍國主義的形態とも產業的形態とも云つて居ない。全く彼の

社會學はそれに觸れて居ないのである。

彼一流の觀察法が向けられた範圍は主として英國の歷史に限られて居る樣に思はれる。かくして產業の黃金時代に關する將來の豫想をすれば、卽ち產業上の黃金時代なるものは平時に於てのみ榮えるものであるから、人間の不變の特徵について謂ひ得るのみならず彼自身の豫想から出て來る推論まで棄てるのであるから、彼の豫想には戰爭とか軍隊とか云ふものについては何も觸れる必要はないではないか？何となれば其黃金時代には競爭が激しくなつて生活範圍が狹められて殆んどなくなると云ふことが想定せられるのである。

戰爭なれば攻擊にも防禦にも產業上出來て來た形を其儘受け取つて用ふることが出來るのである。然し產業上に就て言へば、其性質上必然的に國民的競爭が起るのであり、此の國民的競爭から出て來る競爭は實に猛烈なものとなるであらうことは明である。戰爭が英國の側から起されたと云ふことが殆んど否定することの出來ぬ事實であるとせばそれは大部分商業戰爭に端を發して居ることを見ることが出來るであらう。

實に英國は常に此の商業上の競爭に破れる樣な氣配が見える時にはあらゆる手段をもつて對抗することを國民的傳統として居るのである。支那長江沿岸に於て商權を失ひかけるに及んでは無

知の支那人を煽動して排日貨を行はしめ、更に印度に於て商權が沒落しかける時には輸入制限をもつて日本に對抗する事實をもつて知るべきであつて、スペンサーの所論も要するに英國一國をもつて其觀察の對象として居るものなることを知ることが出來るであらう。

然しながら此の産業時代はかくの如き曇なき平和であるであらうか、かう考へて來ると否と云はざるを得ぬ。産業の黄金時代が出現したならば、各人は其狀態に滿足し、將來の利益上の戰爭を考へない樣になるであらうか。又將來の理想と言ふものを考ふるに當つて如何なることを考へるであらうか？工場精神の繼續的發達の結果自から變化した從來の人間が持つて居た特徴を悉く取り去ることが出來るであらうか。

産業はそれは人間の各種の要求を滿足させる點に於て無限の意味を持つて居る。即ち事物の性質によつては、直接に産業活動に從つてのみ物質的要求を滿足せしめるのであり間接には最も高い精神的要求を滿足させるものである。實に藝術と科學が補助手段となつて、或る外的な物質的な勞働を必要とする限り、産業は物質的要求と精神的要求を充すものであると云ふことが謂へるであらう。

然しながら滿足は主として個人の人格的能力の上に出て來るものであるから、かくして得られ

た滿足なるものは滿足の産業化と云ふことによつて明にせられるであらう。即ちかゝる滿足と謂ふものは自由な個人的活動を出來るだけ多く勞働に參畫せしめて得られるのである。さうすれば茲に彼の言ふ勞働を出來る限り自立化すべしと云ふ原理を立てるのでなくて、事實はこれを破ることになる。かくして彼の主張する産業時代の理想なるものは、單に身體的要求を出來るだけ完全に滿足させるのみであつて其他の要求を滿足せしめるものでないと云ふ事が分るのみである。

此の樣な社會に關する理想が功利主義倫理から出て來る一面のものたることを示すのである。若し有益と言ふ事が道德の原則であるとするならば、出來るだけ多く有益な生産物を生産するのが完全なる社會の狀態であると言ふことが出來るであらう。此れがためには外的生活の要求に對し包括的な自然的な工業化した耕作が起るのである。

もし倫理的要求なるものが個人の人格的行爲、並に其所得及び其所有財産の使用に於て出來るだけ制限のない自由を樂しむことであるとすれば、明に社會を産業化する樣に導くのである。何となれば社會は同時に個人の自立的原則と結合し、ベンザム的な最大多數の最大幸福と云ふ原則を破壞し、最大幸福者は少數となり最大多數者は最少の幸福しか受け取れないことゝなる。即ち他人の要求を滿足さすため自己の要求を出來るだけ制限することによつて、最大多數のものに最

大量の幸福が與へられなくなつて仕舞つて、殆んどとめ度のない最多數者には最少の幸福しか與へることが出來なくなつて仕舞つた。

此れはヴントの功利主義に對する推論であるが、勿論此の推論はスペンサーのする所ではなかつた。

彼は此の推論から脱れて仕舞はうと努力した。それで彼が爲した心理的結論に於てはダーウヰンの定めた範圍以上に出て仕舞つて居るのであるが、然し彼はダーウヰンの創稱した生物學的進化論を取つて來て脱出を企てたのであつた。其議論はスペンサーが其說の全組織の基礎としたかの一般宇宙進化說を主成分として立てゝ居るのを見て直ちに知ることが出來るであらう。然しながら此の關係は決して世間に明にされて居ないものである。

此の時代に英國や佛蘭西の倫理を動かして居た前提については明に問題が存するのである。其問題と云ふのは人間は常にその自然的な利他心に移つて仕舞ふと云ふことを如何にして說明するかと云ふ問題である。佛蘭西の學者は此れを利己心の擴張だとして說明した。スペンサーは生物學的進化論を替りて來て、遺傳と環境順應の原理を補助として持つて來た。彼に從へば遺傳は觀念及び感情の上に働くとし、吾々がそれによつて經驗を得て生活するのみでなく、吾々の遙か後

代の子孫にまで傳はるものだと說いて居るのである。

經驗心理學は勿論素質の遺傳に付いてのみ認めるのであつて、遠く表象が遺傳することは認めて居ないのである。然しながら全然盲目であり聾に生れた人間は光とか音を全く經驗することの出來ないものだと云ふことを觀察しなかつた。然し尙力强く此の進化論は順應の原理をもつて働きかけて居る。彼に從へば動物は旣に此の事實を示して居るとして居るのである。然し人間は次の諸點につき此の順應を成立せしめて居ると云ふのである。卽ち個人は社會に順應し、社會は個人に順應すると云ふ點及び順應の過程に於て起る適者生存と云ふ事が利己的衝動を壓服して仕舞ふ。そして利他的衝動が唯一のものとして殘るまで壓服されるまで順應と適者生存の働が加はるのであるとした。これが政治的進化論とも關係するのであるが、軍國主義的過程はかくの如き順應を阻害するものであるとした。彼等は其主義が始めて世を支配する樣にするためにはそれ自身に永久平和の保證を爲し得る產業主義を取つて來なければならぬとしたのであつた。

各人は自己の幸福は彼の隣人に關係して居ると云ふ事を知つて居るために、此の平和が保護されて始めて幸福となるものである。此の平和狀態があるによつて、利己主義も利他主義も同樣に重ぜらるのであつて、恰も狼も羊も喜んでオアシスの水を飲むと云ふ一般的幸福の狀態を見るを

得るのである。勞働者も工場主も互に他に負ふて居るものなることを知る時、恰も此のオアシスを見出したのであり、此のオアシスについてのみ富める工場主も貧乏な勞働者も互に最良のものを欲し得るのであるとしたのであつた。此處に吾々はよく知られて居るトーマスモーアの理想なるものを想ひ出すのである。此の樣な一種の空想について見ても戰爭が全く排除せられて居ない狀態を見るのである。

此の戰爭の可能性は國外に於て、恐らくは野蠻民族によつて補充せられた兵士により起されるであらう。其兵士は今日迄一般に知られて居る如く個々の現代の文明國民により指導せられて居るのであり又文明國民によつてのみ教育せられるのであるが、昔の空想では內面的歡喜は財產の平等なることに依つてのみ保證されて居たのである。然し財產及び所得に於て個人の出來るだけ無制限な自由を欲して居る新理想は共產主義を許さないのである。

又スペンサーの理想は人間の性質の根本的變化と云ふものを進化の秘密に富むものとして考へた。卽ち人間の性質は殆どそれと反對に或る變化を將來するものだと云ふのである。かくて此の理想は明に空想的な夢であることが分つた。何となれば彼が徹底的な個人主義の持つ倫理上の缺陷を究明するために努力せず、これを明にせんとする哲學を棄てやうと試みたのであるから彼の

理想を一種の夢と見るは至當であらう。

スペンサーの理論の組織は英國哲學に於ける最後の創作であると云ふことが出來るであらう。主として彼の唯物的な心理學とか認識論はかくの如き性質を有するものである。故に彼の利己的功利道德は英國それ自身に於ても種々の反對に出會つたのであつた。其反對論は大部分古典哲學、殊にロツクとかヒユウム等にまで逆戻りした人々によつて行はれたのであつた。

彼の後繼者は米國に於て其聲の發せられたプラグマチズムと云ふものに見出されたのである。プラグマチズムは英國で洗禮を受けたかの如き人道主義である。此の主義は一般に知られて居る哲學的發展の過程にある特徵ある諸種の說明と共に一種の特徵のある印象を與へるものである。卽ち折衷主義的特徵を負ふて居る。プラグマチズムは從來別々な方向に向つて居たものを結合して舊思想に新衣裳を纏はしめたに過ぎないものである。此のプラグマチズムは進化論の上に建てられた社會學的組織の各々のものを避けた。改良主義は同時に此の原理に對して道德的要求の意味を與へ、其意義に從つて各人をして此の改良に參加せしめた。此の主義は遂に次の如き神秘的特徵を帶ぶるに到つた。卽ち此の主義では宗教は各個人の有する事實なりとして其地位を殘したものである。何となれば宗教は、宗教的人格とか、再生とか大歡喜とか云ふ例が示す如く主觀的

體驗である。

此のプラグマチズムの創設者たるウイリアム・ヂエームスの發表によれば、宗教なるものは各個人の自由選擇物であり一つの自由選擇の出來るものであるとしたのであつた。此の宗教の選擇に於て知と信の舊き分裂は英國の古い名稱論者の思想からスペンサー時代まで英國思想の著しき特徴を殘して居るのであるが其分裂は明である。此れに對してプラグマチズムは宗教に刺戟された人格の主觀的經驗の上に唯暗示を附加したのみである。從つて此の範圍に於て經驗的なものとしてそれを尊敬し、從來の經驗哲學の如くに超經驗的なものとして尊敬しないのである。

プラグマチズムは宗教的歡喜の狀態の中には到る所に見出される古き神秘の道を研究せんと努力したのであつた。かの古き神秘の道の中にある個々の人格の內面的說明を明にせんとして近代的な方法を替りて來たのであつた。

吾々が此の英國思想の綜合的發達を回顧するに此の英國思想なるものは歐洲思想史に對して非常に大きな意味を持つて居るのである。此の英國思想は宗教問題を除外して居るので、始めて世界の新時代に相應した、感覺的現實の上に成し遂げられた世界觀を示して居るのである。此れによつて英國民は思想の獨立を確實にした。それがため英國哲學は將來の哲學の準備的のものとな

つた。然し此の第一の制限は第二の制限と相關係して居る。英國哲學は認識の問題、道德の問題を利益と云ふ一方向から解決せんとした。此れが第二の制限へ導くのである。卽ち經驗界の利益を專ら說くことは認識論を經驗哲學として仕舞ふことになるのである。そして經驗哲學は倫理問題を道德生活の經驗的目的、及び動機の研究に沒頭せしめるから、此の經驗哲學が、英國流の倫理は幸福道德を說くものだとの印象を與へたのであつた。

此の哲學的任務の制限は、それは宗教問題の除去と云ふ事と關係して居るのである。然も哲學の綜合的發達に注意しては居たが、孤立せる抽象が到る所で效果を上げるので自然孤立せる抽象の利益を追ふて行くようになつた。

英國の經驗哲學は外的な認識の材料、卽ち感覺的材料を總てのものから抽象した。然も吾々の意識の中に結びつけられて居ないものからもかゝる材料を抽象して槪念を作つたので、此の方面から認識問題を明にすることを得たのである。そして類推に依つて經驗的認識論の特別の分離なりと考へられるものが道德問題と關係して居るものだとされて居る。

然し此の特徴は比較的なものであり、其特徴が據つて立つて居る處に制限がある限り、其自から制限されて居るものである。宗教問題の分離が信仰から知識を分離した如くに、認識論及び道

德に於ける純粋な經驗主義と云ふものを經驗的偶然とは全然相反する規範的可能と云ふものと區別したのであつた。元來知識と信仰とが一つになつて居たので、統一的な世界觀の成立とか、哲學にて決定さるべき問題の解決を不可能ならしめたのであつた。

然しながら此の規範的可能性なるものは始終妥當性の要求を充たして行かねばならぬのであるから、それ自體に於て經驗的確實性を持つて居るのではない。此の見地に立つて合理的に研究を進めて行くことはダビド●ヒユウムによつて行はれ明にせられたのである。

故に彼は當時にあつては認識問題を取り扱ふ唯一の立派な心理學者であつた。卽ち論理的規範から認識それ自身は出て來るのであるが、此の論理的規範から抽象して觀念を作つたのであつた。かくして作り上げられた彼の道德哲學は同情的感情論となつた。當時にあつては此の同情的感情論なるものは實に立派な現象の模範的な心理的分析であると云ふ事が出來る。しかし現象なるものは道德的衝動の規範的性質を明にする以上に何事も考へるものではない。

此の樣な制限はあるにしてもヒユウムの道德論は、彼の作つた認識に關する敎よりも尙一層廣く且つ强く英國哲學や其流を汲むものに影響する所が多かつた。彼の影響に邪魔したものに二つの要素がある。その一つは宗敎を除外せることに反抗するものと、此の反抗的態度に結合せる主

知主義の立場に立つものであつた。此の主知主義の說明は、總ての精神生活上の事件に哲學的反省を加へて其事件以上に高めんとしたものである。

第二のものはかゝる社會を構成せる個人を唯現實に適應せしめんとする見地に立つて共同生活現象の觀察に英國本來の個人主義をもつてしたのであつた。勿論ヒユウムは此の個人主義に引きつけられたのではない。然しながらヒユウムもアダムスミスの多くの學徒も、スミスの道德的感情論を主張した。そして此から導き出した聯想の原理を此の同情的感情の上に適用して此の結果を無害ならしめる樣に工夫した。然しながら此の態度を忌避して內省的心理學は此の聯想的態度に對抗した。此の樣にしてスコツトランド派は本來の英國の道德哲學外に立つに到つたのであつた。卽ちフランシス●ベーコンからハーバート●スペンサーに到る總ての段階に存する英國哲學が取扱つて居る幸福道德が卽ちそれである。卽ち功利主義がこれである。

ジョン●スチユアルト●ミルが功利主義を外にして英國に何等の道德的原理なしと云ふならば英國哲學、英國倫理について謂はれる限り正當であるとして認めなければならぬ。然しながら此の英國の功利主義は決して何處でも又何時でも一定して居るかと云ふにさうではないのである。卽ち時と處に關係して同一ではないのである。むしろ功利主義は次の如く連續的に發達して居ると

見るがよい。即ち其副次的な影響を除くならば功利主義の二つの要素、內省的心理學と個人主義の度合によつて定まるものと云ふべきである。偉大なる淸教徒としての革命前の英國は尙此の發達の圈外にあつた。

ベーコンの如き人であつてこそ理論的考察は出來たのであつたが、其他の人々は道德に對して宗教的規準を與へたのみである。かくして此の古代道德なるものは實に幸福道德の門戶となつたのであつた。然しながら其處には利己的動機とか利他的動機と呼ばれるものは存在しなかつたのである。從つて又此の二つの動機が對立して居る時には全體の幸福、(利他的動機) に利己的動機による個人的幸福を讓るべきものとする樣なことも考へて居なかつた。

英國に於てはかの淸教徒前の道德は後の利他的功利主義である。其利他的なりや否やに關しては全體的直觀に依つて定むべきものとして居るのである。此の直觀は決定の際働くものであると云ふ以上に何等の責任を與へるものではないとするのである。トーマス・ホツブス以來初めて此の素朴的な利他主義の代りに利己的功利主義が起つたのであつた。然も彼は個人の意思なるものは國家の意思に對して無條件に從ふべきものと說いたのであつた。彼は國家を目して個人の總和であるとした。從つて全體の幸福は個人全體、少くとも大多數の個人の幸福があつて始めて成立

するものとした。此の立場はジョン・ロツクに依つて確認せられたのである。そして彼は立派な近代的な英國倫理學者となつたのである。然し此の樣な說に對して幸福道德は夫れ自から少しづゝ種々の方面に變化を遂げて居るのである。即ち其中に個人主義が多いか少ないかによつて變つて居るのである。もしこれを主要原理であるとするならば、功利的利他主義の此の發達が最後の段階を爲すものであると云つてよい。此のことはハーバート・スペンサーの倫理の中に明に現はれて居る通りである。

此の點で英國流の實證主義、即ちスペンサーによる實證主義と、其先輩たる佛蘭西派の實證主義、オーギユスト・コントによる實證主義が分れて來る。此の樣に分れることは、遠くかの宗教と科學の分離に其源泉を持つものであることは明である。此の源泉は實に英國思想が個有して居るものなることは言ふまでもないことである。コントはスペンサーの云へる如く宗教の對象を簡單に不可知のものに非ずとし、それは總ての認識對象物中の最高なるものとしての人間性であるとし、人間性認識を至高のものとした。それでコントは宗教に熱心な尊敬を拂つたのであつた。此の人間性なるものが反射して個々の人格者の上に反射するとしたのであるからコントの倫理は宗教道德と云ふ特殊な形を取るに到つた。

スペンサーに謂はしめるとこれとは違つて、人格とは結局一つの虚構的なものであるとし、ホッブスの言に從つて國家は一つの模造された肉體であるとした。

只個人は現實に存在して居て個人間に於ては各人は同胞である。かくしてフランスの實證主義はコント自からが述べた如く利他主義に向ひ、英國の實證主義は功利的利己主義に向つて行つた前者は隣人に對して個人の犠牲を要求した。そして、其献身的な犠牲に於て其人の有する人間性の表象が光るのであるとし、後者卽ち英國の實證主義は個人の自由を保護されんことを要求し、此の自由制度に反對したのであつた。そして此の自由を强制することは社會の自由を脅かすものだと主張した。オーギュスト・コムトの道德原理は「利他に生きよ」と云ふのであり、ハーバート・スペンサーの格言は「人は國家に對立するものである」と云ふのである。スペンサーは此の語を自から最後の著述の名稱としたのであつた。

第二節　英國精神と日本精神の對稱

以上を通觀して見ると英國精神には何處までも最大多數の最大幸福と云ふ考へが拔け切つて居らぬ。そして佛國流の立場とは異なり、自己を犠牲にして隣人に献げる等と云ふことは思もよら

ぬことであり、國家は個人の自由を保護すべき任務を有し、最大多數の最大幸福を企つべきを本務とすると主張する。英國人の主張からすると何處までも自分と云ふものは犠牲にはせぬと云ふのであり、英國人が其日用使用する言葉に「自分」を現はすアイ「I」なる言葉にキヤピタル、レターを使用することを忘れぬ其根性は明に現はれて居る。

其主張する自由は個人的なものであり、國家とか團體とか謂ふものゝ自由ではない。個人の自由を主張し個人の解放を叫ぶが、それは人類一般について言ふのではない。英國人の個人の自由を主張し、英國人の最大多數の最大幸福を主張するのであつて、其他の何物についてもこれを認めると云ふのではない。

其響は其國歌が最も正しく傳へて居ると云つてよい。かの戰時に兵隊が、戰場に出る時に歌はれる歌は平時に於ても國民の心中に存するものである。平時には非常時に歌ふ時よりももつと其國民個人を靜かに支配する精神的本能が明に現はれて來る。其國民を支配する諸感情を最も忠實に表現するものである。

イギリスの國歌と我が國の國歌とを比べて見よ。イギリスの國歌は戰爭の時とか、國家に危難の迫れる時に聞かれるのであるが、英國精神を如實にその歌の響が現はして居る。其旋律は無感

情である。それは儀式的な國王への恭順を示す時に義務的に同伴するものに過ぎぬとの感じを抱かしめる。そしていざ鎌倉と言ふ時には此の忠義を現はす無感情な國王讃美歌は沈默して仕舞ふ。そして眞實の感激は此の歌を歌はない所に輝いて居る。イギリス人が其心の全感情を注ぎ出す實際的な國民歌は「ルール・ブリタニア」の歌である。此の歌はアルビオンがその制海權の意義の非常に重大なことを意識した時に溯らなければならぬ。

そして今日も尙此の制海權が攻擊される場合には遠くから又近くから海に陸に此の歌を聞き得るのである。勢力を得ることゝそして支配權を得ること、それはフランス人が名譽を熱望するよりも尙熱望することの甚しいものである。此の二つの慾を滿たすための國民への呼びかけの言葉が最大多數の最大幸福と云ふのである。制海權を得ることは今日の如く世界的交通時代には世界を制することを意味する。ルールブリタニアの歌はマルセーユの歌の喧囂なるに比して、深くそして絕えない感情を藏して居る。此の感情は豫期しない嵐が靜かな雲を破る樣に、イギリス人が本來有する穩かな生活態度を破るのであり、其處に愈々強く響くのである。

かの國王に對する忠順を示す英國々歌がルールブリタニアに變ることの出來ないと云ふことは何を示すのであるか。彼等は此の支配を得ることゝ權力を得ることが其本來の面目であり要求で

あることを明に示して居るではないか。イギリス人は社交に於て又は其の日常業務に於て觀らるゝ限り、おつとりした極めて沈默的な性質を持つて居るのであるが、其眞底には「ルールブリタニア」の古い軍歌が叫ばれて居るのを見る。そして權力と支配とを熱望するものがあることを知るのである。然もイギリスの小說は彼等の日常生活が示す如く、全く平和な市民生活を描寫して居る。然しこれは彼等には破らるべき雲なのである。フイールヂングからデイツケンスまでの一團の傑作には快活に人類の弱點以上に出て仕舞つたり、又時としては苦味で一杯な諷刺をやる所は爾余の國民には一寸眞似の出來ない所であり、此の種の滑稽は英國人のみが持つ特徵である。

而して此の國民の有する哲學が實際に思考に要求する所は日常生活上の要求と靜かに考へられた要求とを調和させようとする永續的な試に他ならぬことを知るのである。

此の哲學が理想となる時には、此の理想は終に永久平和に集中されることになる。然し此の永久平和と稱される奴は要するに非常に良い地位にある國民が今日までに既に享受して來た樂しい生活を永久に引き續けて行かうとするに他ならぬのである。

歐洲大戰後今日までに英國が主として國際聯盟に力を入れ不戰條約を締結し、或は軍備縮少の主動者になつて居るのは何であるかと言へば、今日迄英國が地球上に於て克ち得たる支配權と利

權とを永久に維持せんがための策動であり、平和條約とか不戰條約とか、聯盟の委員に依つて戰爭の危險を防止するとか云ふ美名は、前述の支配權と利權とを確保せんがために强いて持つて來た美名に他ならぬのである。此處にも思想と實際的要求とを調和せしめんとするかの英國民の持つ思想的傾向が如實に現はれて居るではないか。

然しながら彼等の有する財產が危險に陷れられると彼等は容易に作り上げた美名を投げ捨てる。彼等の有する思想の結論が平和であるにしても何であつても遠慮なくそれを投げ棄てる事に躊躇せぬ。又一方貧困な英國人と云はれて居るものであつても、其生活が改善せられ低下せしめられる事を要求さるゝ如き場合には、此の國民はその實際的要求の前に屈して仕舞つて、理論とか理想と云ふものを直ちに捨てゝ仕舞ふ。又英國人は貧富を問はず、其安寧と幸福の保證と考へて居る全國民の繁榮が脅かされると感ずる時には主義が何であつても、自國の傳統が何であつても、それには拘泥して居ない。全國民の繁榮を慾して主義を捨てゝ顧みぬ。例へば印度其他英領の殖民地について見るがよい。自主貿易を主張せる御本尊が日本商品の脅威を受けて自國品が賣れなくなれば直ちに保護貿易に轉身して高率關稅をもつて臨むのである。此の保護政策も又無益なりと判明するや勞働者の集會とか、國民の集會等に於て、常識でもつては考へる事の出來ぬ奮

激と憤怒の發作が起るのであつて彼等の有する利己的功利的態度を遺憾なく發揮するのである。

歐洲大戰を去ること十數年前獨逸が其國の軍艦建造の最初の小膽な試を爲せる時、ロバート・パーマストンが獨逸人に對して「土地を耕せ、然して雲の中を帆走し又は空中の城郭を建てる」ことを止めよと忠告し、更に又獨逸人は「公海又は唯沿海でも航行することを考へ付いてはならぬ。そは痴人の夢なり」として忠告せしことのある事を思ひ出して見るがよい。英國議會の議員は平氣で、平和の時でも、他國民に對する侮辱的壓迫をやつて除けて、避けるやうな事はせぬ。

彼等の平時口にせる平和思想と、其實際的行動の此の著しい對比はこれを如何に說明すればよいか？　卽ち日常生活に於ける英國人は大部分其國の歷史的產物の他何者でもないことは明に知られるではないか？　思想上の要求と實生活とを結合するに汲々たる其民族的特色はこれを明に見得るではないか。

ベーコンやシエークスピーア時代のウオーター・ラレーやフランツス・ドレークがイギリスの海上權把握のために最初の海賊船を太洋に乘り廻はした時代は今日の英國とは異つて居る樣に考へる。又其國民の行動について見ても、古代のイギリスの喜劇が、我等に示す像について考へて見ても、今日の英國人と大に趣を異にするものがあるのを見る。シエークスピーアが王樣劇に於て

描寫した過去の英國偉人等の戰は全く激情と反逆と力に充たされたものであることを見るのであつて、バーナードショウや其他の現代英人の創作が如何に力の弱いものであるかと云ふことを知ることが出來るであらう。

かくの如き關係を見れば、今日の我が大日本帝國が東洋の天地を制し、然も研究の結果と努力の成果による安直且つ優秀な商品を世界に出す現狀を目して、英人が常識を失ひ激情と妬みを抱くことは自づから理解することが出來るであらう。又我が國の所有する艦船に對して異常の注意を拂ひ現狀以上に否自國の好都合を犯さない範圍に止めしめんとする策動を爲すものなることは英國人の有する英國民族思想から云つて當然のことゝ云へよう。唯だ彼等が自己の實際的必要の上に冠せたる理論的美名は正直なる我が國民を如何に數多く欺いて來たことであらうか。

然しながら今日の英國は最早や段々發展して行く國ではない。發展し切つた國である。英國はエリサベス女王やクロムウエルの時代から其制海權を段々に擴張して行つた。そして海上に於ては終に全世界の支配權を得た。英國は順次にイスパニア、フランス、オランダを其殖民地から驅逐して行つた。そして其所有權を放棄せしめた。總ての海峽其他重要なる寄港地を其有とするに到つた。

そして殆んど世界の全貿易を支配するに到つた。

諸國の殖民計畫は英國の支配下にあるのであり、英國は實際支配する國土の上の權利を主張するのみでなく、其支配權の及ばない國土に對しても其將來に利權の獲得か有望である場合には自國の權利を强く主張するのである。ロード・ローズベリーが嘗て英國々會で「我々が今要求するものだけでなく將來要求せねばならぬものについても考へよ」と言つた。此の語は明に世界統治に對する要求を大膽に述べたものであつて、此の要求を明にするより以上に明に世界支配權の要求を現はす言葉が他にあるであらうか？　恐らく此の言葉は無主財產の占有權について述べたのであらう。然しこれは英國に限られたものである。

而して此の原理は特權を與へられた國家、彼等に云はしむれば選ばれた國家と云ふであらうが彼等に有利に見える時には無主ならざる他の國土と云ふことは充分に考へられる所である。然も前世紀に於て此の種の明な例を三つ見た。初にコペンハーゲンを砲擊し、次いでデンマルク艦隊を奪取し、次いでボーア戰爭を敢てし、更に阿片戰爭によつて香港を奪取した。

此の英國人の考ふる世界支配の思想の背後に二つの條件のあるのを見るであらう。そは此の思想に力を與へ實際的基礎を附與するばかりでなく、英國人の精神に此の力は不滅なものに相違な

いと云ふ確信を與へるものである。

此の條件の第一は英國の島國たるの地位であり、第二は其國の產業により得た富と、制海權及び殖民地領有に依つて得たる富にある。フランスの軍隊が英國に上陸したのは忘れる程の昔であつた。數世紀以來英國が堅めに堅めた艦隊防備は堅固なものとなり、從來の戰爭手段では外國軍隊が英國に上陸することを不可能なことにして仕舞つた。

第二は更に重要である。歐洲大戰前は其全世界に亘る經濟交通によつて英國は最も富んだ國となり世界の銀行家となつて仕舞つた。英國は世界市場、經濟交通、電信事務を支配し終に自國のみならず諸外國の新聞の發行まで支配するに到つた。此の外に對する安全と豐な富の所有が不知不識の間にいくらか今日の英國人の性質を形作つた。此の際歷史を背景として、既に淸敎徒が宗敎から政治の上に移して行つた「神の選民」なる概念が多少働いたのであつた。これが終に英國をして飽滿倦くなき國として仕舞つた。

英國の政治家が國家の所有權を擴張し國家の力を伸張する事を決して嫌はずに努力して來た。英國の民衆はそを喜ばしき事、かゝる發展は目出度きことゝしたのであつたとしたのであるが、英國民の幸福は實際にかゝる事に據つて影響せられなかつた。英國民は自分等の住む島にかくれ

て世界に於て自分等の有するもので充分だと感じて居る。これは勿論財產のある英國民だけのものであらう。然しながら英國の社會にも無產者や不滿足な氣持で居るものが居り此等が働き出した。彼等は財產の分配に於て貧乏鬪を引いたと考へて居たのであらう。歐洲大戰後英國には急激に勞働黨が勢を得たのを見ても分るであらう。然し英國人の性格からする自己敎育について云ふならば、是等の要素は今までは餘り大きな影響を及さなかつたのであつた。何となれば英國人は決して理論にだけ捉はれて居る國民ではない。其國の實際が擧國一致を必要とする時には理論的に相反する立場にあるマクドナルドとボールドウキンが容易く手を握る。理論にだけ忠實に捉はれて妄動するものゝ多いのは我が國に比較的に多いのである。

此の樣な立場から見て行くと古い英國と新しい英國との區別がはつきりつくであらう。古い英國は堅忍不拔の意志から强い努力を拂つて自分の實行を通して自分の精力を意識して居た國であつた。然も彼等は幾多の望を抱いて居た。尙此の望を抱いて居る人は今日の英國にも少くはない。彼等は何よりも富を望んだ。それに次いで社會に於ける名譽を望んだ。其次に勢力を望んだのであつた。そして此等の財については私かにベンザム流の價値尺度を作つたに相違ないのである。

彼等の感情を動かすのには餘程大きな運命の衝動がふりかゝつて來るのでなければ出來ない。

豫期しない大打擊が落ちかゝつて來るのでなければ彼等は動かない。此の精神狀態は今日の典型的英國人を作り上げた。勿論例外は何處にでもある。けれども例外は多數の中に消えるのである。

此の英國人なるものは他の如何なる國民とも異なり或る度まで習慣の奴隷となつて居る。彼等の爲す日常些末な行も、彼等が粘り强く頑强に固執した因襲的な習慣に支配されて居る事は充分、に認められて居る所である。卽ち英國人が其享受する何物によつても、此の慣習を擾されることなく、此の慣習を亂すことが極めて少くても直ちに怒りに移ると云ふことは、彼等が飽滿せる存在であり、飽滿狀態が此の樣な態度を持つて來たのだと云つても誤りではない。大部分の英國人には英國上院の大法官の塡毛囊は可笑なものと見えるであらう。これを英國內で吾々が廢めさそうとしても、此の光景を見る英國人には、それは慣例違反で惡むべき事と見えるであらう。其處で英國人にはこれを廢止する適當な瞬間が見出されなかつた。

英國人は是等の慣例違背を其精神を擾すことの一種であると感ずる。又フランス人は其談話をする際に極めて生き〳〵とした活潑な表情を用ひ、感情の表出に身振を伴はせるのであるが、英國人は此れを目して不快なものとする。故に英國人は議論したとて相手が何等の結果をも齎らさないであらうと感ずるならばさつさと其議論を避けるのである。其處で英國人は人中では何も話

をしないか、或は默つて居て惡い樣な時はどうでも良い事や解り切つた事について話をして居る。

此の樣な因襲的社交形式は、彼等に取つては、衝突を保護するものであり、うるさい煩ひから個人を脫れしめ保護するものなのであつた。

役目のために仕方なしに意見を發表する場合でなければ、英國人からは宗教問題とか政治問題については意見を聞くことは出來ぬ。故に個人の身體、生命財產を國家は保護して居るものであるから、此の國家の義務とか責任に關しないことは、國家に關する意見發表さへも拒絕するのである。

他人も自己と同樣に國家に對しては責任を持つて居るのであり、自己と同樣な自由を持つて居るのであるが、此の自由が衝突する樣なことがないならば、個人は無制限な自由を有するものだとし、英國人は第一に此の原則を認めたのであつた。英國人の如く此の原則が國民の頭に深く喰ひ入つて居る國民はない。此れには勿論偶然なことであらうが、とにかく個人的獨立には習慣が强く結び付いて居るのであつて、此の本來尊敬すべき獨立自尊を求むる慾望は日常生活から國の憲法にまではいつて居る。英國人は傭兵になつても兵營が氣に入らず自分の家に住むことを好んで居る。人身保護條令は彼等の古い守護神である。英國の古い政黨でも新らしい政黨でも益々富

豪政治的な組織になつて行つて居るのであつて、其代議士はどこまで國民の代表であるか分らぬが、然し自治とか、國會と云ふ名稱が自から治めると云ふ自覺を彼等にもたらし、彼等の心を喜ばして居るのである。代議士は選擧せられた瞬間に選擧人に支配せられないで自由に國家について論議し得ると云ふ自覺を生ぜしめる。それで彼等は今日のまゝの政治でもつて、自分の國の主人であると云ふ幻想を畫き上げ滿足して居る。

英國人が保守的であると云ふのはまだ此の他に理由のあることである。即ちそは英國の社會制度である。此の英國の社會制度なるものは人格の獨立を認め、その個人的自由に何等の制限をも認めないのであり、限界も定めないのである。此の絶對自由を持つ個人がよく社會に順應すると云ふ良い性質を培つて來たことであり、自己が重要なものであると云ふ感情を與へて居る社會制度のあることである。即ちそは英國の有する「クラブ」制度である。此の「クラブ」なる名稱を我が國の人は休養的な氣輕な無邪氣な會と取り違へてはならぬ。英國人には「クラブ」は極めて眞面目な意味を有するものである。彼等は其名を名刺に刷り其の肩書として居る。有名なクラブに屬して居ると云ふことは、其英國人の信用を意味するのであり、クラブが其個人の信用を語るのである。若し社會的に有名な人が自分のクラブに屬して居るとすれば、此れが其のクラブ員に

大した貫錄を與へることになるのである。

古い貴族主義の大學たるオックスフォード、ケンブリッヂの兩大學も同樣である。是等の大學で學んだ人は一生是に屬するのである。彼等は每年の兩大學の競漕を非常に大きな誇をもつて見るのである。そして國民的な誇は是等の大學の學生の上に反映して居る。此の獨逸並に其流を汲む大學と全く異つて居る英國の大學には喜ばしい特色がない譯ではない。英國の大學では科學はそんなに勝れた地位を有して居ないのである。英國の大學者は大抵は社會から離れて研究に身を献げた人である。此等の人々は更に又新らしい大學の教授として働くのである。此の新大學と云ふのは獨逸の所謂大學ではない。專門學校卽ち技藝教授所である。

英國人は國家を構成し國家の代表として働く場合には昔も今も相變らず暴力的であり不信義であり狡猾である。けれども多くの英國人は個人としては尊敬すべき人間であり、信用の出來る人であり、吾々が心安くし、これに近づけば開放的であり丁寧であることは時々大きな英人の持つ矛盾なりとして示されて居るが、吾々から見れば其處に何等の矛盾のあるものに非ることを知るであらう。

英國人が親切を盡す外國人と云ふ奴は英國人に取つては或る程度の自國の保護國民である。卽

ち英國人は其外國人を自分の友人、自國人として取扱ふのであつて其他の何者でもない。自國の特權及び自己の特徴を知れる島國人たる英國人は外國人と交際するに當つて其境界をなくしたゞけの話である。英國人は外國人と交はるのはその外國人に就きて彼自身を見出し、彼の發展の緒を見出さんがためのものに他ならぬ。特に英國人が外國を旅行して居る時のことをよく觀察せねばならぬ。英國人以外の歐洲人は外國を旅行するに當り、外國の言語や習慣に出來るだけ順應しようと努めて居る。然るに英國人は外國を旅行して居るのに其言語とか習慣に對しては無頓着である。

彼等は何處に行つても自國の言語、習慣、風俗をどこへでも一緒に持つて行つた。そして英國人は本國で自國人にするだけの遠慮を其土地の外國人に對してしない。彼等は自分を旅行する國の主人と感じて居る樣だ。彼等は旅館の專制君主だ。これが他の歐洲人が旅行する場合に非常に恩惠を與へたのであつた。

休養娯樂については他の歐洲人は英國人に負ふ所が少なくない。然し此の休養や娯樂は他國人を考へて英國人が創造したのではない。英國人は自分自身のために創造したに過ぎない。彼等は自分の意志を遂行することは自分の天賦の權と考へた。數百年間海上權を制し陸上では有力な役

割を演じ、地球上最大の殖民權を自分のものと稱した。彼等は他の如何なる國よりも多くの資本力を有する國が、他の然らざる國に對して權力を持ち統治權を行ふべきものとし、此の自然的な要求權は自國にありとの意識を持つて居る。此の樣な意識は英國の如き國民に起らないものであらうか。英國人には此の意識が個人の心の上に溢れて居る。此の暴慢な自我感情は個人から國民の上に反映して居る。英國人は自分の用のない外國人を空氣の如く取扱つて居る。用がある時は物權の如く取扱つて居る。英國人は自分が大臣の椅子に坐ると外國に對する僞も僞でない樣に國民に信ぜしめ、詭計を用ひても又國民はこれを詭計としなくなる。平和の際の奇襲もそれが英國に利益であるならば英國人はそれを自國に許された權力であり、規則であると考へて居る。

かくの如き行爲を利己主義と云ふ語で片付けることは正當ではないけれども、かゝる國民的感情は或る意味に於て、佛國人の云つた「擴充された利己主義」と云ふことが出來るであらう。利己的動機が個人に於ては財產、家族、職業、地位、人格的評價、に對するに當つて種々な形式や色合を帶びるのであるが、此の國民的利己主義も各國民共に同一ではない。フランス人とイギリス人とは此の點に於て最もよく區別される。フランス人は自分を社會の中心點と感ずる。彼は自分について愉快な形像を有し、此の愉快な形像が他人を遇する際の愛嬌を高めるのである。此の

愉快な形像が彼から彼の周圍に反映するのである。フランス人は勳章を貰ふと寢衣の上へでもこれをかける。そして其心持を外に現はす。フランス人の名譽心は遠心的である。此の名譽心は彼の自我を中心として彼の家族に及び、彼の鄕里に及び遂に全國に及ぼすのである。

英國人はこれと全く相反する。英國の諺に「我が家は我が城廓なり」と。猶又有名な別な形の諺「我が國は吾人の世界なり」と。英國人は自分の家に隱れて居ると感じ、彼は自分の家に呼び入れない人なれば何人でも平氣で追ひ出すのである。

英國は大きな制海權を有する英國人の世界である。英國人は英國の有するものだと考へて居る權力と支配の幾部かを個人の上に移して居る。英國人の國民的感情は求心的である。遠心的な國民的感情と求心的な國民的感情と比べて何れがより多く利己主義的であるかと云ふことを述べるのは確に困難である。佛國人のやり方は空虛であり英國人のやり方は高慢である。第一のものは愛らしく第二のものは嫌である。

英國人は實によく其國民の性質を全體として哲學の上に現はして居る。功利主義は實にイギリスの哲學である。功利主義はその名のみでなく其實際的內容の本國が英國であると平氣で云へる。各哲學はその本國以外に模倣者があるのであるが英國の功利主義も又外國で模倣されて居る。欧

洲大陸の人々が英國の制度について感ずる驚異は功利主義の行き渡つて居る點である。歐洲大陸の人々がマンチエスター學派の學說が英國に行はれるのを知りそれに身を委ねると自分も自由な島國人の如く感ずるのである。それと同樣に英國の實利道德について學ぶ時には始めは、其學說は他國の學問の補充を爲すに過ぎぬものと考へて居るが遂には其中に呑み込まれて仕舞つて、自分も實利道德學者になつて仕舞ふ。實利道德は「各人が自分に有利なことを爲せ。然らば總ての人の幸福は最善に繁榮せん」と云ふのである。此の道德は英國以外に受け入れられるものではない。これは實に飽滿者の哲學とも言ふべきものであらう。

勿論英國人は自分の利益と衝突しない限り他の總ての人に幸福の及ぶことを拒むものではない。饑餓者及び失業者の幽靈を英人は出來る限り自分から遠ざけようとして居る。且つ又功利主義的利己主義の支配下に於ては誰も皆將來に對する希望を以て自から慰めて居る。其希望は他日如何になるか解らぬのであるが、希望でもつて自から慰めて居るのである。

確に英國人の間には善行とか一般利益の追及と云ふことがないと云ふ譯ではない。然し其追及は日常生活の外にあるものであり、勢力ある哲學の外にあるものである。時々此の英國哲學も漸次利己主義から利他主義に移りつゝあると主張する人もある。確に英國にも他の國々と同樣に利

他主義と云ふ言葉と其概念が輸入されたのであつた。しかし利他主義は英國心理學から發達した同情道德と同樣に、英國民の思想の中には成長し得なかつた。卽ちロックからベンザムを經てハーバートスペンサーまで、上述の利己主義的功利主義から功利主義的利己主義まで一直線に進んで行つて居るのである。前者は利他的目的を持つては居るが、その目的は利己主義的動機と離れることの出來ないものである。後者は有利なものなれば自分の用に供するのである。これはスペンサーの「人類對國家」なる言葉が最もよく此の特徵を示して居るのである。

此の樣に日本國民の全一的態度と英國人の個人的な功利主義とを比べて見ると此の思想が我が日本精神よりは小さいものだと云ふことを知ることが出來るであらう。此の功利主義は明治の晩年に大に模倣せられ唱導せられたことがあつた。そして我が國を目して東洋の英國などゝ云つた時代もあつた。そして自覺することゝ利己的になることゝを同一視した時代もあつた。然し我が國は建國以來名分を正すことゝ沒我の實を示すことをもつて國民思想の中心として來たのである。

然もこれが理想であり同時に實際的要求であつた。英國人の如く實際と理想の調和にそんなに努力を拂ふ必要はなかつた。勿論此の理想であり實際的要求であつたものを、利己心から壞さんとしたものがないではなかつたが、かゝるものが出るに從つて、我が國民の理想と實際的要求は

猛烈に反撥して來たのであつた。

英國人は富と支配力を求めるためには大義も名分も捨て去つた。虚僞も詭辯も嫌ふ所ではなかつた。此の二つの存する所に善があり幸福があるとしたのであつた。君の爲め醜の御楯となる個と云ふものについては彼等の考へ及ばない所である。我が國は宇宙に充滿せる皇道の宣布の使命を負ひて居るのである。從つて常に先づ理想を振りかざして進み行き物質を征服して行く。常に物質に支配されるのではない。天皇を中心として皇道を宣布して行く所に善があり幸福があるのであつて、單なる富や支配權を得ることをもつて最終の目的とするものではないのである。富や支配權のみを目的とする所には飽くことのない利己的行動が行はれ日の沒することなき大殖民地を有し世界に冠絶する貿易の權を握つて居ても、これが一部分を犯さんとするものあれば國力を賭して倒さんとするに到るか然らざれば好辭を設け僞瞞とペテンでもつて相手を倒さうとする。軍縮とか平和とか云ふ好辭でもつて現狀維持を企て、あくまで功利的利己主義を滿足せしめんとして飽滿者が飽滿を克ち得た過程たる功利主義を主張するのである。

皇道の宣布者は此れに異なる。自分の利益が同時に他人の利益となる如き道を求める。自他共存共榮の途を求めるのである。征服や搾取や奪取を企てはせぬ。此の自他共存共榮の道を明にせ

んために儒教を使用した。佛教を道具として來た。今又西歐の思想を其道具にして使はんとして居るのである。

然るに道具敗けして西歐思想に使はれんとして居る多數の我が國民のあることは實に歎はしいことである。これを評して奈良朝坊主と云つてよい。奈良朝坊主は佛教に使はれて仕舞つたのであつて、佛教を使ふことを知らなかつた。同樣に西歐思想に使はれて、これを使ふことを知らぬ多くの人のあるのを悲しむものである。

英國のマンチエスター學派の人々が諸外國の思想を取り入れこれを補正しつゝ實利主義を說き實利道德を主張した如く我が國は儒佛二教を取り入れ西歐思想を取り入れ、これを補正しつゝ自他共存の方法を明にする皇道の宣布に勉めたのである。英國思想に似た所があると云へば思想の確立の道程は似て居るかも知らぬが目的とする所が全然違つて居るのを見ることが出來るであらう。

滿足した豚が、此の滿足を續けんがために平和軍縮を主張するか如き醜き業は自他共榮の皇道の下にはあり得ない。自他共榮の途を踏むためには沒我の行をするのである。此の沒我の行は歐米人にどれだけ正しく理解せられるであらうか。

英國人は功利的利己主義でもつて解釋するであらう。伊太利人は日本人の愛國的激情の現はれに過ぎぬとするであらう。佛蘭西人は功名心の滿足位にしか考へないであらう。而して此等の諸國民の思想は常に自分と云ふものを抜きにすることが出來ず、それ〴〵の途を取つて自己完成にのみあへいで居る狀を眺め、彼等の行きつまりを見る時に、自他共榮の道に精進して來た皇國思想、卽ち日本精神の雄大さが如實に窺はれるではないか。

自他共榮の道は清明である。不透明な所はない。汚れはない。此の穢を拂つて齋戒し清明心をもつて、日本精神實現のために、我等の祖先は捨身になつて活動したのであつた。富を得支配を得んとして努めた人間を排したのであつた。

列聖又自他共榮の業を如實にされんために敎を垂れ、德を樹て、政を敷かせられて來たのであり、我等の祖先は此の敎を實現せんために忠孝の道に勵んだのであつた。制海權を得領土を獲得せんがためのものではなかつた。

我が國民がよく三韓各國を夫々に樹立し、それ〴〵の特徵を發揮せしめたことを思へ。夫々の國の文化を壓しつぶすのでなくて、よくこれを取り入れたことを考へて見るがよい。領土として支配權を得、搾取によつて富を獲ち得んがためのものでなかつた所によく日本精神が輝いて居る

ではないか。

此れを英國が世界各地に殖民地を克ち得て行つた經過と比べて見るがよい。其處に大きな相違のあることに氣付き得るであらう。個人の自由を最大級に主張する英國民は他國民の自由を如何に最少に壓縮したことか。印度を見よ。南阿自治領を見よ。

然しながら我が國は英國から少なからざる影響を受けて居るのを見る。かくの如く英國は利己主義の旗をかざす國民であり、總てのものを個人的利益と自由から割出して來る英國民ではあるが彼等の作りし大憲章と議會制度卽ち立憲思想なるものは、實に此の國民の中から出たのであつた。此の制度に關する思想は佛國に生れ、此の制度は英國に生れたのであつたが、此の制度は佛國に移り獨逸に移つた。

我が國は　明治天皇の御叡慮により、國體を明にし臣民の權利と義務を明にし、政治の根本方式を明にせんがため、欽定憲法が發布せられた。固より我が建國以來の國民精神を基礎として立案せられたものであるけれども、直接に間接に此の英國よりの影響と云はねばならぬ。

然しそれは時勢の進運に伴ふて我が國體の精華を發揮し行くための政治的根據を明にせられたものであるから、制度は模したりと云ふも、その運用上の指導精神が英國精神であり獨逸精神で

あつたりしてはならぬ。あくまでも日本精神をもつて指導の原則とせねばならぬ。

第四章　英國思想と我が國民思想

第五章　獨逸哲學

第一節　歐洲新思潮の概觀

何と云つても歐洲に於ては、思想發達の最後を飾るのは獨逸である。思想生活が宗教から獨立し、統一されんとする度に出會ふ障害は愈々此の思想生活を明にするのである。イタリー人が文藝復興當初取扱つた古代の藝術とか科學から得た暗示から近代の精神生活や科學が勃興して來たのであるが、吾々が此の暗示に親しんで居たならば、宗教戰爭とか政治的戰爭が此の世界に與へて來た影響をもつと變化さしたに相違ない。又全體として見る時は極めて僅かであらうが、その爲めに非常に優れた人格者が出て來たであらうと云ふことは想見に難くない。何となれば近代思想は宗教の中で改革運動をやつたのであり、中世の傳說と近代精神の相爭ふ戰爭の演劇場がドイツであることを考ふれば次の如く述べ得る。

三十年戰爭は永く獨逸を動搖せしめた。其係爭國の間に何等の決定的勝利を導き出さなかつた。そして花咲く獨逸の文化を壞した。獨逸人が久しい間かゝつて建設した經濟的繁榮も精神生

活の高上も、此の結果叩き壞かれて仕舞つた。中古の敎會と近代の宗敎的意識の間に存した疑の如く、文藝復興運動の起つた當初から、獨逸の地には新文化の重要な要素が生まれ、それが最高點に達したのであつた。然しながら新文化を構成する上に決定的なものとか、眞の平和に貢獻するものは造り上げられなかつた。卽ちそれに依つて歐洲各國民が哲學的發達を遂げ得る指導的な巨燈となる如きものは出來上つたのではない。

イタリーに於ては文藝復興の新運動と同時に哲學も又大に興起したのであつたが、法王が直接的な權力をもつて世を支配して居たので、哲學は早くから恐ろしい結果に到達し、新しい力はすつかり苅り取られて仕舞つたのであつた。エズイタ派が根據として立つて居た煩瑣哲學なるものは此の新運動により非常に改革せられた。そして其地位を改むるに到つた。何となればエズイタ派の人々も、新科學は敎會の利益のために必要なものとし、害なきものとせねばならなくなつた。又一方哲學に於ても又自から敎會により其自由を保護せんとしたのであつた。

これは卽ち佛國に起つた新しい科學の進行の過程である。此の新科學の表明せる點は實に偉大なる思想家デカルトによつて爲されて居る。卽ち十八世紀に完成せられた敎會の權威に據つて建てられた世界なるものは拒絕せられた。デカルトの哲學から出て來た徹底的な物質的思考方法は

世を支配するに到つた。其處でイタリーに於ける場合とは反對に宗教上の利益を代表せる教會に對し現世的な哲學が勝利を占めた。此の勝利を得た哲學なるものはやがて自から分裂するに到つた。此の分裂は事實上、全く新らしい基礎の上に立てられた組織を救はんとする目的のあることを意味して居る。唯物主義に反對せる著明な闘士ルソウも此の仕事を完成することが出來なかつた。又英國と歐洲文明を代表せる第三國に於てはローマ教會との分離から哲學の發達を將來して居るのである。此の英國教會なるものは政治的創作であつた。

此の英國の教會にあつては宗教に代つて、良心なるものが政治的權威と結合せしめられて居るのであり、良心と外的權威と結合せしめられて居るために、知と信とを結合する帶を缺いて居た。政治的要求から出て來た國立教會に對する從屬は外的に要求し得るのみのものである。此の種の强制は良心の强制を要求し得ないのである。かくして英國教會は、一部は此の教會の禮拜に參加することが社會的な義務であると皆が考へて居ることゝ一部は個人的な信仰上の要求から、無數の教派に分れるようになつて來るのである。此の樣な動機から英國哲學の一般的方向なるものは事實問題と科學に於ける實際的取扱の問題となつて來たのであつた。宗教は此の哲學以外の問題を取扱ふにあるとしたのである。

第二節　獨逸哲學の特徴

此の樣に概觀して行くと此處に獨逸哲學の特徴を見出して行くことが出來る。獨逸哲學は宗教革命以前から獨自に發達の途を辿つて居たのであるが、此の宗教革命と密接に關係して發達の一路を走ることになるのである。此の宗教革命なるものは英國に於ける長老派教會が建設されたのとは事情を異にして居る。

卽ち政治的な現世的な目的から起つて來て居るのではない。强力な權力によつて支配せんとするのでなく、寧ろ國民の要求として起つたのであつた。其代表者には政治的な力はなかつたのである。後には政治的に勢力のある大諸侯に保護を受けたのであるが政治的には無力の人々であつたと言はなければならぬ。

然し宗教革命の動機なるものは純粹に宗教的なものであつたのである。故に個人の宗教的要求に應ぜんとする傾向、個人の要求する如き宗派を構成せんとする傾向は獨逸にも到る處にあつたのである。此の傾向は英國の如く政治的に强大な力をもつてしても脫れることの出來なかつた所である。此の分立せんとする意義ある爭は宗教革命の權威となつたのである。

此の爭は純粹な宗教的動機から出て來たものであるから後に宗教運動が統一的なものとなつて殘つて行くのである。此の樣な理で宗教は國民の思想及び生活の中に浸透して行くのである。卽ち王と法王との聯合に依つて示されるものである。佛國に於けると英國に於けると何等の差をも示して居ないのである。此等の國に於ける國立教會なるものは我儘な造物者の性質をなくすることは出來なかつた。

然しながら宗教革命により生れた宗派では、特に其始めのものは、宗教的迷信があり、又本來それによつてかゝる宗派が出來たのであらうけれども、科學に對抗すべきもの、又は少くとも科學を對等に扱ふべきものとした。然し獨逸の宗教革命は全くこれと相反して居る。宗教革命家は優れた神學の教師であつた。其當時の神學は主として煩瑣哲學的な名辭主義から出來て居たのであるが、そして特にメランヒトンの如きは此の神學の立場から其當時の新教徒の中學に於ける哲學科を保護せんとした。然も當時は今日分立して居る種々の學科は一つのものとなつて居たのであり、哲學の他に何も學科はなかつたのであるから、哲學がなければ神學もないのであり、此の哲學的研究と結び付いて居ない神學とてはなかつたのであつた。

此の樣な關係は十八世紀の終りから十九世紀の始めまで獨逸國には續いた。カントでもフイフ

テでも、シエリング、ヘーゲル等の如き人々でも始めの中は此の神學研究の課程を踏んだのであつた。

かくして獨逸哲學は宗教及び宗教と密接に關係して居る形似上學的問題が豫件となつて出來て居るのであることを理解し、それが獨逸哲學の一般的特徴となつて居ることを理解することが出來るのである。此の宗教的興味と形似上學的興味を結合して獨逸精神に一定の方向を與へた。最も完全な代表者はゴツト・フリイド・ウヰルヘルム・ライブニツツである。彼は此の世の指導者であり、永い間多方面的に努力した獨逸第一の指導的哲學者である。もし天才的な處も古代文藝復興の時に現はれた個々の孤立せる思想家を除外するならば、勿論第一の獨逸思想の指導者であると言はねばならぬ。彼に於ては彼の長所とせる所にも又、彼の短所とせられて居る所にも獨逸精神が躍如として出て居るのを見る。

第三節　獨逸精神指導者としのライブニツツ

獨逸文化の獨立を永い間拒み來つたものは、何と云つてもあの恐ろしい宗教戰爭の結果であつた。從つて此の時代の終りに生れたライブニツツも又此の結果を背負はされて居るのである。彼

は英國のニユウトンや其一派並に哲學的代表者ロツク及び佛蘭西のデカルト哲學に對して戰つたのであるが、其科學的勞作の良き部分に彼が專念したとすれば、彼は、彼が述べた樣に多くの人々が中世煩瑣哲學の束縛を脱せんとして得た時勢の恩惠を受けて居る諸國を羨み又驚いたことであらう。彼は次の二つの戰で今日確立せる如き勝利を得たのである。卽ち其一つは微分學發見のため英國人と爭ふに當つては、彼の方法、及び其方法の普遍的基礎につき勝利を得たのであつた。其二つは彼が所謂「力の量」に關する佛蘭西人との爭に於て、彼の觀察方法なるものは從來人々の誤信して居た考察方法の芽を取り去りしのみならず、根本思想の把握卽ち新らしい自然科學に最も效果ある原理、卽ち力量保存の原則を發見し、これを明瞭に組織したのであつて、佛蘭西人に對して決定的な勝利を得たのである。同時に彼は其主要著述を佛蘭西語で書いたのであつたがそして獨逸語の粗雜なることを辯じたのであつたが、當時外面的に哲學を國際的のものと考へて居たのを變じて、民族的な獨逸哲學として現はしたのであつた。

彼は其一つの特徵として外國に適應することの出來る異常な能力を持つて居たのであるが一面に於て彼は强い國民的自覺を持つて居て其間に平衡を得たのであつた。然しながら此の平衡の缺けて居る場合にはそれが憎むべき弱點となつて居るのである。

此等の點についてはライブニツツは出來るだけ無關係であつた。スコラ的なラテン語が獨逸科學に一般に用ひられて居た時代に、彼の獨逸語で書いた書物は、將來獨逸語は科學や哲學の用語となるであらうと豫言した。そして爾餘の諸國語の上位になるであらうと豫言したのである。其上暴若な征服慾を有するルイ十四世の「キリスト教主義の神軍」なるものを、其書物の中で彈劾し且又獨逸諸侯をして統一せしめこれに當らしめたのであるが、此の愛國者を眞に缺點ありとして非難する人はなかつたのである。

彼の興味は尙民族の上に進められて行つた。もし總ての國民の考を唯一の大なる基督教的社會に統一せんが爲めに、宗教的紛亂を解くことを最後の目的として設定したのであつた。そしてかくの如き解決を最後に爲し得るものは科學であり、科學こそ眞の平和に導くものであるとしたのであつた。勿論此れは彼の一生の中に於ける大きな錯誤であつた。然しこれから彼がベルリン大學の根柢をウキイン及びペテルブルグに於ける如くにせんとする思想が出て來たのである。

卽ち此の計畫は獨逸國をして科學上の三明星たらしめんとしたのであつた。卽ちベルリンをして、ロンドン、パリーの如く科學藝術の淵叢とし其社會をしてロンドン、パリーの如くに進めんとする希望を持つて居たのである。當時ペテルブルグに於ては獨逸の科學のみありとなしペテル

ブルグ大學は宛然獨逸の一大學であり、組織、性質用語まで殆んど同一であつたからである。

政治家としてのライブニツツは、其國際的努力によつて、獨逸國の利益を大に進めた。勿論其時代の紛亂せる關係について云ひ得るのみであるが。それと同樣に彼の哲學的世界觀は既に來るべき世紀に於て獨逸哲學を大に發達せしめる指導的思想を含めて居たのである。

彼が原子論及び人間悟性に關する研究論文を佛蘭西語で出版したことは、其哲學が國際的哲學としての精神を有するものなることを示すものである。原子論は古代獨逸神秘主義の特徴を持つて居る。其特徴のある思想組織の論理を調和的な組織に統一したことは眞の獨逸的創作物であると云ふことを得るのである。

人間悟性に關する諸論の中に於ける、ロツクに對する反駁は、辯證的な形で、將來に決して現はれることなき、思想の民族的對立を活潑に示して居る。彼は統一されて居る實在を、神と此の世、精神と肉體と云ふが如き一致することの出來ぬ佛蘭西流の獨斷論に反對したのであつた。又感覺世界と外的な功利とを主因として發達して來た英國流の現實主義に反對して來た。彼は實在の統一なるものは哲學的思想の止揚することの出來ぬ要求を有するものと考へた。此の要求から「人間精神の本質は世界の運行と其規を一にせるものであるから、事物の本性は精神的實在とし

て考へなければならぬと云ふ命題を作り出した。

かくてライブニツツは獨逸哲學の有する理想主義の建設者となつたのである。此の理想主義は次の時代には種々の形で受け取られて行つたのであるが、一部分は彼の立てた道を遙かに遠くへ進んで行つたのである。かの精神界に於て、世界の本質夫れ自からが現はれると云ふ思想は其後にも獨逸哲學には殘つて居るのである。此の獨逸哲學の建設者であるライブニツツの思想の他の部分は今日でも大きな影響を殘して居る。夫は卽ち世界調和の思想である。此の世界調和と云ふ語は彼の言つた言葉ではない。彼以前の大天文學者であつて、天體運行の法則を發見したケプレルの言つた言葉である。ケプレルには尙神秘の暗に漂はされて居た思想を、ライブニツツが始めて哲學的原理の明るみの世界に持ち出して來た。卽ち總てのものが徹底的に相互に關係せんとする要求は、普遍的なものゝ一部と關係せる存在物の精神的統一によつて基礎づけられる。彼には調和的組織が世界であつた。何となれば自然的法則それ自體が精神的法則であつたからである。目的思想が認めし總てのものに通ずる法則であり、それが力量保存の法則をも支配するとして居るのである。

物質界並に精神界を支配する法則が精神生活の法則であるならば、然れば自然なるものは單に

現象に過ぎないのであり、其自然の背後にそれに相當する精神生活が埋れて居る理である。そして其精神生活なるものは、吾々が自から直接に見出すべきものであり、吾々の精神の中に見付けなければならぬとした。

故にライブニツツから云へば人間の精神は小宇宙であつた。此の小宇宙は大なる世界、即ち大宇宙の本質が包攝せるものであるとした。世界は精神的本質、即ち種々のモーナードから成立せる一つの系統であるとした。此のモーナードは無限に繼續するものであつて、生命のない自然の暗い表象から漸次に明瞭に表象せられ、努力して居る人間的な精神に高められるのであり、遂には神の表象にまで高められるものである。故に各モーナードは全世界に於て自から暗きものとなつて働き或は明かなものとなつて働くのである。然しながら總ての各精神的な統一體は、かの普遍的調和なるものを合成するとした。即ちライブニツツにあつては古代接神術者の有せし暗い神秘的表象に明るい概念的な表現を附與せんと試みたのであつた。

彼に從へば世界全體の調和及び其部分の調和の中にある場合には各部分が永遠の價値を有するのである。これによつて人間の生活と行爲に精神的調和を生ぜしめるのであり、認識（知識）と意志とを融合せしめ、道德と宗教とを融合せしめるのである。そして此等は遂に道德的精神を負

ふて居る法規並に人道と云ふ一般的法則の中に其表現を見出した。此處に於て民族間の國際的交通が出來上るのである。此れがライブニツツの與へた思想であり、根本思想である。然も根本的直觀が殘す疑問に出會ふ所である。此の根本的直觀なるものは今日の獨逸理想主義が尙支持して居るものである。彼は此の方向を取つて、終ることなき哲學問題を解決せんとして絕えず新らしい研究を試みたのであつた。

此の理想主義なるものは、ライブニツツに據つて生活上の實際問題と其理論的な世界觀とが密接に結びつけられたのであり、彼には宗教と道德とは必然的に全體を構成せるものなりと考へたのであつた。彼が生前には勿論無效であつたが、然し彼はクリスト教會と信條の融和、再統一に大に努力したのであつたが、それと同樣に、彼の哲學的著述は宗教と哲學を統一せんとし思考の要求と、自由な世界觀から得られる良心とを統一せんことを目的として努力して居たのを見るのである。彼は原子論の教で此の思想に形似上學的根據を與へんと努めた。其原子論に於て總ての獨立せる存在及び夫等の相互關係に對し調和的全體と關係付けた精神的統一體に立歸るべきことを求めた。彼は其精神的統一體の最高のものを神なりとし、此の思想に形似上學的根據を與へようとしたのである。

同樣な意味から彼は宗教も道德も兩つながら相關的に獨立して居るものとした。然し此の兩者の最も內面的な本質に於ては一つの精神的全體の相關的な部分に相當するものとした。そして彼はロックやホッブスの外面的な功利主義に反對して、法律なるものを道德的秩序なりと解釋したのである。假令それが一般的な世界秩序の中に置かれた規定であるとしても法律の中には正義、明白、敬虔の三つの觀念をもつて充さなければならぬものとして居るのである。

此の古の獨逸の大哲學者は、哲學の言語形式と思考內容が如何に親密に影響し、相互に結合して居るかと云ふことを示して居る。ライブニッツ自身は其著を現はすに一部分はラテン語を用ひ他の一部分は當時の國際語であつた佛蘭西語を用ひたのであつた。彼が其著述に纒はしめた外國服は彼をして國際的思想家たらしめた。殊に佛蘭西の文獻をもつて說明することを必要としたのである。彼が微分學の發見に當つてニュウトンとの間に惹起した爭に對しては佛蘭西の學者は徹底的にライブニッツに加擔した。然るに英國の學者は合理的に其國の偉人ニュウトンに加擔したのであつた。尙此の關係の低きさゝやきの聲は靑年の心の中に存するのである。

國際學術委員會の席上で、佛蘭西側の人々は、歐洲の學者社會の贊成を得てライブニッツの著作を全體の問題にせんとする動議を提出した。然し佛蘭西人の間にはライブニッツの樣に哲學上

の思想を統一せんとする企は起らなかつた。獨逸の宗教改革は、獨逸の神秘、就中深き藝術は問題となり、活潑な作用を續けて居るのである。

佛蘭西ではボルテールが獨逸哲學者の宗教的統一を爲さんとするを嘲りライブニッツが攻擊した問答主義と夫れから出て來て居る過去の唯物主義の潮流が其地位を得て居るのを見るのである。

然し獨逸にては、彼の影響は次代には制限せられ一方的なものとなつた。其理由は彼の哲學を了解する爲めに缺くべからざる重要な書物が、彼の死後永く公けにされなかつたとの理由によるのである。然し此の哲學の思想の組織は、彼の同時代の人で彼が攻擊して來たスピノーザの思想の組織によく似て居る。卽ち其時代や其次の時代に來る標準よりは一步進んで居るのであるからライブニッツ哲學をよくわかる樣に受け取り更にそれを廣く建てゝ行くためには先づ其時代から述べて行かねばならぬ。

何となれば其時代には彼の哲學は生れたまゝの形で存在して居るのであり、彼が個人として廣めた思想により影響があつたに止まるからである。然しながら十八世紀の中世にはレッシング、ヘルデル、カントまでライブニッツの影響を受けて居るのである。

然るに此の大哲學者と同時代の人々、及び不當にも彼の學徒、彼の後繼者と云はれて居る人々カント出生前の人々、近代的な獨逸理想主義の發達が獨逸哲學を支配するに到らなかつた時代の人々は此れと全く事情を異にせるを見るのである。

即ち彼等が過去の佛蘭西思想や英國思想から獨立して居ること、並に一部分は全く獨自の源泉から其說を立てゝ居ると云ふので非自立的な折衷說に墮して行つたと云ふことは遺憾なく過渡期の特徵を示して居るのである。

唯ライブニツツに歸ると云ふことは獨逸文化の一つの特徵を作つて居るのであり、宗敎革命以來の獨逸の思想史と密接に關係づけて居ると云ふことが獨逸文化の特徵を爲して居るのである。即ち此の傾向は宗敎的傳說と思惟する理性の調和を得んとして起つたものである。夫でライブニツツの言つた意味からすれば、目的觀念、夫を基礎とする世界調和の考は樂天的な哲學に向つたと云ふことになる。勿論此の考はライブニツツの意味したものと反對のものなることは言ふまでもない事である。全く變つて居ると云つてよい。殊に此の時代には目的と云ふものが外的な勝手な秩序を得るための原理となつた。即ちそれは創作物の中に働いて居る神の意志に歸る事を指導

するのであり、人間に對する利用性の中に造物者の第一目的としての規制的な規範を見出す樣導くのである。然るにライブニツツにあつては、目的をもつて物それ自身に內在するものとしたのであり、事物の中に目的それ自身の本質が存し、其中に自己發展の基礎があるとしたのであつた。

此の神學論を代表する者であり然も最も大きな影響を與へたものはクリスチヤン・ウオルフである。彼は經驗を基礎として英國の功利主義に關係づけ人間の行爲を形似上學的な英國に移したのであつた。其處で彼は自然的な必要から全然非哲學的な素朴的目的觀に墮落せねばならなかつた。目的觀に於て然る如く、ウオルフや其學徒は總ての方面に於てライブニツツに影響されたよりも寧ろ過去の佛蘭西哲學、英國哲學の影響を受けることが大きかつたと云はねばならぬ。一般に彼等はデカルトの自然現象の說明を模し其後の自然科學の進步により、殊に物理學の進步により、即ちニウトンの引力の法則により必然的に補成せられたのであつた。殊に彼等はデカルトに從つて精神と身體の關係についての敎を附け加へたのであつた。此處で彼等はライブニツツの爲せる思考組織の理想主義的中核を投げ捨てたのであつた。

即ち彼等は精神現象としての原子の觀念を捨てたのである。モーナードの槪念を一つの精神的な槪念としたのであつた。唯外的關係から肉體的現象世界を生產する本質とした。それは此の槪

念を二つのもの、即ち考へられるもの、擴がりを有するものとする二原論に立ち歸らんがために
かく引き戻した。そして此れが正明な理解を得るためにはよりよく適合して居るものとしたので
ある。

此れに反して認識論に於てはロックの經驗哲學を追ふたのであつて、既にヒユウムを評價する
に到つたのであつた。此等の他に獨逸後代の說明哲學はシヤフツブリイに從つたのであり、其影
響は彼の故國たる英國よりも、此の時代には、より多く美學の上に倫理の上に影響したのであ
る。

此の外國哲學に徹頭徹尾賴つて居た時代に、美はしい文學の發達が起つたのであつた。然しな
がら一方に於てはゴツドシエツド及び其一派があつて佛蘭西文學を模範として模倣したのであつ
た。又瑞西の美學者ボドメルは其徒と共に、此等に對抗して英國の詩を選んだ。即ち其時代の民
本的であり、宗教的であつたミルトンを主要な代表者として選んだのであつた。此の時代の哲學
上の折衷主義が爭つた方向と同方向を取つて、此の時代の文學も又劇しい爭をした。其方向と云
ふのは一般にデカルト主義の形似上學とジョン・ロックの經驗主義の折衷であるが、それから野
を爭つたのである。唯此の時代に於て一つの例外であつたのはライブニツツの精神が影響を與へ

た道德哲學のみが次代の獨逸哲學を發展せしめる基礎となつたことである。

既にウオルフの倫理學の中では義務の概念を道德の總合的な建設を爲し得るものとして決定的
に持ち出して來て居るのである。然しそれがために彼が此の說明の指導者となつたのではないの
である。彼の嚴密なる義務論は、彼の取りし折衷主義的組織の中にある然らざる假定と共に影響
を與へて居る。此のことが來るべき時代に、獨逸精神の自立的發達を促すと共に新哲學へ推移を
始めしめる決定的なものとなつたのであつた。此の推移があつて始めて十八世紀の獨逸通俗哲學
を打ち建てたのであつた。此の通俗哲學は最も手近に橫はつて居る審美問題と倫理問題に關する
通俗的な興味に關係して居るのであり、それに應ずる文學の流について謂へば、英國文學が勝利
を占めたのであると謂ひ得るのである。

故に哲學には少なからず詩の例が取られて居るのである。即ち來るべき時代に其光を投げる新
らしい星が此の後代の說明を照らして居ると云ふ如き詩の例が伴ふて來るのである。

かの淸教徒の宗教的な詩、教訓的な詩の模範は、遙か後代まで照らせし光り輝く明星シエクス
ピーアに歸せしめられた如く、哲學に於ては特にシヤフツベリーとヒユウムが後代に非常に大き
な影響を及ぼした。殊にヒユウムの如きは後代の人々に大きな影響を與へた人であつて、其故國

なる英國人は固よりのこと、知的說明を拒斥せるルソウにも大きな影響を與へて居るのであり、又ハムマン、ヤコビー、ヘルデル等と云ふ人々に對しても大きな影響を與へて居る。カントの如き人でも此の影響から脫れることは出來なかつた。

然しながらヒユウムが古代の獨斷的哲學に反對して取つた批判と云ふことは一つの有意義な轉廻である。カントは同時にこれに反對して反對的な批判をしたのであるが有意義な轉廻である。卽ちヒユウムが認識問題を道德問題と對抗せしめたのであつたが、此れは經驗的な心理的な立場であるとし不充分であると示し、反對批判をしたが實に有意義な轉廻であると云はねばならぬ。

故にカントもヒユウムと共に從來の哲學を疑ふ價値あるものとして見たのであつた。然しカントはヒユウムの立場を支持すべからざるものと證明し、ヒユウムの著作に現はれて居る經驗的心理主義を轉換したのであつた。かくの如くカントは從來のものを根據として新らしい獨逸哲學を民族發展の系列に於ける最後の哲學と云ふ高いものに引き上げたのであつた。卽ちカントの言葉をそのまゝ言へば指導的な民族は最初はイタリーで次はフランスで、其次に英國で最後が獨逸であると云ふのである。然しながら一時世を動かしかけたマルクス主義や其他露西亞思想については何も言つて居ない。然しながら此等の思想は我が日本に於てはよく統合せられたのであり、獨逸

哲學のみならず支那・印度等の系統を異にする思想哲學を文化內容として持つて居る我が日本精神がやがて世界指導の役を爲すべき時となつて來たのである。

然しながら民族精神についての研究にはヴントを以て今日でも第一人者とせねばならぬが、ヴントはとにかく獨逸的自立的精神をもつて哲學を改造し新らしく文化指導の權を握るを得せしめたものはカントであるとして居る。

第四節　カント、フイフテについて

私は玆に充分にカントやフイフテに付いて論ずる資格のないものであるが、淺見のまゝをヴントの前記の書物につきながら見て行き獨逸精神の流を見て行くことにする。

ライブニツツの眞の意味を認めたならば吾々は必然的にカントに移り行かざるを得ぬ。勿論永い間彼の一派と稱せられたウオルフ一派のために眞の意味から外れて居たのであるが。哲學がカントに歸ることを見出した狀態は彼の哲學の影響が決定的であつた證左である。此の時代と云ふのは十九世紀の中頃民族の興起を妨げられた後のことであるが、それは決して民族を强大にせんとする風潮を棄てたものではない。此の時代には自然科學研究の大勢に哲學研究が拒まれたに過

ぎないのである。卽ち認識論的な問題に對する興味が拒まれたのである。自然主義的な潮流、卽ち自然研究の結果のみが哲學に對しても標準となるものなりとすることに反對する人は、カント流の批判を此の唯物主義を救ふ救濟者であると認めるに相違ない。此の唯物主義は一部に變つた自然科學的衣裝をつけて居るのであるが然し十八世紀の唯物主義以上に出ることはない。其當時の眞の姿はアルベルト・ランゲの唯物主義の歷史に現はれて居る所である。ランゲはルウドウイヒ・フォイエルバツハによつて準備せられ、殊にヤコツブ・モルショツトやルウドウイヒ・ビツヒナーが代表して居る獨逸唯物主義に對し反對する樣な無情なことは決してしなかつた。けれどもそれはカントの創設せる客觀的批判主義から決定的影響を受けて居るものなることは見脫すことは出來ぬ。

同時に彼は其の準備となれる如き書物を著はして居る。此の時代の一つの潮流であつた新カント主義者は其根本的著作である純粹理性批判やカントの倫理を觀察しなかつたのだと批評することが出來る。且又夫等の著作には特に次の如き構成を持つて居た。卽ち數十年も以前に既にショウペンハウエルが認めた所のものであり、夫れだけで組織せられて居り、發問に値する意味のない範疇論とそれと結びつけられた自然法の演繹と先驗的理念の批評と云ふものが主要構成分とな

つて居る。此れは其當時の人々や次いで出て來る時代の人々を惱ますものであつた。

カント自身の斷言、卽ち認識能力についての彼の批評は、彼には、道德を新しい確かな根柢の上に打ち立てやうとする道程に過ぎなかつたのであるが、それには殆んど注意されて居らぬ。

此の關係はカントが道德哲學、宗敎哲學に於て示したかの告白よりも、又更に彼の爲せる理論的準備著作よりも一層了解し易き意義を有するものである。彼の認識論が問題を一方面に制限したとすれば、彼は主として認識の形式的條件、卽ち時間及び空間、一般概念の形式的條件の研究は其內容となるものを、カントは此等を感覺の素材と名づけたのであるが此等は無規定な或る者として扱はふべきものであり、先天的能力が此處に働かされねばならぬ場合には、其先に存在するものであり、此處に設定せられた問題とは全然別のものである。然も其處には未だ徹底的に證明されて居ない豫定の存するものである。

實にカント自からが主張した直觀形式に關する概念と此の感覺內容の結合なるものを見れば其中に內面的な矛盾の存するのを見るのである。此れを通して認識論の最後の最も重要な問題、卽ちかの形式と此の內容の關係の確定と云ふ重要問題が從來から除外せられて居るのを見るのである。それによつて實在が吾々に感覺的に値打のある現象世界となるとせば、其處には眞の實在は